築館町文化財調査報告書第２集

伊　治　城　跡

―昭和63年度発掘調査概報―

平成元年３月

築館町教育委員会

築館町文化財調査報告書第２集

伊　治　城　跡

―昭和63年度発堀調査概報―

平成元年３月

築館町教育委員会

序　　言

今我々の社会は、高度情報社会へと大きく変わりつつあります。人類がこの地球上に出現してから約３００万年と推定されておりますが、社会が形成された頃の「狩猟社会」から「農業社会」・「工業社会」そして「情報社会」へと社会は大きく変化しております。我々の文化が大きく変化したのは約２千年間と考えてよろしいと思いますが、その期間が農業社会であり、工業社会であります。伊治城の年代は農業社会の初期に属し、また日本の歴史を大きく震憾させた城であることは御承知のとおりであります。

文献に残る宮城県北唯一の城が伊治城であり、この研究の歴史は大分古くからありますが、いずれも決め手を欠いておりました。

宮城県多賀城跡調査研究所による調査によって城の外郭を区切る大堀、城内の竪穴住居跡から「城厨」の墨書土器や円面硯・漆紙などが発見され、城を証明できる遺物が出土し、大きく前進いたしました。

本町による調査が始められて第２年目を迎えました。漸く建物跡にせまる区画溝や瓦片などが出土し、大きな希望のもたれる段階となってきました。

調査に当っては宮城県教育庁文化財保護課、宮城県多賀城跡調査研究所、東北歴史資料館からの御指導・御援助によることがまことに大きいものがあり、心から感謝申し上げます。その他地元の方々の調査に対する積極的御協力に心から御礼を申し下げると共に調査第３年目に当る平成元年度の成果を期待しながら、報告書を送る挨拶といたします。

平成元年３月

築館町教育委員会教育長

千　葉　與一郎

例　　言

1. 本書は、宮城県栗原郡築館町に所在する伊治城跡の昭和63年度発掘調査概報である。
2. 本書には、下記の調査成果を収録した。

調査次数	調査日程	調査面積	内容
第５次調査	昭和63年１月18日～２月９日	1,０８０㎡	農道整備事業に伴う調査
第７次調査	昭和63年７月１日～10月30日	1,５００㎡	国庫補助事業
第８次調査	昭和63年11月４日～11月24日	１４２㎡	水道管理設工事に伴う調査
第９次調査	平成元年２月６日～２月12日	５０４㎡	農道整備事業に伴う調査

3. 図版の作成ならびに本書の執筆・編集は、築館町教育委員会社会教育課文化財保護係主事菅原祥夫が、同課主任鈴木正志の協力を得て行った。
4. 遺物整理作業には、築館町ジュニアリーダー諸氏、ならびに臨時職員若生志津子の協力を得た。
5. 地区割は、富野公民館前の任意の点を発掘基準点として定め、この点を原点（０，０）とする直角座標を組んで割り出している。発掘基準線の南北軸は、Ｎ２°－08'－08"Ｗ（Ｎは第Ｘ系座標北）である。
6. 第４図に掲載した地形図は、建設省国土地理院発行の１／25,000のものを複製して使用した。
7. 遺構略号は次のとおりで、各遺構ごとに番号を付した。

SA：柱列跡　SB：建物跡　SE：井戸　SX：その他の遺構
SI：竪穴住居跡　SK：土壙　SD：溝

8. 遺物略号は次のとおりで、各遺物ごとに番号を付した。

A：縄文土器　B：弥生土器　C：土師器（ロクロ使用）　D：土師器（ロクロ不使用）
E：須恵器　F：丸瓦・軒丸瓦　G：平瓦・軒平瓦　K：石製品
N：金属製品　S：硯

9. 土層の色調は、『新版標準土色帳』（小山・竹原：1970）の基準にしたがって註記した。
10. 出土遺物は、可能な限り実測図化して資料化につとめた。また、これから外れたものについては、各遺構ごとに破片集計表に収録した。
11. 図版の縮尺は、遺物を１／３、遺構を原則として１／60に統一した。
12. 調査成果の一部については、既に報道機関や第15回古代城柵官衙遺跡検討会で公表しているが、本書の内容はこれらに優先するものである。
13. 調査によって得られた出土遺物、ならびに調査の記録・図面類は、築館町教育委員会で一括して保管している。

調　査　要　項

1. 遺跡名　伊治城跡（宮城県遺跡登載番号：41007）
2. 所在地　宮城県栗原郡築館町字城生野
3. 調査主体　築館町教育委員会
4. 調査担当　築館町教育委員会　教育長　千葉與一郎
5. 調査員　築館町教育委員会社会教育課文化財保護係　主事　菅原　祥夫
6. 調査協力者　千葉けさよ、鈴木むね子、千葉伝之亟
7. 調査参加者　千葉　寿見、千葉　力雄、千葉伝之亟、千葉　春治、鈴木むね子、鈴木しもよ
   高橋　佐一、加藤　すえ、菅原　光男、菅原　永松（地元作業員）、
   三塚　祐一、狩野　善徳、佐藤　勝行、佐藤　忠美、菅原　信行（築館町役場職員）、白鳥　保守、佐藤　明夫（白鳥測量設計事務所）
8. 調査・報告書作成指導・協力　宮城県教育庁文化財保護課、宮城県多賀城跡調査研究所、東北歴史資料館
   進藤　秋輝、真山　悟、阿部　博志、柳沢　和明（宮城県教育庁文化財保護課）、桑原滋郎、白鳥　良一、高野　芳宏、丹羽　茂、後藤　秀一、村田　晃一（宮城県多賀城跡調査研究所）、加藤　道男（東北歴史資料館）、今泉　隆雄、古川　淳一（東北大学国史学研究室）、伊藤　博幸（水沢市教育委員会）、似内　啓（盛岡市教育委員会）、阿部　正光（瀬峰町教育委員会）、佐藤　信行（日本考古学協会員）、金野　正（宮城県文化財保護地区指導員）

目　　次

序　　言
例　　言
Ⅰ　調査にいたる経過…… 1
Ⅱ　遺跡の位置と現状…… 2
Ⅲ　周辺の遺跡…… 3
Ⅳ　伊治城および
　　栗原郡に関する古代史年表…… 8
Ⅴ　発見された遺構と遺物…… 14
　　第５次調査…… 14
　　第７次調査…… 23
　　第８次調査…… 48
　　第９次調査…… 49
Ⅵ　考　　察…… 50
Ⅶ　ま　と　め…… 56
　　参考・引用文献…… 57
　　写真図版…… 58
　　付編―鹿島堰改修以前の
　　伊治城跡西辺外郭の状況―… 65

Ⅰ　調査にいたる経過

伊治城は、宮城県北の内陸部にある栗原地方を統治するために、神護景雲元年（767）に設置された城柵である。文献上には、この年から延暦16年（796）までの約30年の間に、この城柵に関する記録が６件登場する（Ⅳ参照）。このなかでも伊治呰麻呂が、この城柵を舞台として宝亀11年（780）に起こした反乱は、古代東北史上あまりにも有名な事件である。

この伊治城跡の所在地については、古くから多くの議論がなされてきた。そのなかで、本遺跡はその最も有力な擬定地とされ、主に文献史学の立場から様々な検討が加えられた。[註1)] こういったなかで実施された宮城県多賀城跡調査研究所によるはじめての本格的な発掘調査は、本遺跡の年代観や構造を知る上で、多大な成果をあげている（宮城県多賀城跡調査研究所：1978～1980.3）。具体的には、遺跡北辺の外郭施設は、土塁と大溝によって構成されていること、また遺跡内部には、８世紀末を中心とする時期に多数の竪穴住居跡が営まれたことが明らかとなった。さらに注目すべきものとして、「城厨」と墨書された土器が出土し、この付近に城に係る厨の存在が想定された。

こういったことから現在では、本遺跡が伊治城跡であることはほぼ確実であるとみられている。しかしながら、城柵の主要な機能を担った政庁跡や実務官衙ブロックが未検出であること、遺跡の正確な範囲がまだ確定していないなど、今後に残された問題も数多い。

ところが近年、本遺跡の所在する城生野地区一帯には、開発の波が押し寄せ、除々にではあるが発掘可能な土地が狭められている。このため、本遺跡が伊治城跡であることを一刻も早く確定し、具体的な保存対策を構ずる必要性が生じてきた。そこで、築館町では関係諸機関の指導をあおぎ、国庫補助事業による５ケ年の発掘調査を実施することに踏み切った。

本年度はこの事業の２年度であり、城生野唐崎100、100－２、100－５の水田を対象として、７月初旬より発掘の鍬を入れた、その結果、例年にない多雨に悩まされながらも、城柵内の区画施設とみられる大規模な溝２条（ＳＤ103・ＳＤ104）を検出し、今後の調査への大きな見通しを得ることができた。

また、この他にも本年度は、現状変更に伴う調査２件を実施した。

年　度（昭和）	町　負　担	県　負　担	国　負　担	総　　額
62	５０万円	５０万円	１００万円	２００万円
63	１００万円	１００万円	２００万円	４００万円

註１）：文献史学による立場からの伊治城跡擬定地をめぐる研究史については、『伊治城跡Ⅰ』（宮城県多賀城跡調査研究所：1978．３）に詳しい。

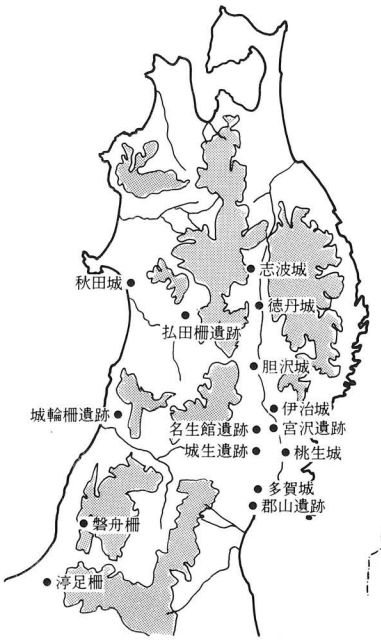
Ⅱ　遺跡の位置と現状

本遺跡は宮城県栗原郡築館町字城生野に所在する。この場所は多賀城跡の北約52㎞の位置にあり、多賀城と胆沢城を結ぶほぼ中間地点にあたっている。

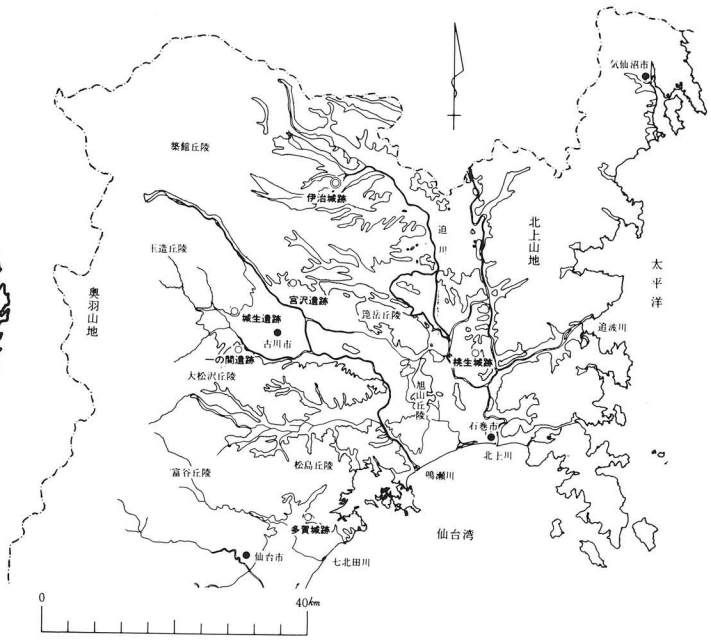
宮城県北部の地形をみると、中央部に北上川が流れ、その西側には奥羽山地が南北に大きくよこたわっている。この奥羽山地は山麓部で多数の河川によって開析され、いくつかの小丘陵に分岐している。本遺跡はその最も北に発達した築館丘陵の末端部と接する河岸段丘上に立地する。

この段丘は周囲を河川、丘陵末端部、さらに小さな谷で画され、独立した地形をなしている。本遺跡の範囲はこの段丘のほぼ全域と推定される。その規模は、東西が約700m、南北は、南辺の位置を唐崎地区と地蔵堂地区を画する沢のあたりと考えれば、約650m、一迫川と国道４号線が接するあたりと考えれば、約900mとなる。上面には黄褐色の火山灰層が厚く堆積し、縁辺には周囲との比高差が約６ｍほどある段丘崖が各所で認められる。現状は、100戸を越える住宅が点在し、それ以外の箇所は、主に水田・畑地として利用されている。

現在残っている遺構としては、台地北斜面に東西にのびる空堀状の大溝があり、さらにその北には、これに接してはしる土塁状のわずかな高まりがある。これらは古代において、伊治城の外郭線を構成していたことが宮城県多賀城跡調査研究所の発掘調査（宮多研：1978.3）によって確められている。また地元住民の話によると、かつては台地西斜面においてもこれと同じ遺構が残っ



第１図　東北地方の主要な城柵

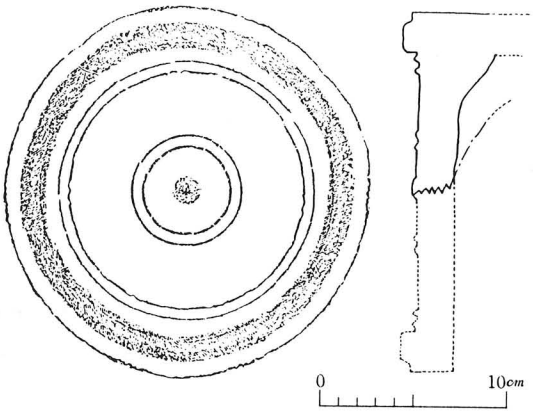


第２図　宮城県北部の地形と古代城柵・官衙遺跡

ていたらしい。しかしながら、開田と鹿島堰の改修のために旧地形は失われ、現在、その所在を確認することはまったくできない(付編参照)。

遺物の散布は台地上のほぼ全面にわたって認められる。その多くは須恵器と土師器が占めており、このなかでも須恵器の量は圧到的に多い。また、瓦の分布も唐崎地区を中心にわずかながらも認められる。

ところで昭和４０年代の前半に、この台地の各所では大規模な開田工事が行われ、その際には多量の遺物が出土した。照明寺の住職であった故松森明心氏が精力的に収集したこれらの遺物は、現在、町指定文化財として一括して保管されている（築館町文化財保護委員会1969・1970.3）。広大な面積のうちまだごくわずかの調査しか終了していない現在、遺跡全体の概要を知る上で、これらは貴重な資料となっている。さて、それによれば、この台地一帯から出土した遺物は、そのほとんどが８世紀末を中心とした１時期のものに集中している。このことは、これまでの発掘調査（宮多研：1977～1979.3）で発見された多数の住居跡の年代観と一致しており、伊治城の存続期間を考える上で興味深い。また、この松森氏収集の遺物のなかには、重圏文軒丸瓦がある（第３図）。これは多賀城第Ⅱ期（８世紀中頃～780）の所用瓦と同一の文様意匠である。



第３図　松森氏集重圏文軒丸瓦

Ⅲ　周　辺　の　遺　跡

本遺跡の周辺には、年代的に近接する奈良・平安時代の遺跡が多い。そのいくつかは、既に圃場整備事業、東北自動車道の建設などに伴って発掘調査されている。これらの遺跡は、本遺跡と直接あるいは関接的に関連すると思われるので、ここでは、その主なものについて紹介しておきたい。

糠塚遺跡は、本遺跡の東約4.5kmの舌状台地上にある。約6000㎡の調査が行われ、奈良・平安時代の住居跡が30棟検出された。奈良時代の住居跡から出土した土器は、宮城県北地方における国分寺下層式の基準資料となり得るものである（小井川・手塚：1978.３）。

山の上遺跡は、本遺跡の南約2.5kmにある。前述の糠塚遺跡と同じ奈良時代（国分寺下層式期）の住居跡が３棟検出された（手塚：1980.３）。

また、本遺跡の東約４kmにある大門遺跡でも、奈良時代の住居跡が１棟、それに平安時代の住居跡が１棟検出されている。

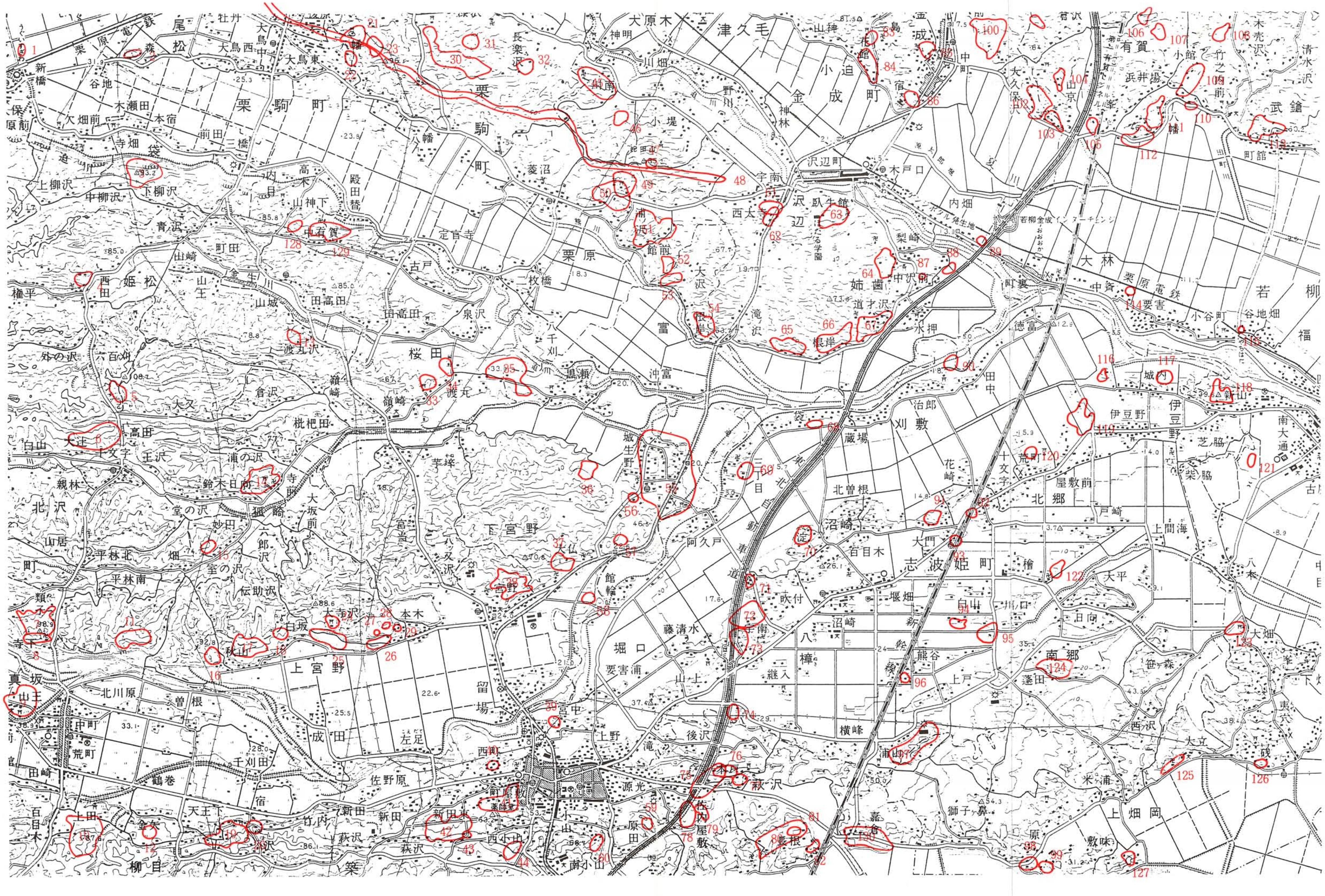
御駒堂遺跡は、本遺跡の南約2㎞にある。調査の結果、41棟の住居跡が検出された。これらは出土土器の検討から、5群に大別され、それぞれ7世紀末ないし8世紀初め、8世紀前半、8世紀後半、9世紀初頭の年代が与えられている。この遺跡でとくに注目されるのは、8世紀前半の段階において、関東系の土器が使用され、また住居構造の点においても関東地方との関連が認められることである。このことについては、関東地方からの人間の移住が想定されており、また、その背景として政治的な意図がはたらいていたと予想されている（小井川・小川：1982.3）。栗原郡の建郡＝神護景雲元年（767）以前に、このような事実が存在していたことは、東北地方における律令体制の浸透過程を考える上で、きわめて重要なことと言わねばならない。

また、発掘調査によるものではないが、本遺跡の東約4kmには、開田工事の際にヘラ切り無調整の須恵器坏等が出土した、狐塚遺跡がある。この遺跡は窯跡と考えられ、本遺跡に製品を供給した可能性がある（金野・佐藤：1976.3）。

番号	遺跡名	立地	種別	時代	番号	遺跡名	立地	種別	時代
1	尾松遺跡	丘陵斜面	包含地	奈良・平安	32	長楽寺々跡	丘陵	寺院跡	
2	森館館跡（森猪城・稲瀬城）	分離丘陵	包含地	平安？	33	中島遺跡	〃	包含地	平安
3	長楽寺々跡	丘陵	寺院跡		34	泉沢A遺跡	台地	包含地	奈良・平安
4	片子沢館跡	〃	包含地	中世	35	長者原遺跡	丘陵	集落跡	縄文(中)・奈良・平安
5	鋳銭場跡	丘陵斜面	鋳銭場		36	掘切長根遺跡	丘陵斜面	包含地	奈良
6	田中館跡	分離丘陵	城館	中世	37	浦沢遺跡	丘陵斜面	包含地	奈良
7	鹿島館跡（真坂城）	丘陵	城館	中世	38	宮野館跡	丘陵	城館	中世
8	龍雲寺西沢古墳群	丘陵麓	横穴古墳	古墳（後）	39	西館遺跡	台地	包含地城館	弥生・中世
9	国史跡山王囲遺跡	扇状地	包含地	縄文（晩）・弥生	40	青野遺跡	〃	包含地	奈良・平安
10	八幡原古墳群	丘陵斜面	古墳	古墳	41	薬師山北遺跡	丘陵斜面	包含地	古墳（前）
11	姫松館跡（姫松城）	丘陵端	城館	平安・中世	42	築館城跡	丘陵	城館	中世・近世
12	金矢遺跡	台地	包含地	縄文（晩）	43	丹下館下遺跡	台地	包含地	縄文
13	田高田館	丘陵	城館跡	中世	44	小山遺跡	〃	包含地	縄文
14	柿ノ木番所跡	谷底平野	番所跡		45	大原木館跡	丘陵	包含地城館	縄文・中世（鎌倉・室町）
15	岩ノ目館跡（立野目城）	丘陵	城館	中世	46	陣場遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文（中）
16	江坂城跡（郷坂城・上坂城）	〃	城館	中世・近代	47	蛇田山空濠跡	丘陵頂	包含地	縄文・中世
17	秋山城跡	〃	城館	中世・近代	48	八幡土塁跡（伊治城外郭？）	丘陵斜面	土塁	
18	御幣所森古墳群（一本杉古墳・白坂古墳）	丘陵斜面	古墳	古墳(後)奈良・平安	49	栗原寺跡遺跡	丘陵斜面	包含地寺院跡	奈良・平安
19	柳目館跡	丘陵	包含地城館	弥生（後）・中生	50	尾松遺跡	丘陵斜面	包含地	奈良・平安
20	妙教寺遺跡	丘陵端	包含地	縄文	51	栗原館跡	丘陵	城館	中世
21	八幡館跡（宮々岡館）	丘陵頂	城館	中世	52	新山神社跡遺跡	〃	包含地	縄文
22	八幡遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文	53	大沢横穴古墳群	丘陵急崖斜面	横穴古墳	古墳(後)・奈良・平安
23	臥牛館跡（伏牛館）	丘陵	城館	（室町）	54	宮城跡（天神城跡）	丘陵	城館	中世・近世
24	毘沙門古墳群	丘陵斜面	円墳	古墳(後)奈良・平安	**55**	**伊治城跡**	台地	城柵跡	奈良・平安
25	白坂城跡	丘陵	城館	中世・近世	56	甚内屋敷遺跡	丘陵端	包含地	奈良
26	小館山横穴古墳群	丘陵斜面	包含地	奈良・平安	57	大仏古墳群	丘陵斜面	円墳	奈良・平安
27	二ノ宮遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文	58	押切遺跡	自然堤防	包含地	縄文・弥生（中）
28	一ノ宮遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文・弥生（中）	59	原田遺跡	丘陵	集落跡	縄文(中)・奈良・平安
29	本木遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文・弥生（中）	60	高田山遺跡	台地	包含地	縄文
30	県史跡鳥矢ヶ崎古墳群	丘陵斜面	円墳	古墳（後）・奈良	61	西館館跡	丘陵	城館	中世
31	猿飛来館跡	丘陵端	城館	中世	62	西大寺十三塚	〃	十三塚	縄文・中世（鎌倉・室町）

番号	遺跡名	立地	種別	時代	番号	遺跡名	立地	種別	時代
63	沢辺館跡（臥入館・東館）	丘陵	城館	中世	97	浦山館跡	兵陵		中世
64	梨崎館跡	〃	城館	中世	98	平館跡	分離丘陵	城館	中世・近世
65	姉歯横穴古墳群	丘陵斜面	横穴古墳	古墳（後）	99	原貝塚	分離丘陵端	貝塚	縄文・（晩）
66	上館跡（古館・姉歯館跡）	丘陵	城館	平安（後）	100	金成館跡（金成東・南・西館）	丘陵	城館	中世（室町）
67	大梨館跡	〃	城館	中世	101	倉沢遺跡	〃	包含地貝塚？	縄文
68	刈敷袋遺跡	自然堤防	包含地	縄文	102	鳥見城跡	〃	城館	近世
69	刈敷館跡	自然堤防	城館	中世	103	大久保遺跡	〃	包含地	奈良・平安
70	日良館跡	台地	城館	中世	104	鶴ヶ城跡（御田鳥跡）	〃	城館	中世・近世
71	鶴ノ丸遺跡	〃	城館	縄文（晩）～近世	105	有賀峯遺跡	丘陵中腹	集落跡	奈良・平安
72	宇南遺跡	〃	集落跡城館	縄文（前・晩）奈良・平安	106	新山遺跡	丘陵	包含地	縄文
73	御駒堂遺跡	〃	包含地	古墳・奈良・平安・近世	107	軽石館跡	〃	城館	中世・近世
74	山ノ上遺跡	〃	包含地	奈良	108	木売沢遺跡	丘陵麓	包含地	縄文（前）
75	木戸遺跡	〃	集落跡	縄文（中）・奈良平安	109	田子尾館跡（田子屋館）	丘陵	城館	中世・近世
76	鰻沢遺跡	〃	集落跡	縄文（中）・奈良平安	110	藤貫沢遺跡	〃	包含地	縄文・奈良・平安
77	萩沢城跡	〃	城跡	中世・近世	111	八幡遺跡	〃	包含地	縄文（前・中）
78	横須賀貝塚	丘陵地	貝塚	縄文（晩）弥生（中・後）	112	斐野館跡（有賀城）	〃	城館	中世
79	木戸平沢遺跡	台地	包含地	縄文	113	武鉾館跡（東・西館）	〃	城館	中世
80	照越台遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文（中・晩）古墳・奈良・平安	114	大林館跡	自然堤防	城館	中世・近世
81	桝形遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文（晩）	115	福岡館跡	自然堤防	城館	中世・近世
82	玉萩台遺跡	台地	包含地	縄文（中・後・晩）	116	山王館跡	台地端	包含地城館	中世
83	小迫観音跡	丘陵斜面	寺院跡	中世（鎌倉）	117	城内古墳	台地	古墳	古墳（後）
84	西館館跡	丘陵	城館	中世（室町）	118	新井山館跡（若柳城）	分離丘陵	城館	中世・近世
85	台畑遺跡	丘陵斜面	包含地窯跡	平安	**119**	糠塚遺跡	台地	集落跡	弥生・奈良・平安
86	荒崎館跡	丘陵	城館	中世	120	荒町遺跡	〃	包含地	奈良・平安
87	姉歯松古墳	〃	古墳		121	柴の脇遺跡	沖積平野	包含地	縄文（晩）・奈良・平安
88	佐野遺跡	〃	集落跡	奈良・平安	122	八幡館跡	自然堤防	包含地	縄文
89	大林遺跡	自然堤防	包含地	平安	123	大畑貝塚	台地	貝塚	縄文（中・後）
90	刈敷治郎遺跡	河川敷	包含地	縄文（晩）・平安	124	蓬田館跡	丘陵	包含地城館	縄文・中世
91	竹ノ内遺跡	台地	包含地	縄文	125	大立横穴古墳群	丘陵麓	横穴古墳	古墳（後）・奈良
92	大門遺跡	〃〃	集落跡	奈良・平安・中世	126	夷穴古墳群	丘陵斜面	横穴古墳	縄文（後）
93	〃〃	〃	集落跡	奈良・平安・中世	127	敷味貝塚	分離丘陵端	貝塚	縄文（後・晩）
94	狐塚遺跡	〃〃	包含地	奈良・平安	128	有賀沢遺跡	丘陵頂	包含地	縄文（晩）
95	〃〃	〃	包含地	奈良・平安	129	桜田館跡	〃	城館	中世
96	熊谷遺跡	〃	集落跡	縄文・古代	130	嘉倉貝塚	台地	貝塚	縄文（早・前）弥生（中・後）

第1表 遺跡地名表

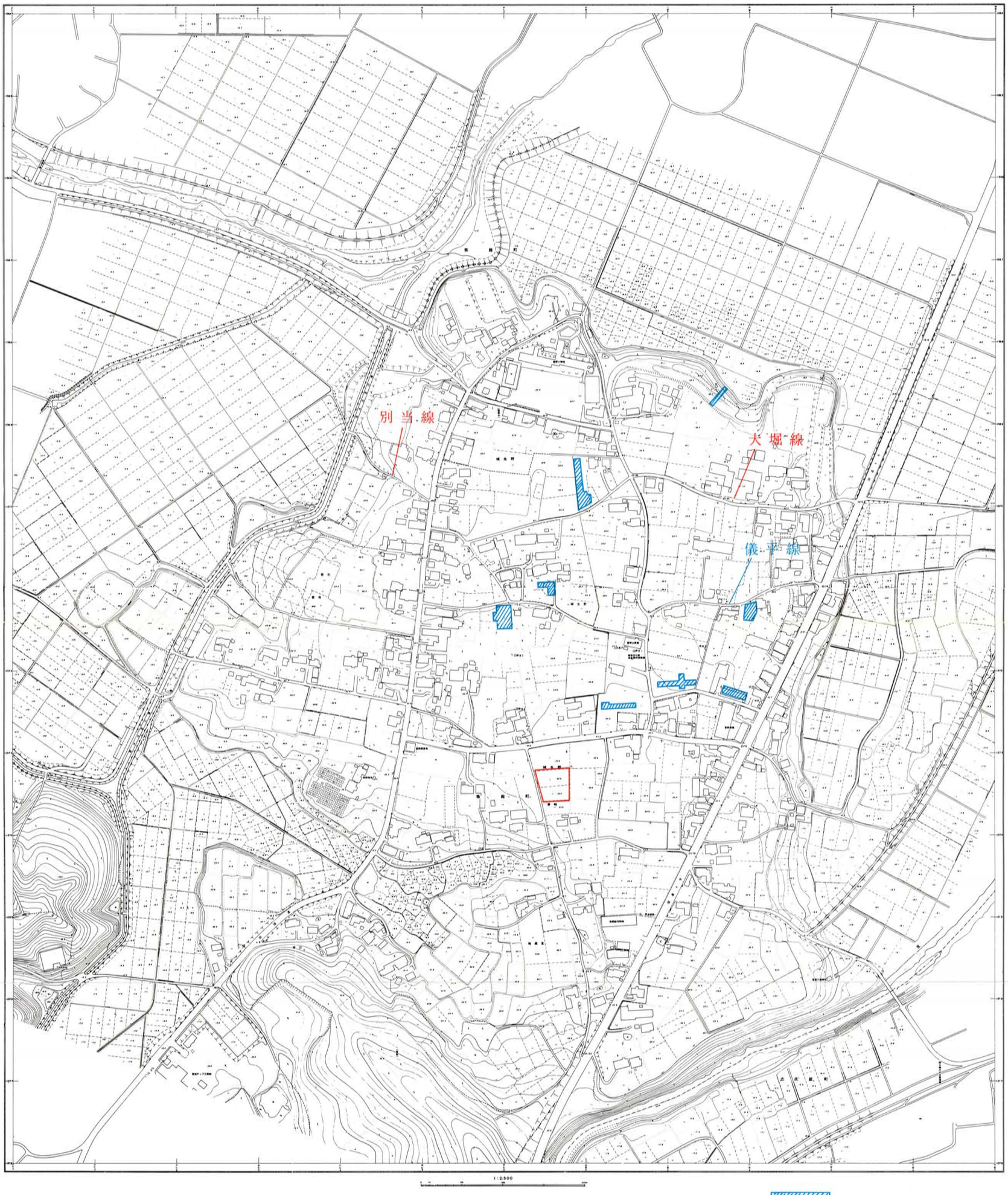

栗原電鉄
松森
栗駒町
大鳥西
大鳥東
津久毛
金成町
小迫
沢辺町
木戸口
有賀
武鎗
清水沢
若柳
大林
栗原
富
桜田
姉歯
梨崎
刈敷
伊豆野
北郷
志波姫町
南郷
上宮野
下宮野
成田
堀口
八樟
熊谷
上畑岡
真坂
柳目
築館
鶴巻
佐野原
沢辺
菱沼
狐崎
渡丸
城生野
沼崎
大平
南大通
鉄尾

Ⅳ　伊治城および栗原郡に関する古代史年表

西　暦	和　暦	記　事	文　献
767	神護景雲1	10. 伊治城の造営なる。造営にたずさわった鎮守将軍田中多太麻呂らに叙位、外従五位下道嶋三山は従五位上を賜う。	続日本紀
768	2	12. 陸奥や他国の百姓で伊治・桃生に住みたいものの課役を免ずる。	続日本紀
769	3	1.　伊治・桃生にうつり住みたいものの課役を免ずる。	続日本紀
		2.　桃生・伊治に坂東8国の百姓を募り安置しようとする。	続日本紀
		6.　栗原郡をおく。これはもと伊治城である。（「続日本紀」では神護景雲元年11月乙巳条に収めるが錯簡とみられここでは神護景雲3年6月9日乙巳説をとる）	続日本紀
		6.　浮宕の百姓2,500人を伊治城に遷す。	続日本紀
780	宝　亀　11	3.　上治郡大領伊治公呰麻呂は牡鹿郡の大領道嶋大楯、按察使紀広純を伊治城で殺す。ついで多賀城にせまり府庫の物をとり放火する。	続日本紀
792	延　暦　11	1.　斯波村の夷胆沢阿奴志己らは帰服したいが伊治村の俘にさまたげられて果せないでいることを訴える。	類聚国史巻190
796	15	11. 伊治城と玉造塞の中間に1駅を置く。	日本後紀
		11. 相模・武蔵・上総・常陸・上野・下野・出羽・越後などの住民9,000人を伊治城に遷し置く。	日本後紀
804	23	11. 栗原郡に3駅をおく。	日本後紀
837	承　和　4	4.　3年春より百姓の妖言に奥邑の民が動揺し、栗原・賀美両郡の百姓多く逃亡する。また栗原・桃生以北の俘囚は反覆して定まらないので援兵1,000人を差発して非常に備える。	続日本後紀

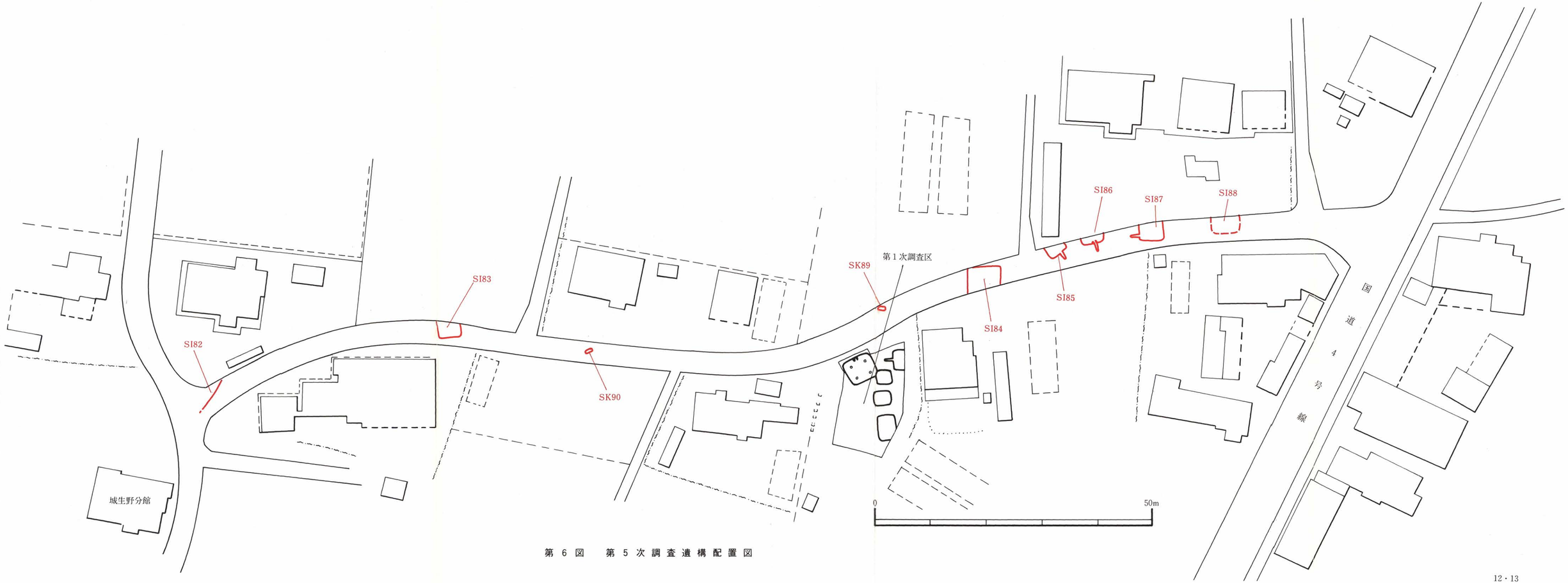
西　暦	和　暦	記　　事	文　献
905	延　喜　5 （着　手）	延喜式 ○神名式　陸奥国１００座 栗原郡７座　大１座　表刀神社 小６座　志波姫神社（名大神） 雄鋭神社 駒形根神社　和我神社 香取御児神社 ○民部式　東山道・陸奥国大国 ……志太、栗原、磐井…… ○兵部式　陸奥国駅馬 ……玉造、栗原、磐井……各５疋	延　喜　式
931～938	承平年間	和名類聚抄　陸奥国 栗原郡（久利波良） （郷名）栗原・清水・仲村・会津	和名類聚抄
1062	康　平　5	8.　前９年の役で源頼義軍は、栗原郡営岡に到り、清原武則軍と合う。軍を編成し磐井郡中山に赴く。	陸奥話記
1189	文　治　5	8.7.　文治の役で源頼朝の奥羽攻めに対し、藤原泰衡自身は、国分原鞭楯（仙台市）に陣し、その後方栗原・三迫・黒岩口・一野辺には、若九郎大夫らを大将軍となし数兵の勇士を差しむけた。	吾　妻　鏡
		8.21.　頼朝軍は暴風雨をついて途中栗原・三迫などの要害による平泉方の抵抗を排しつつ松山道より津久毛橋に到る。	吾　妻　鏡
1190	建　久　1	2.12.　頼朝の征東に最後まで抵抗する大河次郎兼任と頼朝方の軍士、在国御家人らとが栗原の一迫で戦う。	吾　妻　鏡
		3.10.　栗原寺に逃げのびた兼任が樵夫らに殺害される。	吾　妻　鏡

伊治城跡推定地地形図



第5図 調査区位置図

これまでの調査区
昭和63年度調査区



第６図　第５次調査遺構配置図

V　発見された遺構と遺物

第５次調査

調査地　城生野唐崎

面　積　1080㎡

期　間　昭和63年１月18日～２月９日

本調査は、農道儀平線の整備事業に伴う発掘調査である。この農道は、総延長が216ｍあり、遺跡ほぼ中央にある城生野地区公民館から国道４号線へ通じている。整備事業の目的は、これを拡幅・舗装するというものであった。

ところで町教育委員会では、この調査に先立ち、この路線沿いにおける遺構分布の把握を目的として、第１次調査を実施した（築館町教育委員会：1988.3）。これは、農道なかほどの南側隣線地に調査区を設定したもので、その結果、５棟の竪穴住居跡（ＳＩ58～ＳＩ62）が発見されている。第１次調査区のこのような状況から、隣接するこの農道の地下には、多数の住居跡の存在が予想された。そこで、調査の方針は、路線敷全面を対象とすることとし、舗装工事に伴う表土剝離作業と並行して遺構確認を実施する計画を立てた。

その結果、この調査で検出された遺構は、竪穴住居跡７棟（ＳＩ82～ＳＩ88）、土壙２基、多数の溝・ピット等である（第６図）。検出された住居跡の分布は、調査区の西側と東側に偏る傾向が認められ、なかでも東側では、５棟の住居跡が東西に連った状況で発見された。

なお、本調査は、着手時期が冬期へと大幅に遅れてしまったため、遺構の損傷の恐れを考え、精査の実施は、住居跡１棟（ＳＩ86）、土壙２基（ＳＫ89・ＳＫ90）に留め、その他の遺構については、土盛りによる現状保存を図っている。

ＳＩ86住居跡

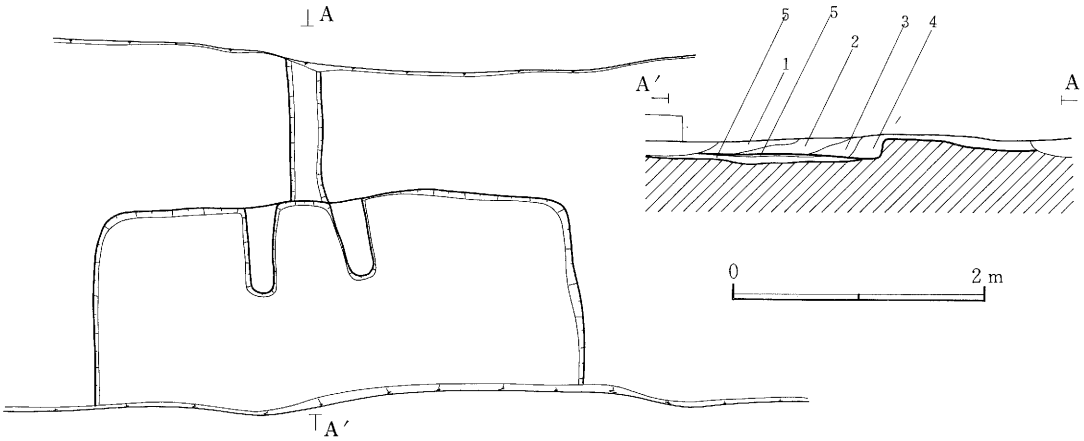
〔確認面〕　地山面で確認した。北半は、調査区外にある。

〔平面形・規模〕　方形を呈する。規模は、南北1.5ｍ以上、東西3.9ｍ。

〔堆積土〕　住居内の堆積土は、２層に区別された。第１層は、にぶい暗褐色を呈するシルトである。第２層は、暗褐色のシルトであり、焼土粒をわずかに混じえている。

〔壁〕　急激な角度で立ち上がる。残存壁高は、８㎝～15㎝。

〔床〕　掘り込んだ地山を、にぶい黄褐色のシルトで埋めたのち、さらに褐色の粘土質シルトを貼って、床としている。上面は、木根による攪乱を部分的に受けており、遺存状況はあまり良好ではない。



層位	層No.	土色	土質	備考
1	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	
	2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	
2	3	暗褐色(10YR3/3)	シルト	焼土粒をわずかに含む。
3	4	黒褐色(10YR3/1)	シルト	カマド内堆積土。焼土、炭化物を多量に含む。やわらかい。
4	5	褐色(10YR4/4)	シルト	住居貼床土。かたく、しまっている。
5	6	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	住居掘り方埋土。

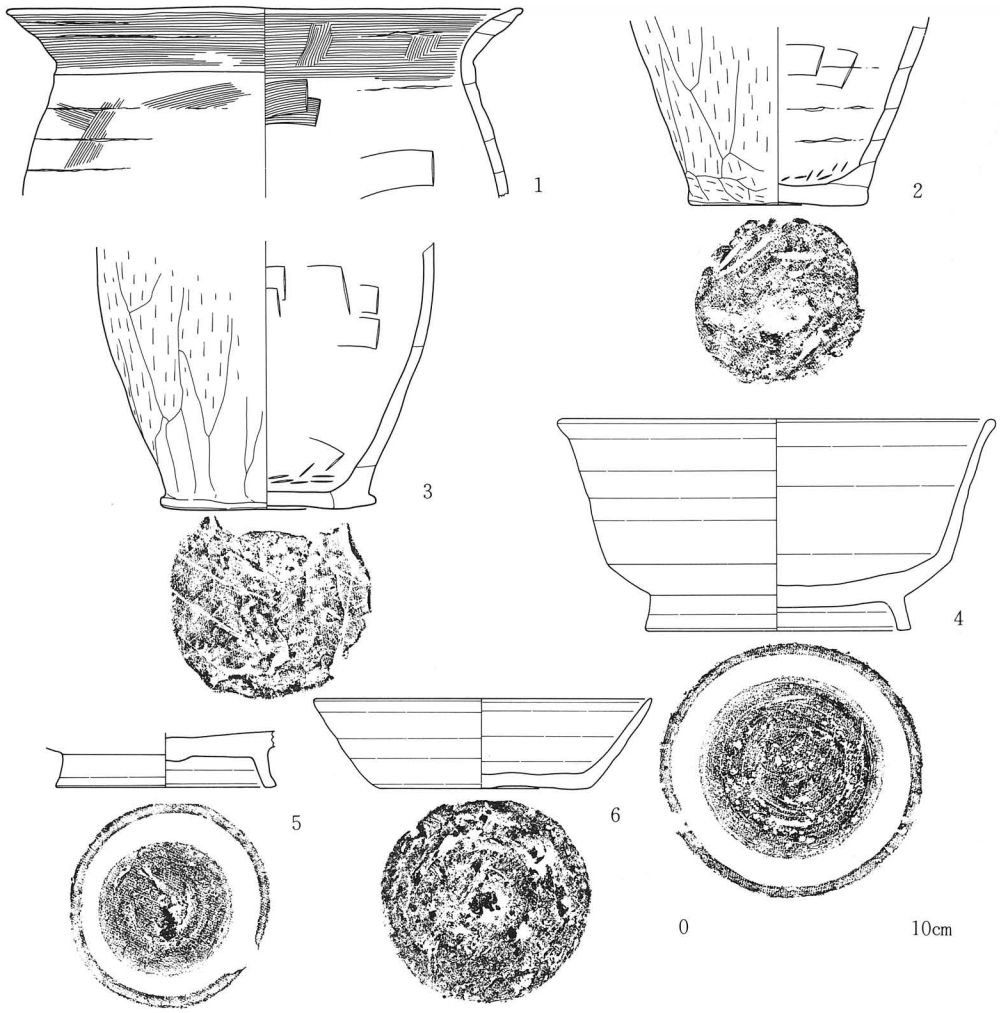
第7図　SI 58住居跡

〔カマド〕　北壁中央のわずかに西寄りに付設されている。粘土積み上げ側壁による燃焼室と細長い煙道部からなる。煙道部の先端は、溝による破壊を受けていた。

燃焼部は、幅1.0m、奥行70cm。底面は、平坦である。煙道部とは、住居壁の延長線上に一致する落差15cmの段によって区画されている。煙道部は、この段から外側へ1.1mのところまで残存している。底面は、50cm張りだしたところでレベルが次第に下がって行き、ゆるやかな段をつくっている。

第2表　SI 58住居跡出土遺物破片集計表

種別	器種	部位	器面調整 外面－内面	層No. 4	床	不明	計
土師器	坏	口縁部	ヨコナデ－ヨコナデ			1	1
			ヨコナデ－ミガキ黒色			2	2
		体部	ヨコナデ－ミガキ黒色			1	1
	甕	口縁部	ヨコナデ－ヨコナデ	1		1	2
		体部	ハケメ－ハケメ				
			ケズリ－ハケメ	3			3
			ケズリ－ヘラナデ	3	2	2	7
			ケズリ－ナデ	6			6
			ミガキ－ミガキ黒色			1	1
			ケズリ－不明		1	1	2
			ナデ－ヘラナデ		2		2
			ロクロナデ－ロクロナデ	8	3	1	12
			不明－不明	4			4
		底部	手持ちケズリ－ミガキ黒色	1			1
			手持ちケズリ－ヘラナデ	1			1
			手持ちケズリ－ロクロナデ	2			2
			手持ちケズリ－不明		1		1
			不明－ハケメ		1		1
	不明	体部	ケズリ－不明		1	1	2
			不明－不明		4	1	5
合計				30	15	12	57
須恵器	坏	口縁部	ロクロナデ－ロクロナデ	8			8
		体部	ロクロナデ－ロクロナデ	3			3
		底部	手持ちケズリ－ロクロナデ	1			1
	甕	体部	平行叩キメ－ナデ	1			1
	不明	体部	不明－不明	9		1	10
合計				22		1	23
総計							80



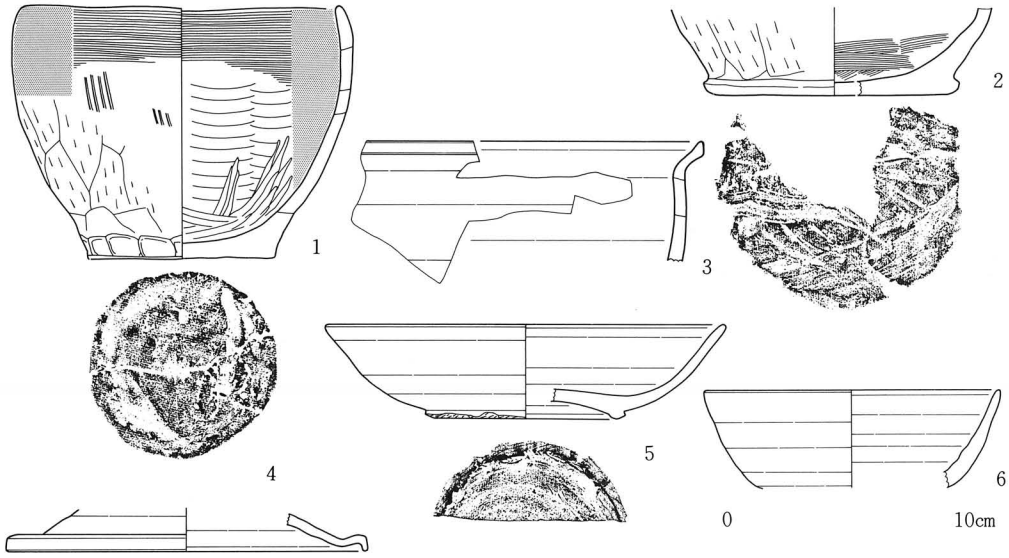
No.	種別	器種	出土遺構	層No.	法量 器高	法量 口径	法量 底径	外面 口縁部	外面 体部	外面 底部	内面 口縁部	内面 体部	内面 底部	登録No.
1	土師器	甕	ＳＩ86	床		10.6		ヨコナデ	軽いナデ		ヨコナデ	ヘラナデ		Ｃ－34
2	土師器	甕	ＳＩ86	床			7.0		ケズリ	ケズリ		ヘラナデ	ヘラナデ	Ｃ－35
3	土師器	甕	ＳＩ86	床			8.3		ケズリ	木葉痕		ヘラナデ	ヘラナデ	Ｃ－36
4	須恵器	高台付坏	ＳＩ86	床	8.5	17.5	10.6	ロクロナデ	ロクロナデ	切り離し不明 回転ヘラケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	Ｅ－29
5	転用硯		ＳＩ86	床			8.8			回転ヘラ切り 墨痕			ロクロナデ	Ｓ－1
6	須恵器	坏	ＳＩ86	床	3.6	10.5	8.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り 軽いナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	Ｅ－30

第８図　ＳＩ86住居跡出土遺物（１）

〔周溝〕　認められない。

〔出土遺物〕　遺物は、床面上とカマド燃焼部内堆積土から、まとまって出土した。うちわけは、土師器坏・甕、須恵器坏・高台付坏・蓋・甕、転用硯である（第８・９図）。

第８図５に図示した転用硯は、須恵器高台付坏の高台部を転用したもので、使用面には、墨痕が観察される。

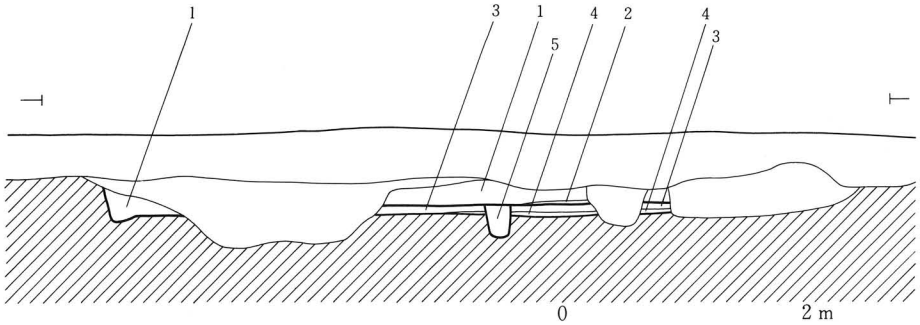


No.	種別	器種	出土遺構	層No.	法量 器高	法量 口径	法量 底径	外面 口縁部	外面 体部	外面 底部	内面 口縁部	内面 体部	内面 底部	登録No.
1	土師器	甕	SI86	4	10.0	12.7	7.5	ヨコナデ 黒色	ハケメ・ケズリ 黒色	ケズリ	ヨコナデ 黒色	ミガキ 黒色	ミガキ 黒色	C－37
2	土師器	甕	SI86	4			10.1		ケズリ	ケズリ		ナデ	ナデ	C－38
3	土師器	甕	SI86	4				ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ		C－39
4	須恵器	蓋	SI86	4		(14.4)		ロクロナデ			ロクロナデ			E－31
5	須恵器	坏	SI86	4	3.8	16.0	7.9	ロクロナデ	ロクロナデ 下端手持ケズリ	切り離し不明 回転ヘラケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	E－32
6	須恵器	坏	SI86	4		(11.8)		ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ		E－33

第9図　SI 86住居跡出土遺物（2）

SI 88住居跡

調査区の南端付近で確認した。本住居跡は、重機による表土剥離の際に掘り過ぎてしまっているため、断面図による記録を行ったのみである。このため、正確な平面規模・構造等については、



層位	層No.	土色	土質	備考
1	1	にぶい黄褐色(10YR 5/3)	シルト	
2	2	暗褐色(10YR 3/3)	シルト	生活層、炭化物を多量に含む。
3	3	暗褐色(10YR 3/3)	シルト	住居貼床土。白色粘土を多量に含む。
4	4	黒褐色(10YR 3/2)	シルト	住居掘り方埋土。
5	5	黒褐色(10YR 2/3)	シルト	ピット内堆積土。

第10図　SI 88住居跡

知ることができなかった。

断面観察によると、床面上からは、ピットが1基掘り込まれている。また、床面の西隅が若干凹んでいることから、周溝が巡らされていた可能性もあるが、これについては断定することができなかった。

第3表　ＳＩ88住居跡出土遺物破片集計表

種別	器種	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	計
須恵器	甕	肩部	ロクロナデ 波状文	ロクロナデ ナデ	1
			平行叩キメ	ナデ	1
合計					2

ＳＩ82～85・87住居跡

いずれも未精査の住居跡である。形態はすべて方形を呈しているが、全体の規模のわかるものは無い。カマドは、ＳＩ85とＳＩ87で確認した。

第4表　ＳＩ84住居跡出土遺物破片集計表

種別	器種	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	計
土師器	坏	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ 黒色	1
	甕	体部	ミガキ 黒色	ミガキ	1
		口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	3
		体部	ハケメ	ハケメ	3
			ハケメ	不明	1
			ケズリ	ハケメ	5
			ケズリ	ヘラナデ	4
			ケズリ	不明	3
			ナデ	ナデ	2
			不明	ハケメ	1
			不明	不明	8
合計					32
須恵器	坏	体部	ロクロナデ	ロクロナデ	2
		底部	切り離し不明 回転ヘラケズリ	ロクロナデ	1
	甕	体部	平行叩キメ	平行アテメ	1
			平行叩キメ	同心同文アテメ	1
			平行叩キメ	ナデ	1
			ナデ	同心同文アテメ	1
	不明	不明	ケズリ	不明	1
合計					8
縄文土器	不明	体部	縄文	ナデ	1
合計					1
総計					41

第5表　ＳＩ85住居跡出土遺物破片集計表

種別	器種	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	計
土師器	坏	口縁部	ヨコナデ 黒色	ミガキ 黒色	1
	甕	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	1
		体部	ハケメ	ハケメ	1
			ハケメ	ヨコナデ	1
			ケズリ	ヨコナデ	1
			ケズリ	不明	1
			不明	不明	4
		底部	ケズリ	ナデ	1
			不明	ハケメ	1
合計					12
須恵器	坏	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	2
	甕	体部	ロクロナデ	ロクロナデ	1
	壺	体部	ロクロナデ	ロクロナデ	2
合計					5
総計					17

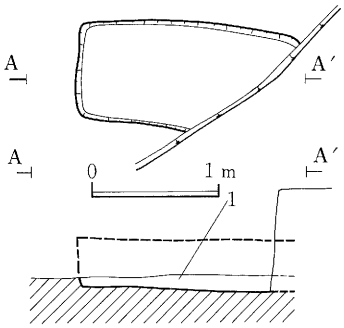
上面確認の際に、須恵器・土師器の破片が若干出土している。

ＳＫ89土壙

〔確認面〕　地山面で確認した。

〔平面形・規模〕　東西に長い長方形を呈しており、方向は、長軸で東西に対し、やや南に偏している。規模は、長軸1.8ｍ以上、短軸90cm。

〔堆積土〕　堆積土は、1層確認された。この層は、粘性・しまりのある暗褐色のシルトで、地山ブロックと炭を少量混じえている。



層位	層No.	土色	土質	備考
1	1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	粘性・しまりあり。ややわらかい。地山ブロック・炭を少量混じえる。

第11図　ＳＫ89土壙

〔壁〕　重機によって、上部が大きく削平されてしまっており、壁は10cmほどの高さまでしか残っていない。直立気味に立ち上がっている。

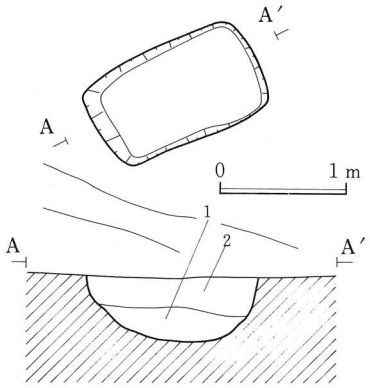
〔底面〕　凹凸が無く、平坦。

〔出土遺物〕　無し。

ＳＫ90土壙

〔確認面〕　地山面で確認した。

〔平面形・規模〕　東西に長い長方形を呈する。方向は、長軸で東西に対し、大きく北に偏している。規模は、長軸1.4ｍ、短軸80㎝。

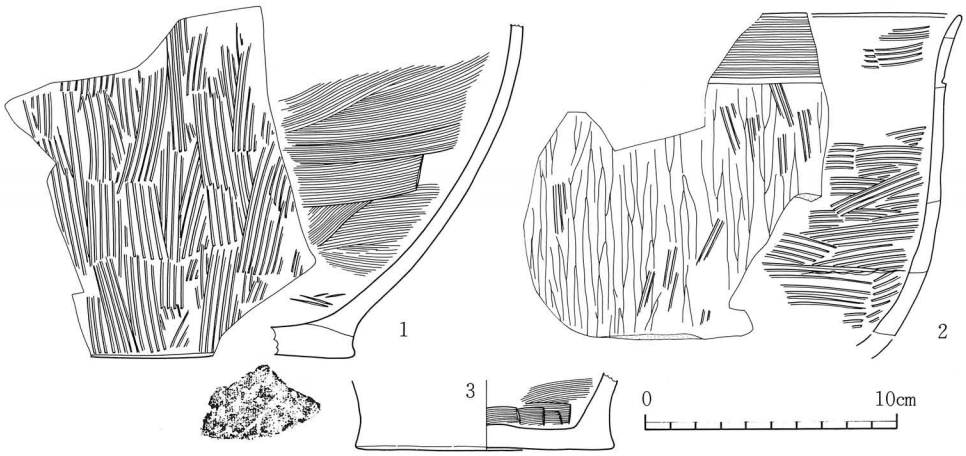


第６表　ＳＫ90土壙出土遺物破片集計表

種別	器種	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	計
土師器	甕	体部	ハケメ	ハケメ	5
		体～底部	木葉痕ケメ	ハケメ	1
合計					6

層位	層No.	土色	土質	備考
1	1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	骨片・炭・焼土を混じえる。しまりがある。
2	2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭・焼土・地山粒を混じえる。

第12図　ＳＫ90土壙



No.	種別	器種	出土遺構	層No.	法量 器高	法量 口径	法量 底径	外面 口縁部	外面 体部	外面 底部	内面 口縁部	内面 体部	内面 底部	登録No.
1	土師器	甕	ＳＫ90	2					ハケメ	木葉痕		ヘラナデ	ヘラナデ	Ｃ－40
2	土師器	甕	ＳＫ90	2				ヨコナデ	ハケメ 粗雑なミガキ			ハケメ	ハケメ	Ｃ－41
3	土師器	甕	ＳＫ90	2			10.4		不明	ナデ		ヘラナデ	ヘラナデ	Ｃ－42

第13図　ＳＫ90土壙出土遺物

〔堆積土〕　堆積土は、２層に区別された。第１層は、しまりのある暗褐色のシルトで、骨片、炭、焼土を多量に混じえている。第２層は、第１層より赤味の強いシルトであり、炭、焼土、地山ブロックを混じえているが、骨片は認められない。

〔壁〕　長軸方向の壁は、丸味を帯びて立ち上がっており、短軸方向の壁は、直立気味に立ち上がっている。残存壁高は、50㎝。

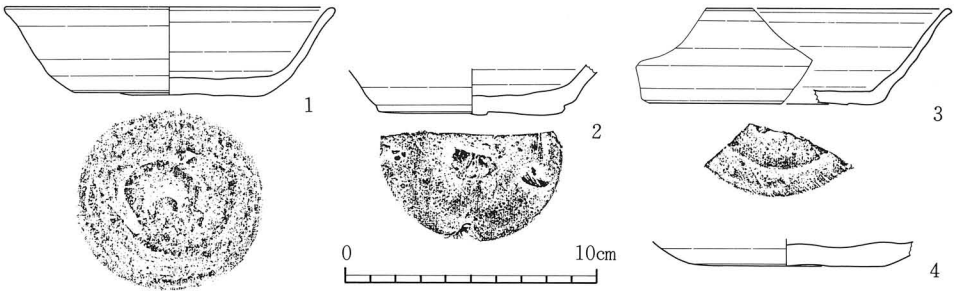
なお、前述したように、堆積土中には焼土や骨片が認められたが、壁には明瞭な焼面は観察されなかった。

〔底面〕　凹凸が無く、平坦。

〔出土遺物〕　第２層から、土師器甕が出土した（第13図）。

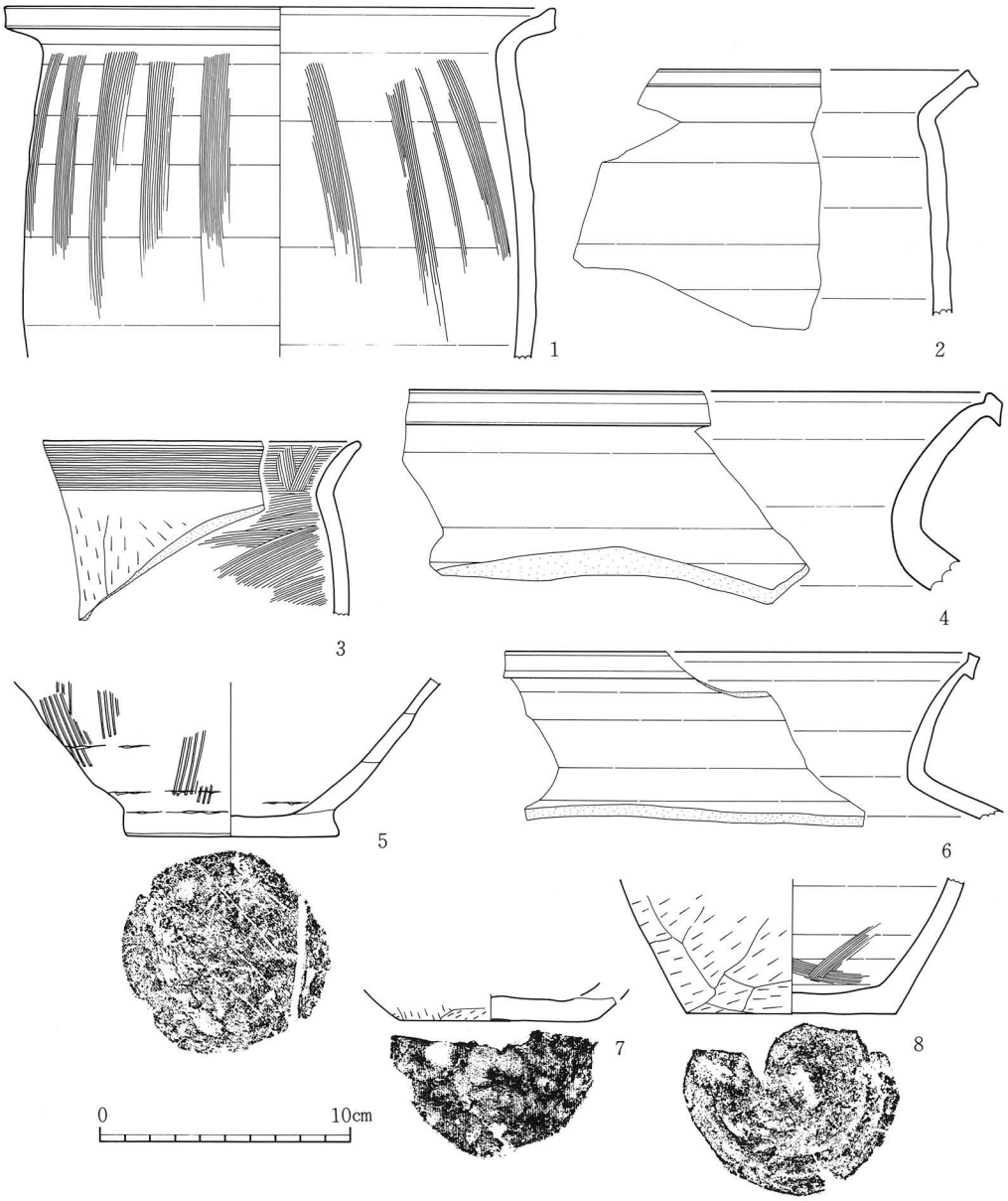
遺構外の出土遺物

本調査では、遺構外から、比較的多くの土師器・須恵器片が出土した。これらは、重機による表土剝離ならびに遺構確認の際に出土したものであり、その多くは本来、住居跡など古代の遺構に伴うものであった可能性が高い。ここでは、主要なものを図示しておく（第14～16図）。



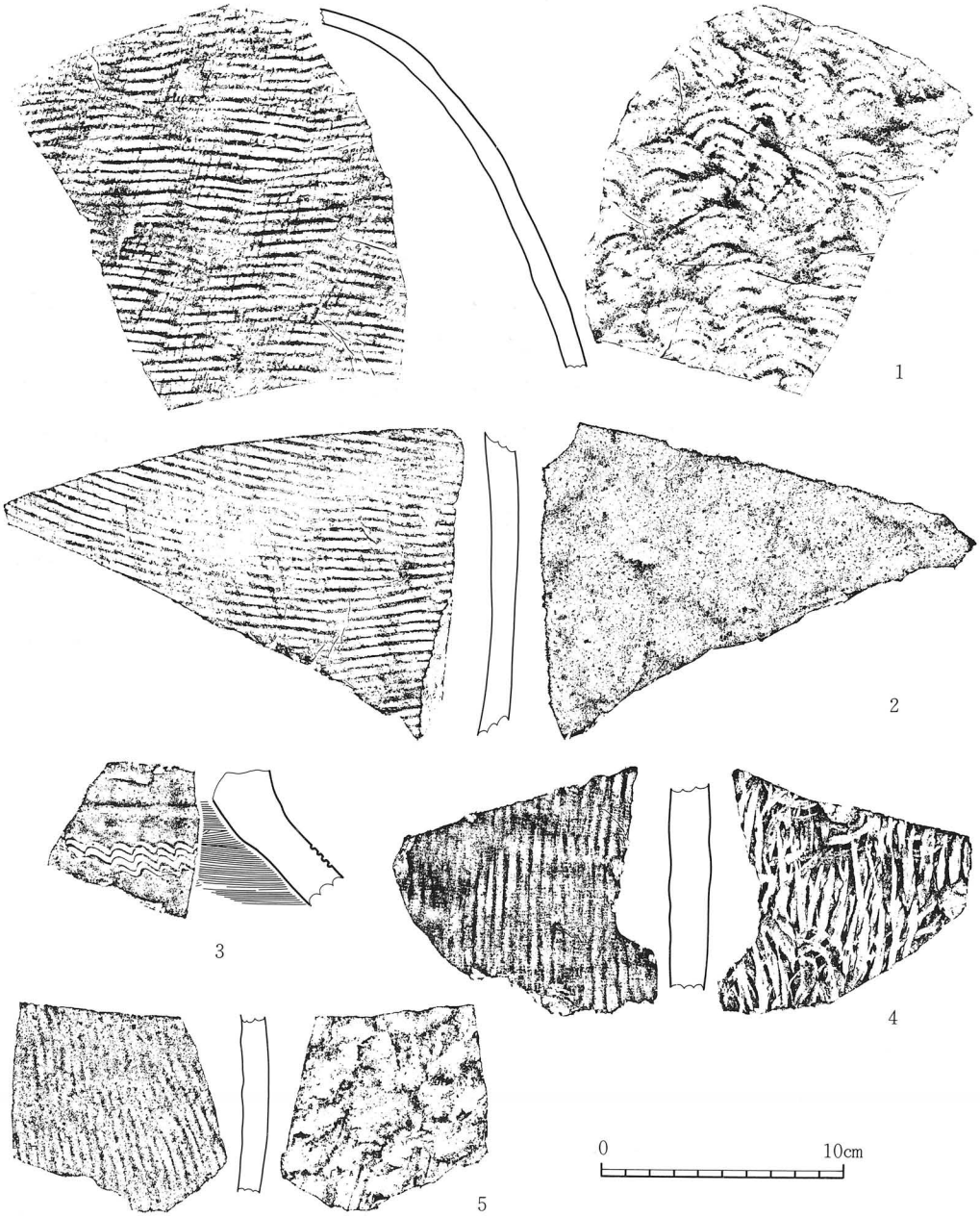
No.	種別	器種	出土遺構	層No.	法量			外面			内面			登録No.
					器高	口径	底径	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	
1	須恵器	坏	遺構外		3.5	(13.2)	7.3	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	E－34
2	須恵器	坏	遺構外				7.3		ロクロナデ	回転ヘラ切り軽いナデ		ロクロナデ	ロクロナデ	E－35
3	須恵器	坏	遺構外		3.8			ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	E－36
4	須恵器	坏	遺構外				7.6			回転ヘラ切り軽いナデ			ロクロナデ	E－37

第14図　第５次調査遺構外出土遺物（１）



No.	種別	器種	出土遺構	層No.	法量 器高	法量 口径	法量 底径	外面 口縁部	外面 体部	外面 底部	内面 口縁部	内面 体部	内面 底部	登録No.
1	土師器	甕	遺構外			(21.0)		ロクロナデ	ロクロナデ ナデ		ロクロナデ	ロクロナデ ナデ		D — 7
2	土師器	甕	遺構外					ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ		D — 8
3	土師器	甕	遺構外					ヨコナデ	ケズリ		ヨコナデ	ナデ		C — 43
4	須恵器	甕	遺構外					ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ		E — 38
5	土師器	甕	遺構外				8.5		ハケメ	木葉痕		不明	不明	C — 44
6	須恵器	甕	遺構外					ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ		E — 39
7	土師器	甕	遺構外				8.0		下端手持ケズリ	指オサエ			ロクロナデ	D — 9
8	土師器	甕	遺構外				8.4		ケズリ	ナデ		ロクロナデ ナデ	ロクロナデ ナデ	D — 10

第15図　第５次調査遺構外出土遺物（２）



No.	種別	器種	出土遺構	層No.	法量			外面			内面			登録No.
					器高	口径	底径	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	
1	須恵器	甕	遺構外						平行叩キメ			同心円文アテメ		E－40
2	須恵器	甕	遺構外						平行叩キメ			無文アテメ		E－41
3	須恵器	甕	遺構外						ロクロナデ波状文			ナデ		E－42
4	須恵器	甕	遺構外						平行叩キメ			同心円文アテメ		E－43
5	須恵器	甕	遺構外						平行叩キメ 炭			無文アテメ		E－44

第16図　第５次調査遺構外出土遺物（３）

第７次調査

調査地　城生野唐崎100、100－2、100－5

面　積　1500㎡

期　間　昭和63年７月１日～10月30日

本遺跡では、Ⅰ章でも指適したように、北辺の一部で確認された外郭施設を除くと、まだ城柵遺跡であることを具体的に裏付けるような遺構が発見されていない。このことが、本遺跡を文献上にみられる伊治城跡であると確定する上で、最も大きな課題となっていた。そこで、今回の国庫補助事業では、政庁跡や実務官衙ブロックなど、城柵としての主要な部分の解明を最大の目的として、実施した。

これまでに実施された遺跡北半を対象とする調査では、竪穴住居跡以外に古代の遺構はまったく発見されていない。そこで、今回調査区の設定にあたっては、こういった過去の調査成果を重視して、これまでよりやや南寄りの位置に調査区を設けることにした。

その結果、今回の調査では、建物跡等は発見されなかったものの、大規模な城内の区画施設（SD 103・SD 104溝）を発見することができた。なかでもＳＤ103溝では北西の隅が把えられ、調査区外の南東方向に、この溝によって区画された一画を想定することが可能となった。このことは、本遺跡の構造を知るうえでの具体的な手がかりといえ、これによって、今後の調査への大きな見通しを得ることができたといえる。

なお、９月24日には、一般を対象とした現地説明会を行い、調査成果の普及につとめたところ、約200名の見学者を集め、活況を呈した。

ＳＩ91住居跡

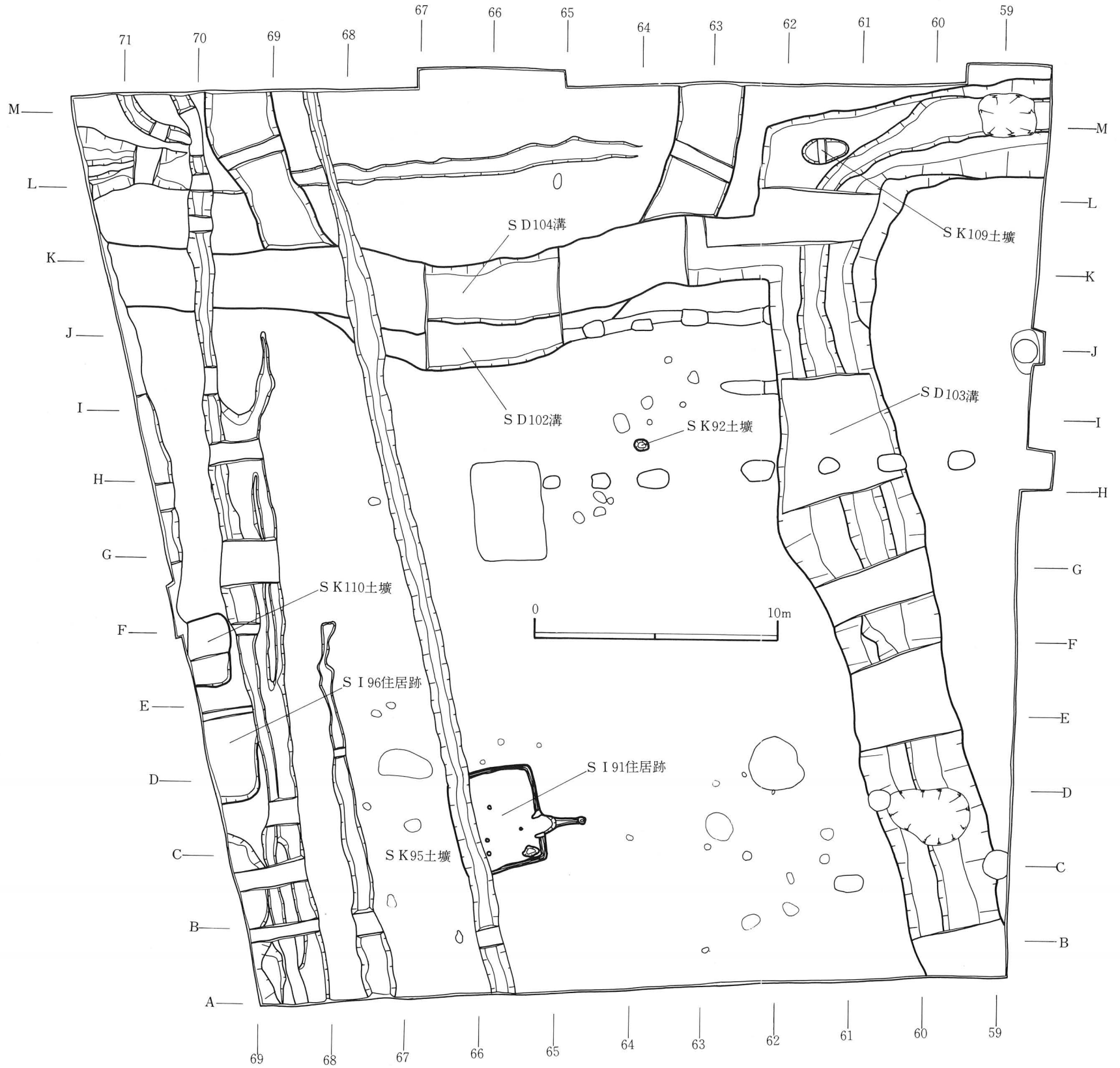
〔確認面〕　地山面で確認した。

〔平面形・規模〕　南北に長い長方形を呈する。規模は、南北4.1ｍ、東西3.5ｍ。

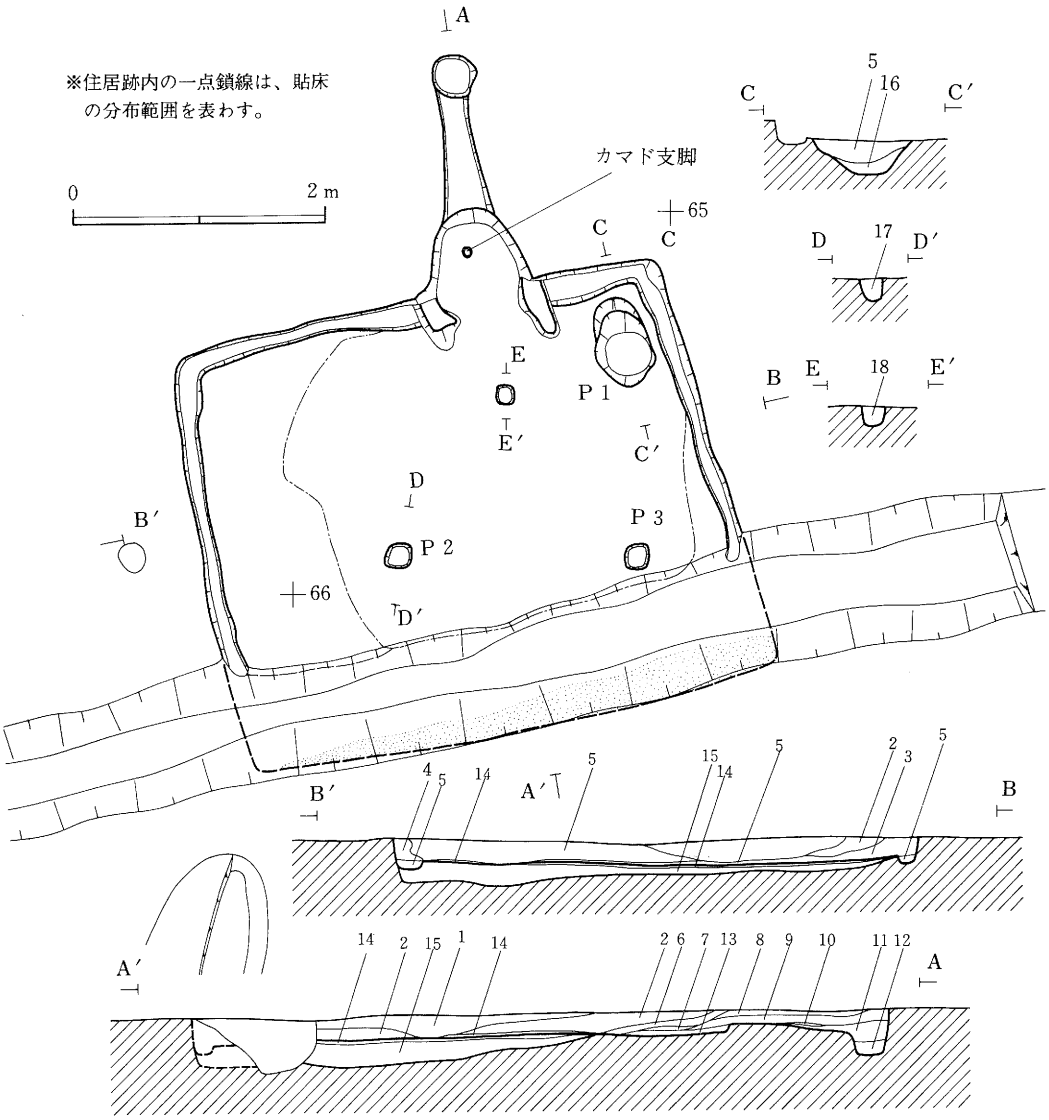
〔堆積土〕　住居跡内の堆積土は、５層に区別された。第１層は、にぶい黄褐色のシルトで、住居跡中央に皿状に堆積している。全体的にしまりがなく、やわらかい。第２層は、地山ブロックを霜降り状に混じえる暗褐色のシルトである。第１層とほぼ同じ堆積状況を示しているが、第１層に較べるとややしまりが強い。第３層は、暗褐色のシルトで、細かな地山ブロックを中量混じえている。住居跡東側に堆積しており、かたくしまりがある。第４層は、黒褐色のシルトで、北壁ぎわの一部に堆積している。第５層は、暗褐色の砂質シルトで、床面上を薄く覆っており、さらに周溝内とＰ１の上部を埋めている。

〔壁〕　溝によって破壊された南壁を除いて、20㎝前後の高さで残存している。直立気味に立ち上がる。

〔床〕　地山掘り方を褐色のシルトで埋めたのち、さらに北側の一部を除いて、褐色の粘土質シ

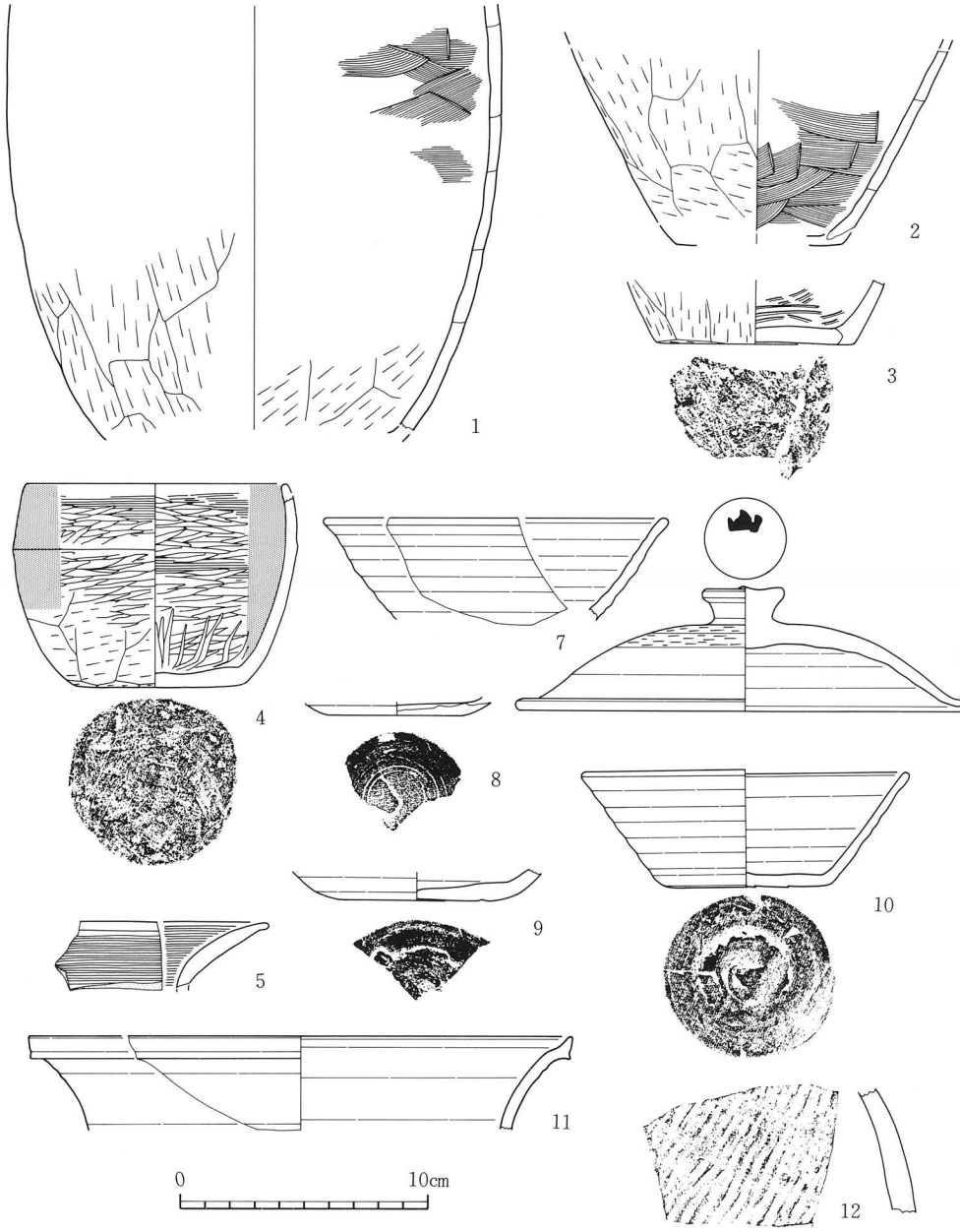


第17図　第７次調査遺構配置図



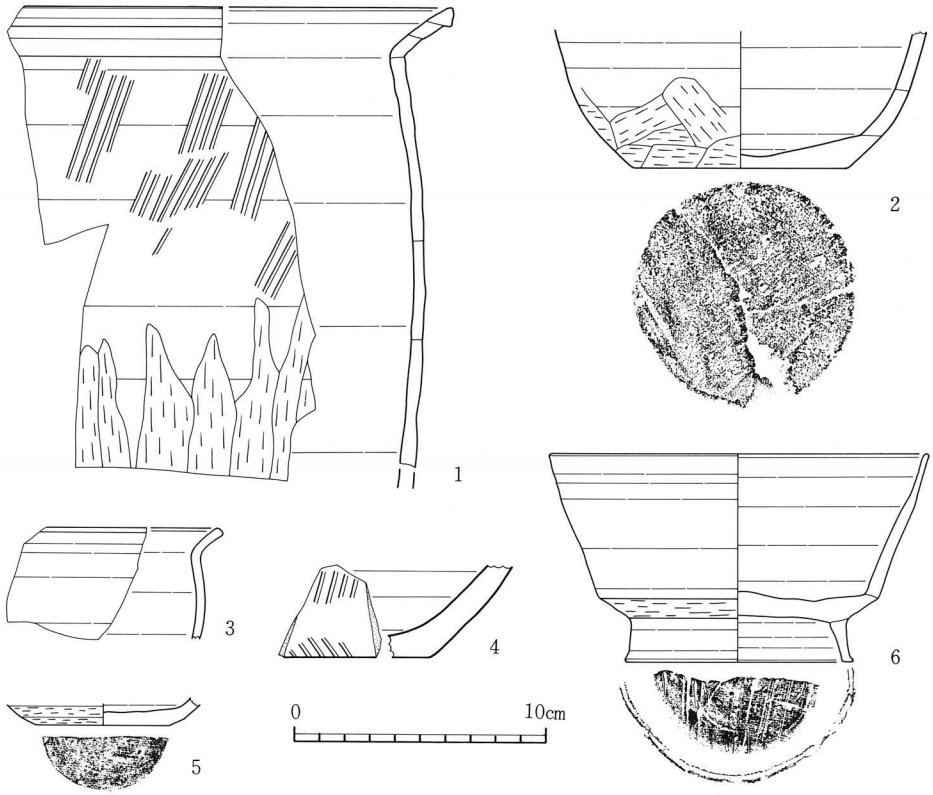
層位	層No.	土色	土質	備考
1	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	細かな地山ブロックをわずかに混じえる。やわらかく、しまりがない。
2	2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロックを霜降り状に多量に混じえる。しまりがある。
3	3	暗褐色(10YR3/3)	シルト	細かな地山ブロックを中量含む。しまりがあり、硬い。
4	4	黒褐色(10YR2/3)	シルト	しまりがある。北壁ぎわに分布している。
5	5	暗褐色(10YR3/3)	砂質シルト	砂質でしまりがない。床面・周溝を薄く覆い、さらにP_1の上部に堆積している。
6	6	灰色(10YR8/1)	粘土	白色粘土で構築された天井部の崩落土。
	7	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト	
	8	黒褐色(7.5YR2/2)	シルト	焼土を若干混じえる。
	9	黒褐色(10YR2/2)	シルト	
	10	暗示褐色(2.5YR3/3)	シルト	カマド内堆積土。焼土を多量に混じえる。
	11	極暗赤褐色(5YR2/3)	シルト	焼土を縞状に多量に混じえる。
	12	黒褐色(5YR2/2)	シルト	焼土・炭化物を若干混じえる。
	13	暗赤褐色(2.5YR3/3)	シルト	燃焼部底面を覆う。焼土を多量に混じえる。
7	14	褐色(10YR4/4)	粘土質シルト	住居貼床土。しまっており、かたい。
8	15	褐色(10YR4/4)	シルト	住居掘り方埋土。しまりが弱くやわらかい。汚れている。
9	16	にぶい赤褐色(5YR4/4)		P_1下部堆積土。焼土・炭化物を多量に混じえる。
10	17	黒褐色(10YR2/2)	シルト	P_2堆積土。粘性・しまりがややある。地山ブロックを少量混じえる。
11	18	黒褐色(10YR2/2)	シルト	P_3堆積土。粘性・しまりがややある。

第18図　ＳＩ91　住居跡



No.	種別	器種	出土遺構	層No.	法量 器高	法量 口径	法量 底径	外面 口縁部	外面 体部	外面 底部	内面 口縁部	内面 体部	内面 底部	登録No.
1	土師器	甕	SI91	床					ケズリ・ナデ			ヘラナデ・ケズリ		C－45
2	土師器	甕	SI91	床					ケズリ			ヘラナデ		C－46
3	土師器	甕	SI91	床			(8.0)		ケズリ	ケズリ		ハケメ	ハケメ	C－47
4	土師器	椀	SI91	支脚			6.9	ヨコナデ ミガキ・黒色	ケズリ ミガキ・黒色	ケズリ	ヨコナデ ミガキ・黒色	ミガキ 黒色	ミガキ 黒色	C－48
5	土師器	甕	SI91	床				ヨコナデ			ヨコナデ			C－49
6	須恵器	蓋	SI91	床	5.0	18.7		ロクロナデ	ロクロ・回ケズリ		ロクロナデ	ロクロナデ		E－45
7	須恵器	坏	SI91	床		(14.0)		ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ		E－46
8	須恵器	坏	SI91	床			(5.6)		ロクロナデ	回転ヘラ切り				E－47
9	須恵器	坏	SI91	床			(6.5)		ロクロナデ	回転ヘラ切り		ロクロナデ		E－48
10	須恵器	坏	SI91	床	4.7	13.2	6.7	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り・ナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	E－49
11	須恵器	甕	SI91	床		(22.0)		ロクロナデ			ロクロナデ			E－50
12	須恵器	甕	SI91	床					平行叩キメ			ナデ		E－51

第19図　SI 91住居跡出土遺物（1）

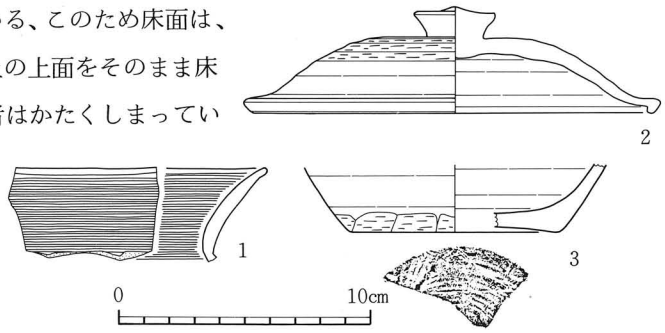


No.	種別	器種	出土遺構	層No.	法量 器高	法量 口径	法量 底径	外面 口縁部	外面 体部	外面 底部	内面 口縁部	内面 体部	内面 底部	登録No.
1	土師器	甕	ＳＩ91	9				ロクロナデ	平行叩・ロクロケズリ		ロクロナデ	ロクロナデ		Ｄ－11
2	土師器	甕	ＳＩ91	9			8.7		ロクロナデ 手持ケズリ	ケズリ		ロクロナデ	ロクロナデ	Ｄ－12
3	土師器	甕	ＳＩ91	9				ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ		Ｄ－13
4	須恵器	甕	ＳＩ91	9					平行叩キメ	ケズリ		ロクロナデ	ロクロナデ	Ｅ－52
5	須恵器	坏?	ＳＩ91	9			(5.2)		下端回転ケズリ	切り離し不明 回転ヘラケズリ		ロクロナデ	ロクロナデ	Ｅ－53
6	須恵器	壺蓋	ＳＩ91	9	8.3	(15.1)	9.1	ロクロナデ	ロクロナデ 下端回転ケズリ	静止糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	Ｅ－54

第20図　ＳＩ91住居跡出土遺物（２）

ルトを貼ることにより、床としている、このため床面は、貼り床を施した部分と、掘り方埋土の上面をそのまま床面にした部分とに分けられる。前者はかたくしまっているが、後者はやわらかくしまりがない。全体的にみれば、凹凸が無く、平坦な床面である。

〔柱穴〕　認められない。



No.	種別	器種	出土遺構	層No.	法量 器高	法量 口径	法量 底径	外面 口縁部	外面 体部	外面 底部	内面 口縁部	内面 体部	内面 底部	登録No.
1	土師器	甕	ＳＩ91	2				ヨコナデ			ヨコナデ			Ｃ－50
2	須恵器	蓋	ＳＩ91	2	4.3	16.5		ロクロナデ	ロクロナデ 回転ヘラケズリ		ロクロナデ	ロクロナデ		Ｅ－55
3	須恵器	甕	ＳＩ91	2			(8.2)		ロクロナデ 下端手持ケズ	回転糸切り		ロクロナデ	ロクロナデ	Ｅ－56

第21図　ＳＩ91住居跡出土遺物（３）

〔カマド〕　カマドは、東壁やや南寄りに付設されている。粘土積み上げ側壁による燃焼部と細長い煙道部からなる。天井部は既に崩落していたが、全体に遺存状況は良好であった。

燃焼部の規模は、幅1.0ｍ、奥行1.1ｍ。底面は平坦である。中央には、土師器甕を倒立させた支脚が据えられており、その周囲には、土師器甕の体部片がさしこまれ、支脚の安定がはかられている。煙道部とは、落差10cmの段によって区画されているが、この段は、住居壁の延長線上から、60cmほど住居外へ張り出したところにある。煙道部は、この段からさらに90cm外側へ伸びており、先端に掘られた煙出しのピットに連結する。ピットは、径30cmの円形で、30cmの深さがある。

第７表　ＳＩ91住居跡出土遺物破片集計表

種別	器種	部位	器面調整 外面－内面	1	2	5(周溝)	9	13	P2	玄門オサエ	床	計
土師器	坏	口縁部	ロクロナデ－不明		1							1
	甕	口縁部	ヨコナデ－ヨコナデ				1					1
			不明－ヨコナデ				1					1
		頸部	ヨコナデ－ヨコナデ				1					1
			ロクロナデ－ロクロナデ				1					1
		頸～体部	ヨコナデ ケズリ－ヨコナデ		1							1
		体部	ケズリ－ハケメ				5		4			9
			ケズリ－ヘラナデ				6	1	1			8
			ケズリ－ナデ							3		3
			ケズリ－不明	1			5			1		7
			ナデ－ナデ							1	3	4
			ナデ－ヘラナデ							1		1
			ナデ－不明							1		1
			ロクロナデ－ロクロナデ				1					1
			ロクロナデ ヘラナデ－ロクロナデ ケズリ								1	1
			ケズリ－ロクロナデ	1							1	2
			ロクロナデ ケズリ－ロクロナデ				1					1
			ロクロナデ 平行叩キメ－ロクロナデ				1			2		3
			ロクロハケメ－ロクロハケメ		1							1
			平行叩キメ－ナデ						1			1
		体～底部	ケズリ－ヘラナデ						1			1
合計				2	3		22	1	9	11	3	51
須恵器	坏	口縁部	ロクロナデ－ロクロナデ				4			2		6
	甕	体部	平行叩キメ ケズリ－ナデ	1								1
			平行叩キメ－不明				1					1
			不明－不明			1	1					1
合計				1		1	6			2		10
総計												61

〔周溝〕　壁沿いに巡り、全周する。ただし、西辺については、遺存状況がきわめて悪く、部分的な確認に留まった。幅10cm～20cm。床面からの深さは、５cm～８cmある。底面は、カマドに近づくにしたがって、次第にレベルが下がって行く。断面形は、U字形をなす。

〔ピット〕　計４基検出された。規模の点から、大型のＰ１と、小型のＰ２～Ｐ４に区別される。

Ｐ１は、住居跡南東隅にあり、東西にやや長い隋円形を呈している。このような状況から、このピットは貯蔵穴と考えられる。規模は、長軸70cm、短軸40cm。床面からの深さは、30cmを測る。堆積土は、上部が前述した第５層に覆われており、下部には、焼土と炭を多量に混じえるにぶい黄褐色のシルトが堆積している。

Ｐ２～Ｐ４は、方形を呈する小型のピットである。径は15cm～20cm。床面からの深さは、15cm～20cmを測る。それぞれのピット間の配置には、規則性は認められない。堆積土は単層で、黒褐色のシルトが堆積している。

〔出土遺物〕　床面上とカマド煙道部内堆積土から、まとまって出土した。うちわけは、土師器

坏・甕、須恵器坏・高台付坏・蓋・甕である（第19・20図）。

第19図6の須恵器坏と第21図2の須恵器蓋の外面には、判読不明の墨書が観察される。

S I 96住居跡

調査区南辺で検出した。大半は、調査区外にある。北側の一部は、SK110土壙による破壊を受けており、また全体の削平も著しい。壁は最も保存の良いところでも、わずかに5㎝しか残っていない。床面は、貼床されている。検出された範囲内では、周溝・柱穴等の施設は確認されなかった。出土遺物は、無い。

S D 103 溝

この溝は掘り直しが行われており、新旧の2時期に区別された。そこで、古いものをSD103A溝、新しいものをSD103B溝として、説明を加える。

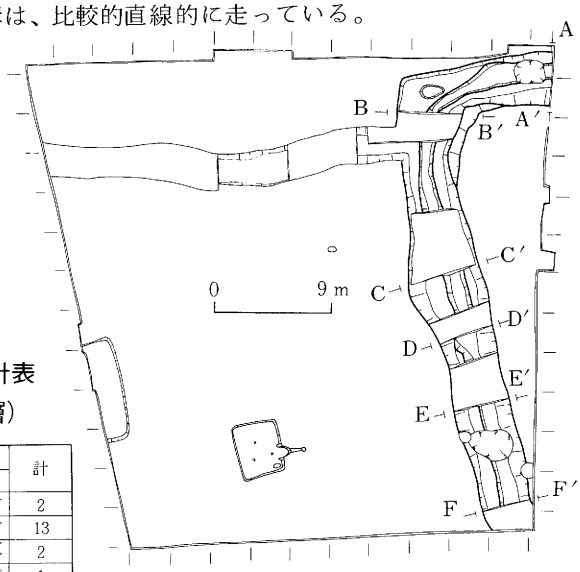
〔確認面〕　地山面で確認した。

〔方向〕　調査区の東側をやや西に振れて東西に走り、北端で東へ向かって直角に折れまがっている。方位は、南北方向で座標北に対し、西に12°振れている。

SD103A溝は、残存していた壁の状況からみると、かなり蛇行して走っていたと考えられ、これに対して、掘り直されたSD103B溝は、比較的直線的に走っている。

〔規模〕　今回の調査区内では、南北方向で36.5m、東西方向で11.0mが検出された。溝は、さらに東方向と南方向で調査区外へ伸びている。

〔堆積土〕　両溝は、自然堆積で埋まっている。



第22図　SD103溝

第8表　SD103B溝出土遺物破片集計表（灰白上層）

種別	器種	部位	器面調整 外面－内面	計
土師器	甕	口縁部	ヨコナデ－ヨコナデ	2
		体部	ケズリ－ヘラナデ	13
			ヨコナデ－ヨコナデ ケズリ－ヘラナデ	2
			ヨコナデ－ヨコナデ	1
			ケズリ－不明	2
			不明－不明	1
合計				21
須恵器	坏	口縁部	ロクロナデ－ロクロナデ	1
		体部	ロクロナデ－ロクロナデ	1
		体～底部	ロクロナデ 回転ヘラ切り－ロクロナデ	1
			ロクロナデ 回転ヘラケズリ－ロクロナデ	2
	蓋	天井部	ロクロナデ 回転ヘラケズリ－ロクロナデ	2
			ロクロナデ－ロクロナデ	1
	甕	体部	平行叩キメ－ナデ	2
			ロクロナデ－ロクロナデ	2
合計				10
総計				31

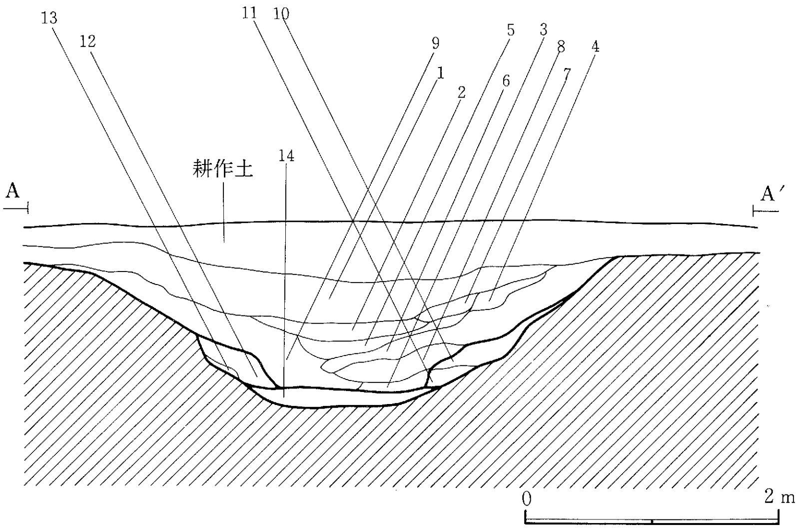
このうち、新しい段階のSD103B溝の堆積土中には、10世紀前半に降下したとみられる灰白色火山灰層（庄子・山田：1979.3他）が厚く堆積していることから、この溝はこの時期にはまだ完全に埋まりきっておらず、凹みの状態として残っていたことが知られる。

第9表　ＳＤ103Ｂ溝出土遺物破片集計表（灰白下層）

種別	器種	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	計
土師器	坏	体部	ミガキ	黒色ミガキ	1
土師器	坏	底部	ケズリ	黒色ミガキ	1
土師器	甕	口縁部	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ	1
土師器	甕	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	1
土師器	甕	口縁～体部	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ	2
土師器	甕	口縁～体部	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ	2
土師器	甕	口縁～体部	ケズリ	不明	1
土師器	甕	頸～体部	ヨコナデ・ケズリ	ハケメ・ナデ	1
土師器	甕	体部	ケズリ	ナデ	10
土師器	甕	体部	ケズリ	ヘラナデ	10
土師器	甕	体部	ケズリ	不明	2
土師器	甕	体部	ケズリ	ハケメ	2
土師器	甕	体部	ナデ	ナデ	1
土師器	甕	体部	ハケメ・ナデ	ヘラナデ	1
土師器	甕	体部	ハケメ・ケズリ	ヘラナデ	1
土師器	甕	体部	ハケメ	ハケメ	1
土師器	甕	体部	ハケメ	不明	1
土師器	甕	体部	不明	ヘラナデ	1
土師器	甕	体部	ケズリ	ロクロナデ	1
土師器	甕	体部	ロクロナデ・ケズリ	ロクロナデ	1
土師器	甕	体部	ロクロナデ	ロクロナデ	6
土師器	甕	体部	不明	不明	2
土師器	甕	体～底部	木葉痕・ハケメ	ハケメ	2
土師器	甕	底部	ケズリ	ヘラナデ	1
土師器	甕	底部	木葉痕	ヘラナデ	1
合計					54
須恵器	坏	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	21
須恵器	坏	体部	ロクロナデ	ロクロナデ	4
須恵器	坏	底部	回転ヘラ切り・ナデ	ロクロナデ	3
須恵器	坏	底部	回転糸切り	ロクロナデ	2
須恵器	高台付坏	高台～底	切り離し不明・ロクロナデ	ロクロナデ	2
須恵器	高台付坏	高台部	ロクロナデ	ロクロナデ	2
須恵器	蓋	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	1
須恵器	蓋	天井部	回転ケズリ・ロクロナデ	ロクロナデ	2
須恵器	蓋	天井部	ロクロナデ	ロクロナデ	1
須恵器	甕	口縁部	平行叩キメ・ロクロナデ	ロクロナデ	1
須恵器	甕	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	5
須恵器	甕	体部	平行叩キメ	ナデ	6
須恵器	甕	体部	平行叩キメ	平行アテメ	2
須恵器	甕	体部	平行叩キメ	無文アテメ	1
須恵器	甕	体部	平行叩キメ	同心円文アテメ	3
須恵器	甕	体部	平行叩キメ・ロクロナデ	ロクロナデ	6
須恵器	甕	体部	格子叩キメ	ナデ	1
須恵器	甕	体部	回転ケズリ	ナデ・ロクロナデ	1
須恵器	甕	体部	ロクロナデ・ケズリ	ロクロナデ	2
須恵器	甕	体部	ケズリ	ロクロナデ	3
須恵器	甕	体部	ロクロナデ	ロクロナデ	15
須恵器	甕	体部	不明	不明	1
須恵器	甕	体～底部	回転ケズリ・ロクロナデ	ロクロナデ	1
須恵器	甕	底部	切り離し不明・ケズリ・ナデ	ナデ・ロクロナデ	1
須恵器	壺	体部	回転ケズリ・ロクロナデ	ロクロナデ	1
須恵器	壺	頸部	ロクロナデ	ロクロナデ	1
合計					89
鉄製品					1
合計					1
総計					144

なお、この火山灰層の下層に堆積した土層の色調は、西側と北側から流入したものが、全体的に暗い傾向にあるが、これは、溝を掘りあげた際に置いた土が、時間の経過と共に溝のなかへ再び流れ込んだ結果と思われる。

〔底面・壁〕 両溝の底面は、平担である。ただし、新しいＳＤ103Ｂ溝の底面は、当初のＳＤ103Ａ溝より、一段深い。また、 壁の立ち上がりも、当初のＳＤ103Ａ溝の壁が、丸味を帯びてゆるやかであるのに対し、新しいＳＤ103Ｂ溝の壁は、直線的である。

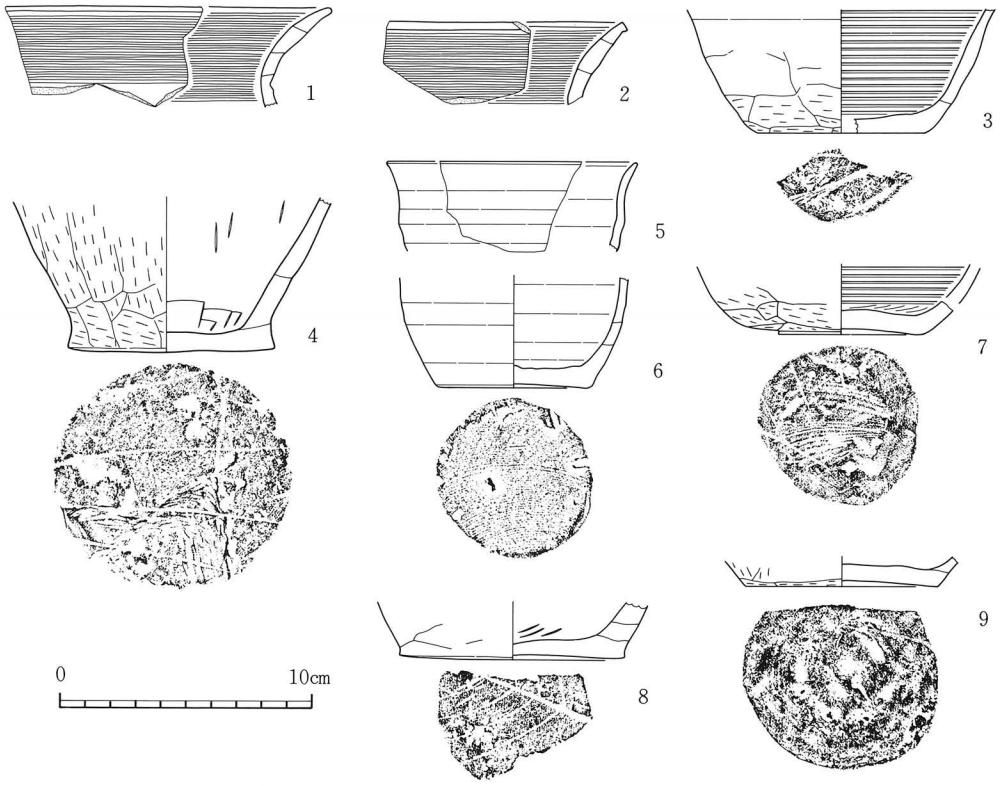


層位	層No.	土色	土質	備考
1	1	黒褐色(10YR2/1)	シルト	しまりなし。
2	2	灰白色(10YR8/1)	火山灰	灰白色火山灰層。
	3	褐灰色(10YR4/1)	シルト	層No.2と一連の堆積層。灰白色火山灰層を混じえる。
3	4	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
4	5	黒褐色(10YR3/1)	シルト	ＳＤ103Ｂ堆積土。
	6	暗褐色(10YR3/3)	シルト	
	7	黒褐色(10YR3/2)	シルト	層No.6より、やや黒味が強い。
	8	黒褐色(10YR3/1)	シルト	
	9	黒褐色(10YR3/1)	シルト	

層位	層No.	土色	土質	備考
1	10	暗褐色(10YR3/3)	シルト	
2	11	褐色(10YR4/4)	シルト	ＳＤ103Ａ堆積土。　しまっており、かたい。
3	12	暗褐色(10YR3/2)	シルト	
4	13	黒褐色(10YR2/2)	シルト	

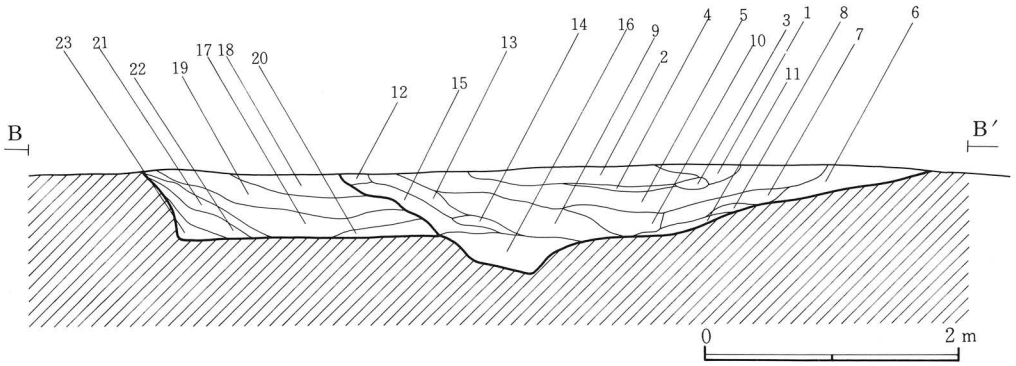
層位	層No.	土色	土質	備考
1	14	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	ＳＫ106堆積土。人為堆積土。地山大粒を多量に混じえる。

第23図　ＳＤ103溝（１）



No.	種別	器種	出土遺構	層No.	法量 器高	法量 口径	法量 底径	外面 口縁部	外面 体部	外面 底部	内面 口縁部	内面 体部	内面 底部	登録No.
1	土師器	甕	SD103B	灰下白				ヨコナデ			ヨコナデ			C－51
2	土師器	甕	SD103B	灰下白				ヨコナデ			ヨコナデ			C－52
3	土師器	甕	SD103B	灰下白			(6.6)		ロクロナデ ケズリ	静止糸切り		回転ハケメ	回転ハケメ	D－14
4	土師器	甕	SD103B	灰下白			8.2		ケズリ	木葉痕		ヘラナデ	ヘラナデ	C－53
5	土師器	甕	SD103B	灰下白		(10.0)		ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ		D－15
6	土師器	甕	SD103B	灰下白			6.3		ロクロナデ	静止糸切り		ロクロナデ	ロクロナデ	D－16
7	土師器	甕	SD103B	灰下白			6.9		ロクロナデ ケズリ	静止糸切り		回転ハケメ	ミガキ	D－17
8	土師器	甕	SD103B	灰下白			(9.0)		ケズリ？	木葉痕				C－54
9	土師器	甕	SD103B	灰下白			7.6		ケズリ	回転ヘラ切りナデ		ロクロナデ	ロクロナデ	D－18

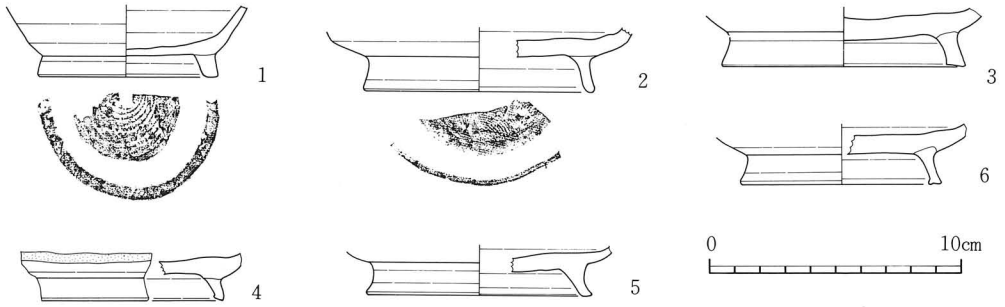
第24図　ＳＤ103Ｂ溝出土遺物（１）



層位	層No.	土色	土質	備考
1	1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	
	2	黒褐色(10YR2/1)	シルト	しまりがなく、やわらかい。
	3	暗褐色(10YR3/3)	シルト	
2	4	灰白色(10YR8/1)	火山灰	灰白色火山灰層。
3	5	暗褐色(10YR3/3)	シルト	
	6	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	汚れている。
	7	褐色(10YR4/4)	シルト	
	8	褐色(10YR4/4)	シルト	ＳＤ103Ｂ堆積土。
	9	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
	10	黒褐色(10YR3/3)	シルト	
	11	褐色(10YR4/4)	シルト	
	12	暗褐色(10YR3/4)	シルト	
	13	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
	14	暗褐色(10YR3/4)	シルト	
4	15	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	砂礫粒を若干混じえる。
	16	暗褐色(10YR3/3)	砂質シルト	砂礫粒を多量に混じえる。かたい。

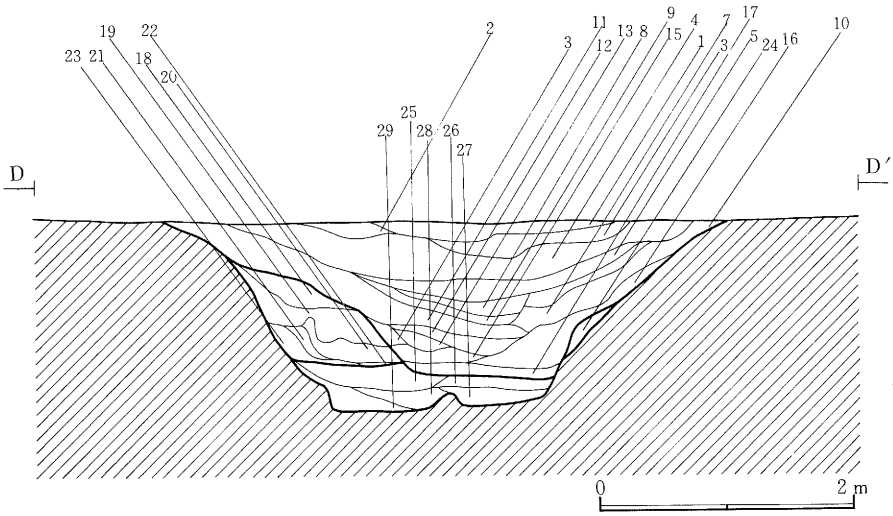
層位	層No.	土色	土質	備考
1	17	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	
2	18	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト	
3	19	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	
4	20	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	ＳＤ103Ａ堆積土。 色調の明るい土層と暗い土層とが交互に堆積している。
5	21	黒褐色(10YR3/1)	シルト	
6	22	褐色(10YR4/4)	シルト	壁の崩落土。
7	23	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	壁の崩落土。

第25図　ＳＤ103溝（２）



No.	種別	器種	出土遺構	層No.	法量 器高	法量 口径	法量 底径	外面 口縁部	外面 体部	外面 底部	内面 口縁部	内面 体部	内面 底部	登録No.
1	須恵器	高台付坏	SD103B	灰ｆ1			7.3		ロクロナデ	回転糸切り		ロクロナデ	ロクロナデ	E－57
2	須恵器	高台付坏	SD103B	灰ｆ1			9.2		ロクロナデ	回転糸切り		ロクロナデ	ロクロナデ	E－58
3	須恵器	高台付坏	SD103B	灰ｆ1			(9.7)		ロクロナデ	切り離し不明 ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ	E－59
4	須恵器	高台付坏	SD103B	灰ｆ1					ロクロナデ	切り離し不明 ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ	E－60
5	須恵器	高台付坏	SD103B	灰ｆ1			(9.0)		ロクロナデ	切り離し不明 ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ	E－61
6	須恵器	高台付坏	SD103B	灰ｆ1			(8.0)		ロクロナデ	切り離し不明 ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ	E－62

第26図　ＳＤ103Ｂ溝出土遺物（２）



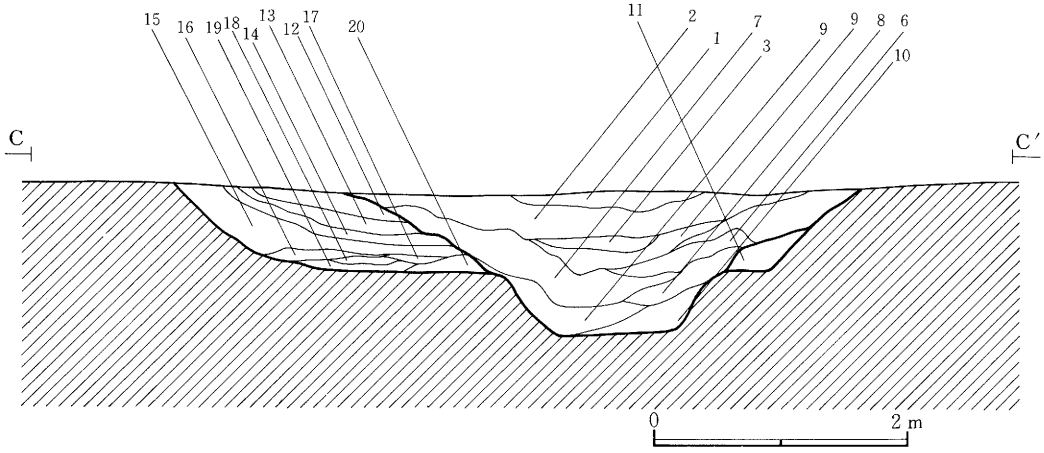
層位	層No.	土色	土質	備考
1	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	
2	2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	
	3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
	4	黒褐色(10YR2/2)	シルト	しまりがなく、やわらかい。
3	5	灰白色(10YR8/1)	火山灰	灰白色火山灰層。
4	6	黒褐色(10YR3/1)	シルト	
	7	褐灰色(10YR4/1)	シルト	
	8	黒褐色(10YR3/1)	シルト	
	9	暗褐色(10YR3/3)	シルト	ＳＤ103Ｂ堆積土、東側流入土の色調は明るく、西側流入土の色調は暗い。
	10	褐色(10YR4/4)	シルト	
	11	暗褐色(10YR3/3)	シルト	
	12	黒褐色(10YR3/1)	シルト	
	13	暗褐色(10YR3/3)	シルト	
	14	褐色(10YR4/3)	シルト	
	15	黒褐色(10YR3/1)	シルト	
	16	褐色(10YR4/3)	シルト	
	17	明褐色(10YR5/6)	シルト	

層位	層No.	土色	土質	備考
1	18	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
2	19	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト	
3	20	褐色(10YR4/3)	シルト	
4	21	明褐色(10YR5/6)	シルト	ＳＤ103Ａ堆積土。
5	22	黒褐色(10YR3/1)	シルト	
6	23	褐色(10YR4/3)	シルト	
7	24	褐色(10YR4/3)	シルト	

層位	層No.	土色	土質	備考
1	25	褐色(10YR4/6)	シルト	
	26	褐色(10YR4/3)	シルト	
2	27	黒褐色(10YR2/2)	シルト	ＳＫ106堆積土。人為堆積土。地山ブロックを多量に含む。
	28	黒褐色(10YR2/2)	シルト	
	29	黒褐色(10YR2/2)	シルト	

第27図　ＳＤ103溝（３）

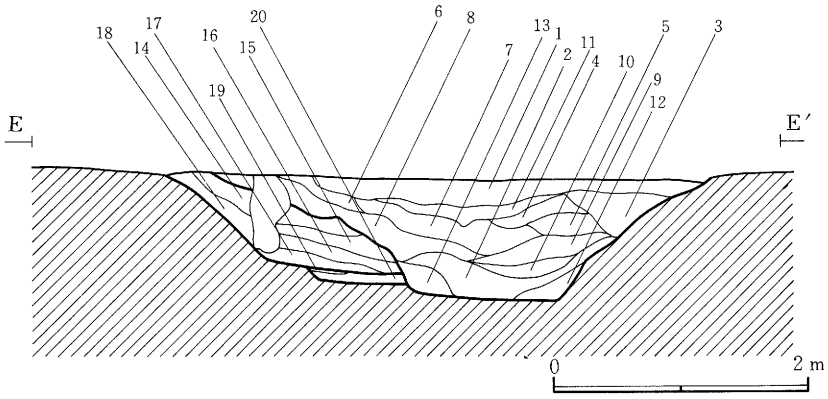
〔出土遺物〕　ＳＤ103A溝からの遺物はきわめて少なく、須恵器甕の体部片１点が出土したにすぎない。一方、ＳＤ103B溝からは、灰白色火山灰層の下層で、須恵器を主体とする多量の遺物が出土した（第24・26・31～36図）。なかでも、須恵器坏の量は最も多く、全体の器形の判明するものだけでも、17点ある。



層位	層No.	土色	土質	備考
1	1	褐色(7.5YR 4/3)	シルト	
	2	黒色(10YR 2/1)	シルト	やわらかく、しまりがない。
2	3	灰白色(10YR 8/1)	火山灰	灰白色火山灰層。
3	4	黒褐色(10YR 3/1)	シルト	
4	5	褐色(10YR 4/3)	シルト	ＳＤ103Ｂ堆積土。
	6	褐色(7.5YR 4/3)	シルト	
	7	黒褐色(10YR 3/1)	シルト	東側流入土の色調は明るく、西側流入土の色調は暗い。
	8	褐色(7.5YR 4/3)	シルト	
	9	暗褐色(10YR 3/3)	シルト	砂礫粒を多量に混じえる。
	10	暗褐色(7.5YR 3/4)	シルト	

層位	層No.	土色	土質	備考
1	11	黄褐色(10YR 5/6)	シルト	
2	12	褐色(10YR 4/4)	シルト	砂礫粒を多量に含む。
3	13	黒褐色(10YR 3/1)	シルト	
4	14	褐色(10YR 4/4)	シルト	
5	15	黒褐色(10YR 2/2)	シルト	ＳＤ103Ａ堆積土。色調の明るい土層と暗い土層とが、交互に堆積している。
6	16	褐色(7.5YR 4/4)	シルト	
7	17	褐色(10YR 4/4)	シルト	地山ブロックを多量に含む。
8	18	黒褐色(10YR 3/1)	シルト	
9	19	にぶい黄褐色(10YR 4/3)	シルト	
10	20	黒褐色(10YR 3/1)	シルト	

第28図　ＳＤ103溝（４）

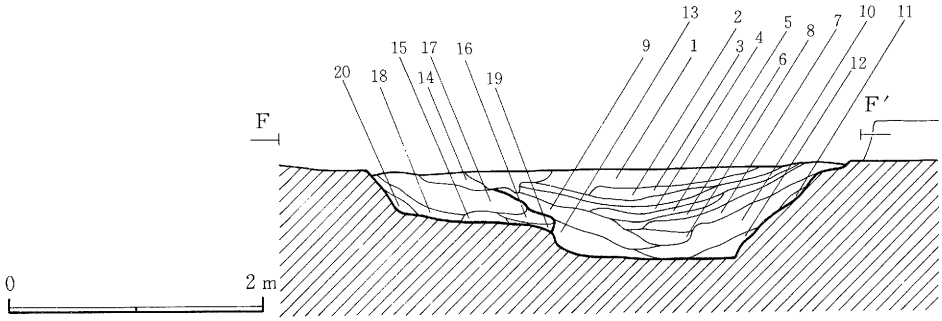


層位	層No.	土色	土質	備考
1	1	黒褐色(10YR 2/2)	シルト	やわらかく、しまりがない。
2	2	灰白色(10YR 8/1)	火山灰	灰白色火山灰層。
3	3	にぶい黄褐色(10YR 4/3)	シルト	
	4	にぶい黄褐色(10YR 3/2)	シルト	
	5	にぶい黄褐色(10YR 4/3)	シルト	
4	6	黒褐色(10YR 3/2)	シルト	
	7	黒褐色(10YR 3/1)	シルト	ＳＤ103Ｂ堆積土。東側流入土の色調は明るく、西側流入土の色調は暗い。
5	8	黒褐色(10YR 3/2)	シルト	
	9	にぶい黄褐色(10YR 4/3)	シルト	
	10	にぶい黄褐色(10YR 4/3)	シルト	
	11	褐灰色(10YR 4/1)	シルト	
	12	褐色(10YR 4/4)	シルト	
	13	にぶい黄褐色(10YR 4/3)	シルト	

層位	層No.	土色	土質	備考
1	14	褐色(10YR 4/4)	シルト	汚れている。
2	15	黒褐色(10YR 3/1)	シルト	
3	16	灰黄褐色(10YR 4/2)	シルト	ＳＤ103Ａ堆積土。
4	17	黒褐色(10YR 3/1)	シルト	
5	18	黒褐色(10YR 3/1)	シルト	

層位	層No.	土色	土質	備考
1	19	暗褐色(10YR 3/3)	シルト	ＳＫ108堆積土。人為堆積土。地山ブロックを多量に混じえる。
2	20	黒褐色(10YR 2/2)	シルト	〃　人為堆積土。地山ブロックを多量に混じえる。

第29図　ＳＤ103溝（５）

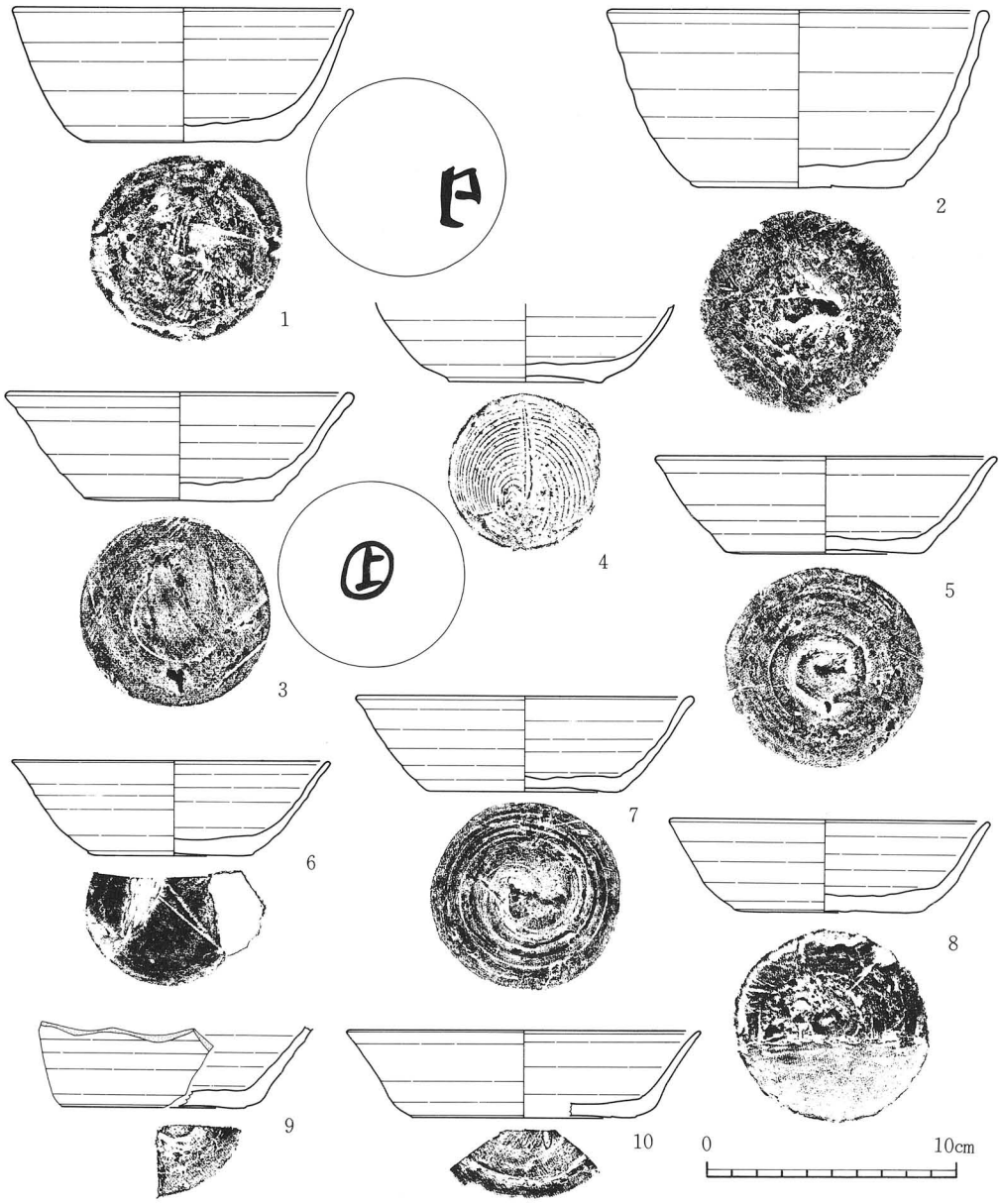


層位	層No.	土色	土質	備考
1	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	
2	2	褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロックを多量に混じえる。
	3	暗褐色(10YR3/4)	シルト	
	4	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	
	5	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山ブロックを多量に混じえる。
	6	暗褐色(10YR3/3)	シルト	
	7	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	ＳＤ103Ｂ堆積土。地山ブロックを多量に混じえる。
	8	暗褐色(10YR3/4)	シルト	
3	9	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	
	10	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	層No.9に較べて、色調がやや明るい。
	11	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	層No.10に較べて、色調がやや暗い。
	12	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	
	13	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	

地山ブロックを混じえる。

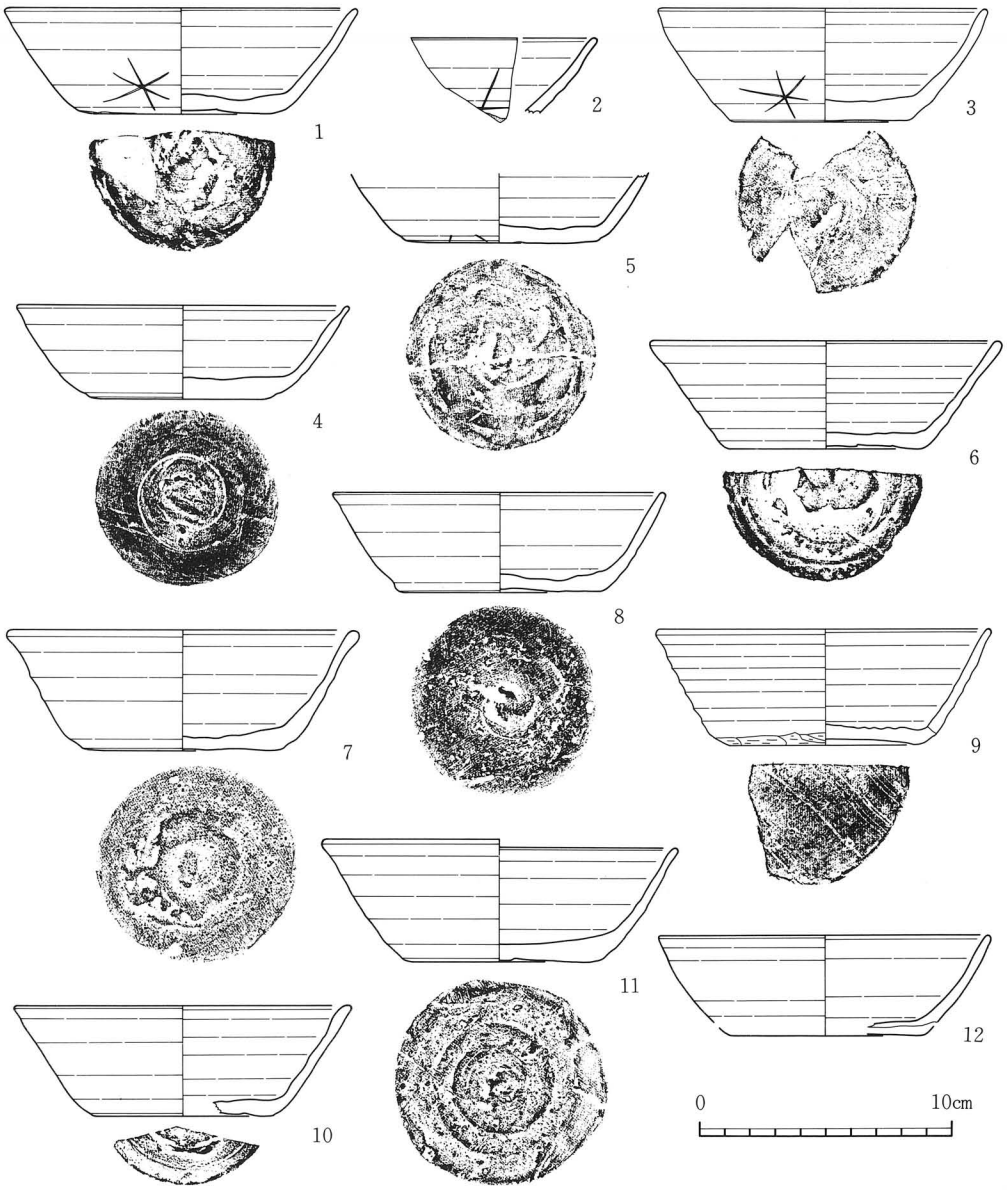
層位	層No.	土色	土質	備考
1	14	暗褐色(10YR 3/3)	シルト	
2	15	黒褐色(10YR 3/1)	シルト	
3	16	黒褐色(10YR 3/1)	シルト	
4	17	にぶい黄褐色(10YR 5/3)	シルト	ＳＤ103Ａ堆積土。
5	18	黒褐色(10YR 3/1)	シルト	
6	19	褐色(10YR 4/4)	シルト	
7	20	にぶい黄褐色(10YR 4/3)	シルト	

第30図　ＳＤ103溝（６）



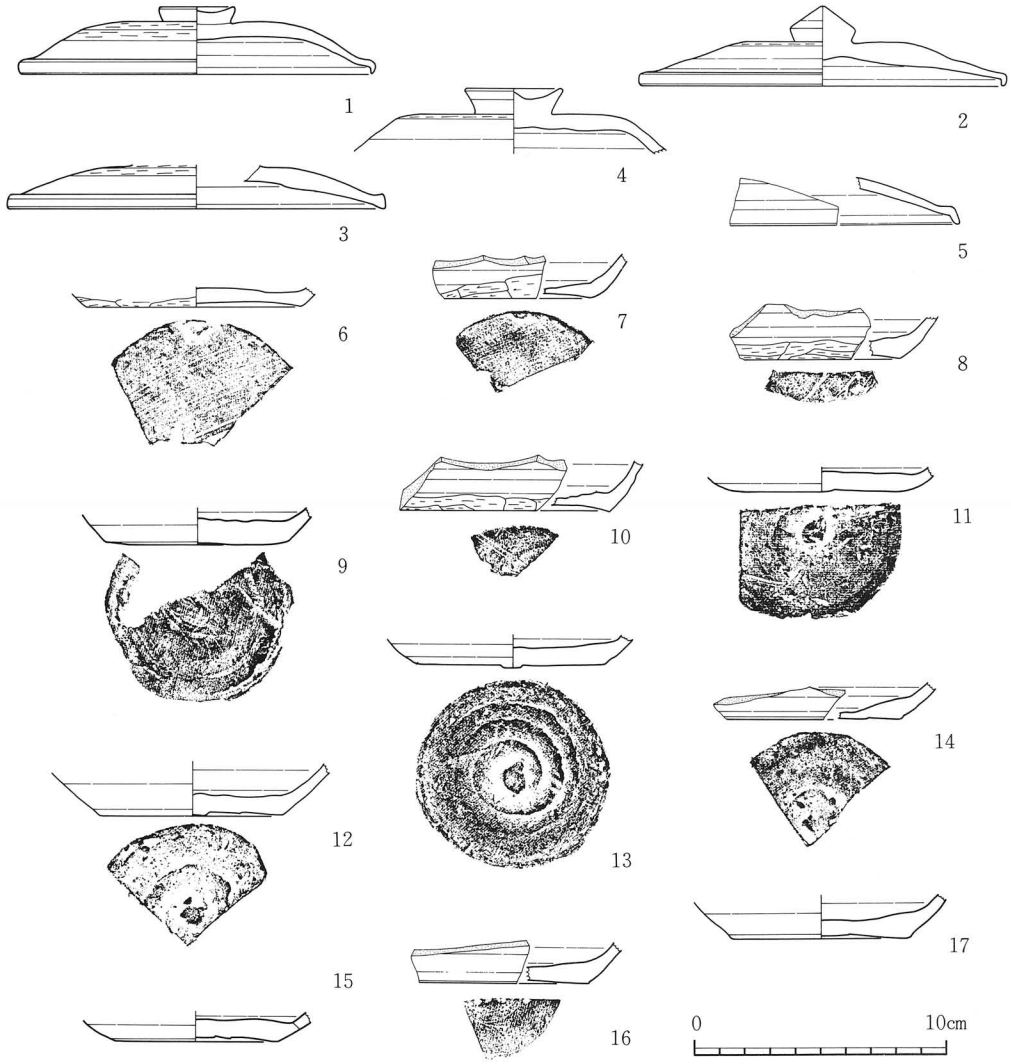
No.	種別	器種	出土遺構	層No.	法量 器高	法量 口径	法量 底径	外面 口縁部	外面 体部	外面 底部	内面 口縁部	内面 体部	内面 底部	登録No.
1	須恵器	坏	SD103B	灰下白	5.4	13.7	8.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り・ナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	E－63
2	須恵器	坏	SD103B	灰下白	7.2	15.3	8.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	E－64
3	須恵器	坏	SD103B	灰下白	4.4	14.0	7.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り・ナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	E－65
4	須恵器	坏	SD103B	灰下白			6.2		ロクロナデ	回転糸切り		ロクロナデ	ロクロナデ	E－66
5	須恵器	坏	SD103B	灰下白	3.9	13.7	8.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	E－67
6	須恵器	坏	SD103B	灰下白	3.8	12.8	6.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り・ナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	E－68
7	須恵器	坏	SD103B	灰下白	3.9	13.7	7.6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	E－69
8	須恵器	坏	SD103B	灰下白	3.7	12.9	7.6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	E－70
9	須恵器	坏	SD103B	灰下白					ロクロナデ	ヘラ切り・ナデ		ロクロナデ	ロクロナデ	E－71
10	須恵器	坏	SD103B	灰下白	3.5	(14.2)	(9.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り・ナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	E－72

第31図　ＳＤ103溝出土遺物（３）



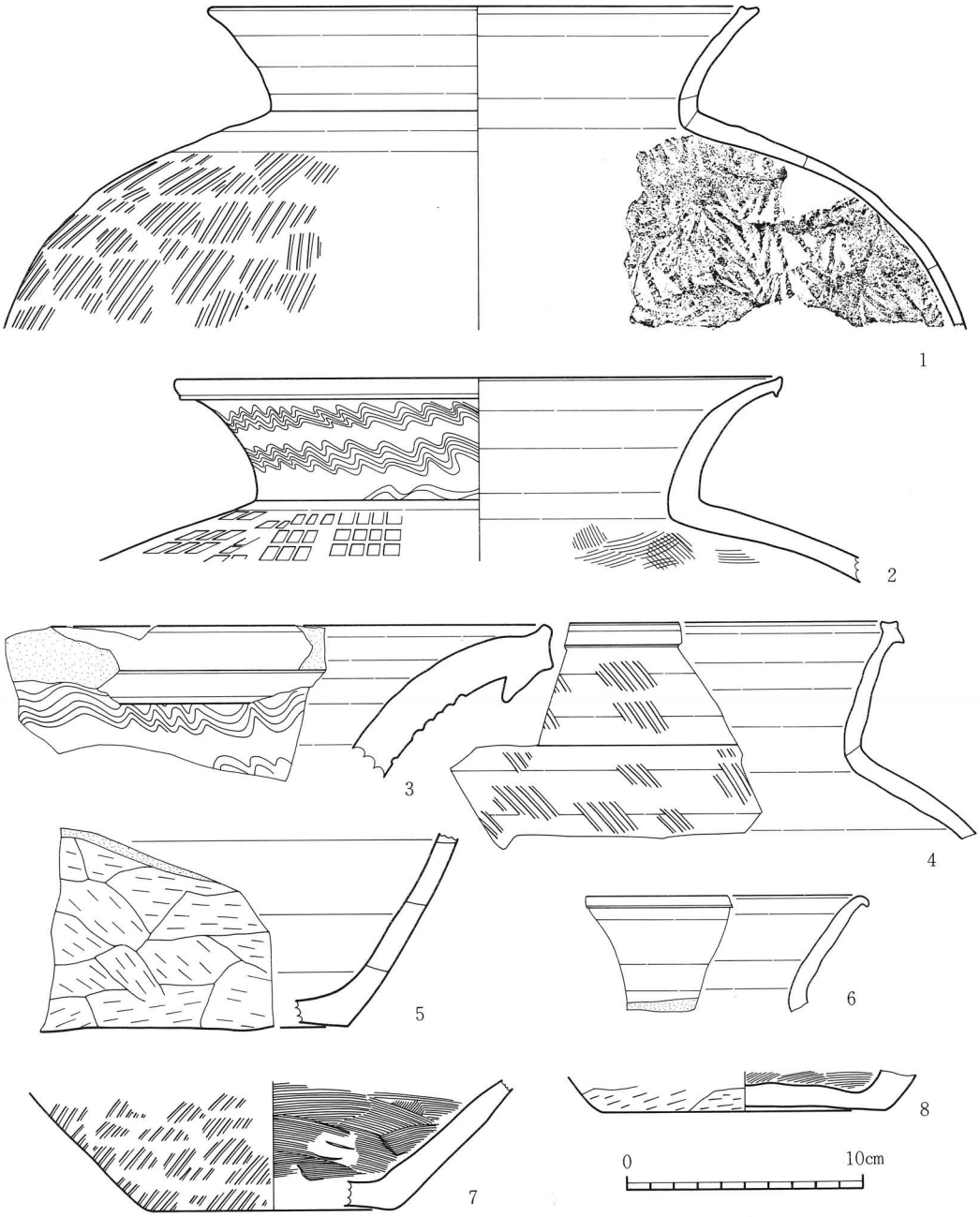
No.	種別	器種	出土遺構	層No.	法量 器高	法量 口径	法量 底径	外面 口縁部	外面 体部	外面 底部	内面 口縁部	内面 体部	内面 底部	登録No.
1	須恵器	坏	SD103B	灰下白	4.2	(14.0)	7.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り・ケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	E－73
2	須恵器	坏	SD103B	灰下白				ロクロナデ			ロクロナデ			E－74
3	須恵器	坏	SD103B	灰下白	4.5	13.0	7.1	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り・ケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	E－75
4	須恵器	坏	SD103B	灰下白	3.7	13.2	7.2	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	E－76
5	須恵器	坏	SD103B	灰下白			7.6		ロクロナデ	ヘラ切り・ケズリ		ロクロナデ	ロクロナデ	E－77
6	須恵器	坏	SD103B	灰下白	4.3	(14.0)	7.8	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	E－78
7	須恵器	坏	SD103B	灰下白	4.8	(14.0)	8.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	E－79
8	須恵器	坏	SD103B	灰下白	4.0	13.3	8.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	E－80
9	須恵器	坏	SD103B	灰下白	4.6	(13.3)	7.4	ロクロナデ	ロクロ、手持ケズリ	静止糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	E－81
10	須恵器	坏	SD103B	灰下白	4.4	(13.4)	(7.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	E－82
11	須恵器	坏	SD103B	灰下白	4.7	14.2	7.8	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	E－83
12	須恵器	坏	SD103B	灰下白		13.2		ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ		E－84

第32図　ＳＤ103Ｂ溝出土遺物（４）



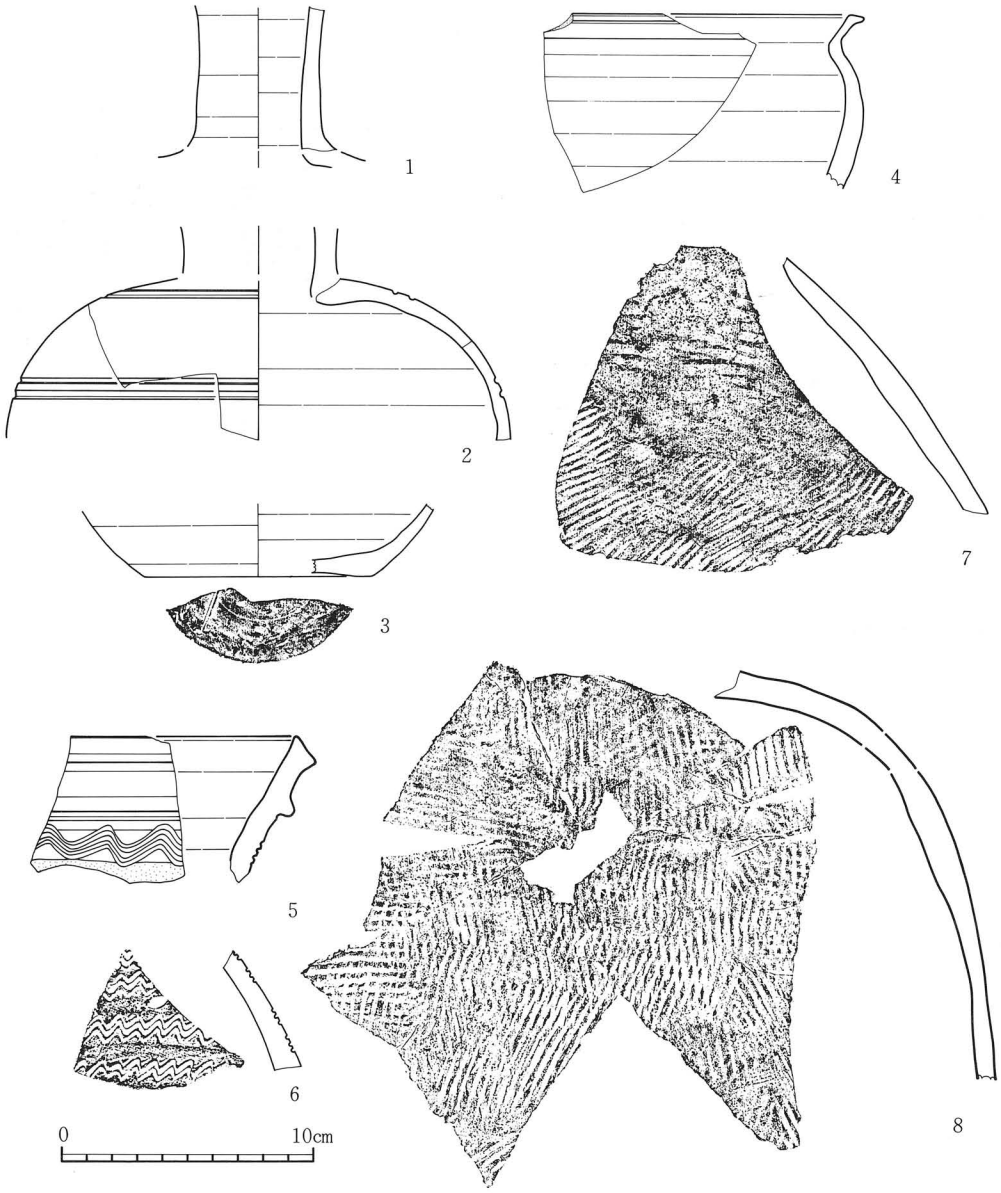
No.	種別	器種	出土遺構	層No.	法量 器高	法量 口径	法量 底径	外面 口縁部	外面 体部	外面 底部	内面 口縁部	内面 体部	内面 底部	登録No.
1	須恵器	蓋	SD103B	灰下白	2.8	14.2		ロクロナデ	ロクロナデ 回転ヘラケズリ			ロクロナデ	ロクロナデ	E－85
2	須恵器	蓋	SD103B	灰下白	3.2	(14.6)		ロクロナデ	ロクロナデ 回転ヘラケズリ			ロクロナデ	ロクロナデ	E－86
3	須恵器	蓋	SD103B	灰下白		(15.0)		ロクロナデ	ロクロナデ 回転ヘラケズリ			ロクロナデ	ロクロナデ	E－87
4	須恵器	蓋	SD103B	灰下白				ロクロナデ	ロクロナデ 回転ヘラケズリ			ロクロナデ	ロクロナデ	E－88
5	須恵器	蓋	SD103B	灰下白				ロクロナデ	ロクロナデ			ロクロナデ	ロクロナデ	E－89
6	須恵器	坏	SD103B	灰下白			(8.5)		ロクロナデ 手持ケズリ	静止糸切り		ロクロナデ	ロクロナデ	E－90
7	須恵器	坏	SD103B	灰下白					ロクロナデ 手持ケズリ	静止糸切り		ロクロナデ	ロクロナデ	E－91
8	須恵器	坏	SD103B	灰下白					ロクロナデ 手持ケズリ	静止糸切り		ロクロナデ	ロクロナデ	E－92
9	須恵器	坏	SD103B	灰下白					ロクロナデ	回転ヘラ切り 軽いナデ		ロクロナデ	ロクロナデ	E－93
10	須恵器	坏	SD103B	灰下白					ロクロナデ 手持ケズリ	静止糸切り		ロクロナデ	ロクロナデ	E－94
11	須恵器	坏	SD103B	灰下白			7.6		ロクロナデ	回転ヘラ切り		ロクロナデ	ロクロナデ	E－95
12	須恵器	坏	SD103B	灰下白			6.1		ロクロナデ	回転ヘラ切り 軽いナデ		ロクロナデ	ロクロナデ	E－96
13	須恵器	坏	SD103B	灰下白			(7.2)		ロクロナデ	回転ヘラ切り		ロクロナデ	ロクロナデ	E－97
14	須恵器	坏	SD103B	灰下白					ロクロナデ	回転ヘラ切り		ロクロナデ	ロクロナデ	E－98
15	須恵器	坏	SD103B	灰下白					ロクロナデ	回転ヘラ切り		ロクロナデ	ロクロナデ	E－99
16	須恵器	坏	SD103B	灰下白			7.1		ロクロナデ	回転ヘラ切り 軽いナデ		ロクロナデ	ロクロナデ	E－100
17	須恵器	坏	SD103B	灰下白			(7.0)		ロクロナデ	回転ヘラ切り 軽いナデ		ロクロナデ	ロクロナデ	E－101

第33図　ＳＤ103溝出土遺物（５）



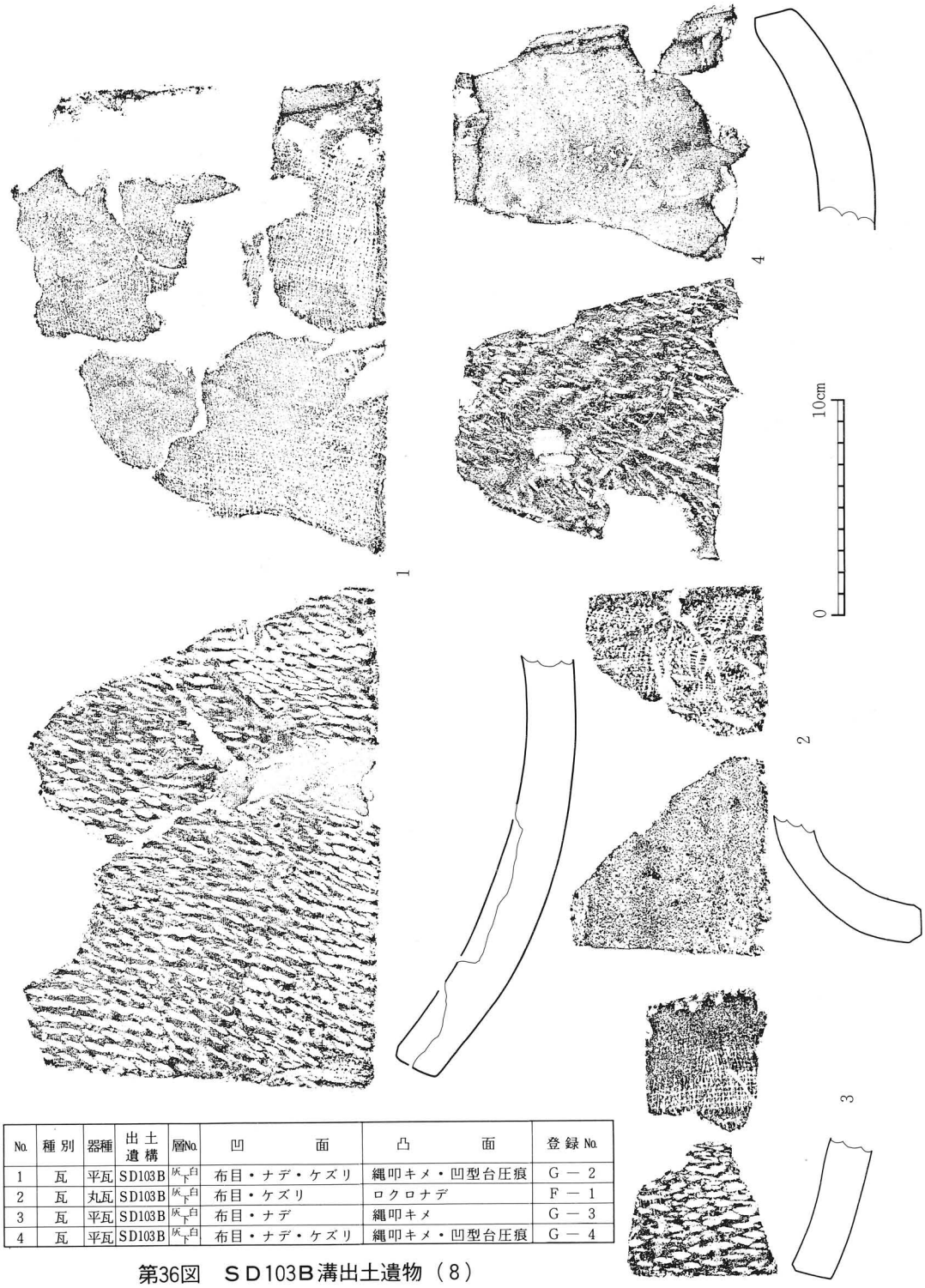
No.	種別	器種	出土遺構	層No.	法量 器高	法量 口径	法量 底径	外面 口縁部	外面 体部	外面 底部	内面 口縁部	内面 体部	内面 底部	登録No.
1	須恵器	甕	SD103B	灰下白				ロクロナデ			ロクロナデ			E－102
2	須恵器	甕	SD103B	灰下白					ロクロナデ 波線			ロクロナデ		E－103
3	須恵器	甕	SD103B	灰下白				ロクロナデ		回転ヘラ切り 軽いナデ			ロクロナデ	E－104
4	須恵器	甕	SD103B	灰下白					ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ		E－105
5	須恵器	不明	SD103B	灰下白				ロクロナデ 波状文	ロクロナデ 波状文					E－106
6	須恵器	不明	SD103B	灰下白										E－107
7	須恵器	甕	SD103B	灰下白					平行叩キメ ナデ			無文アテメ		E－108
8	須恵器	甕	SD103B	灰下白					平行叩キメ			ナデ		E－109

第34図　ＳＤ103Ｂ溝出土遺物（６）



No.	種別	器種	出土遺構	層No.	法量 器高	法量 口径	法量 底径	外面 口縁部	外面 体部	外面 底部	内面 口縁部	内面 体部	内面 底部	登録No.
1	須恵器	壺	SD103B	灰$_{b}$f1				ロクロナデ			ロクロナデ			E－102
2	須恵器	壺	SD103B	灰$_{b}$f1					ロクロナデ 波線			ロクロナデ		E－103
3	須恵器	甕	SD103B	灰$_{b}$f1					ロクロナデ	回転ヘラ切り 軽いナデ			ロクロナデ	E－104
4	須恵器	鉢	SD103B	灰$_{b}$f1					ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ		E－105
5	須恵器	不明	SD103B	灰$_{b}$f1				ロクロナデ 波状文	ロクロナデ 波状文					E－106
6	須恵器	不明	SD103B	灰$_{b}$f1										E－107
7	須恵器	甕	SD103B	灰$_{b}$f1					平行叩キメナデ			無文アテメ		E－108
8	須恵器	甕	SD103B	灰$_{b}$f1					平行叩キメ			ナデ		E－109

第35図　ＳＤ103溝出土遺物（７）



No.	種別	器種	出土遺構	層No.	凹面	凸面	登録No.
1	瓦	平瓦	SD103B	灰下白	布目・ナデ・ケズリ	縄叩キメ・凹型台圧痕	G－2
2	瓦	丸瓦	SD103B	灰下白	布目・ケズリ	ロクロナデ	F－1
3	瓦	平瓦	SD103B	灰下白	布目・ナデ	縄叩キメ	G－3
4	瓦	平瓦	SD103B	灰下白	布目・ナデ・ケズリ	縄叩キメ・凹型台圧痕	G－4

第36図　ＳＤ103Ｂ溝出土遺物（８）

ＳＤ 104 溝

〔確認面〕　地山面で確認した。

〔重複〕　ＳＤ102溝と重複しており、これより新しい。

〔方向〕　調査区の北側を東西に走り、東端で、ＳＤ103溝の北西隅からやや南寄りの位置に接属している。

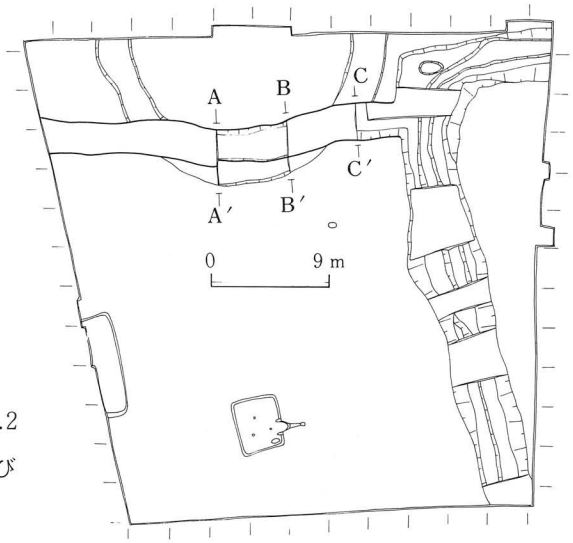
全体に蛇行はしているが、大きくみて、方位は発掘基準線の東西方向にほぼ一致している。

〔規模〕　調査区内で検出された長さは、26.2ｍである。西側方向は、さらに調査区外へ伸びている。上幅は、2.8ｍ～3.2ｍ。

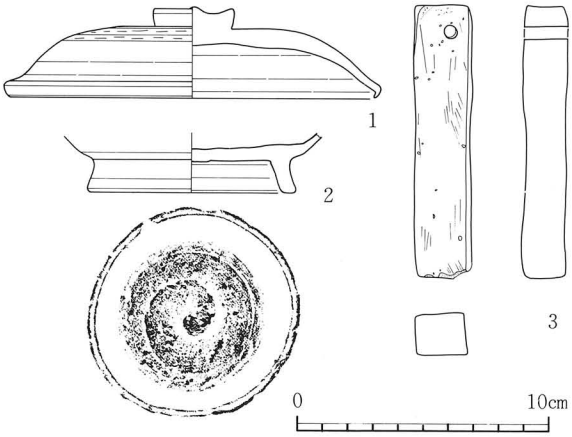
〔堆積土〕　自然堆積によって埋まっている。ＳＤ103B溝と一連の堆積状況を示しており、灰白色火山灰層が観察される。

この火山灰層の下層の堆積土は、南側から流入した土層の色調が、全体的に暗い傾向にある。

〔底面・壁〕　底面は、凹凸が無く、平坦である。また、壁は丸味を帯びて、ゆるやかに立ち上がっている。



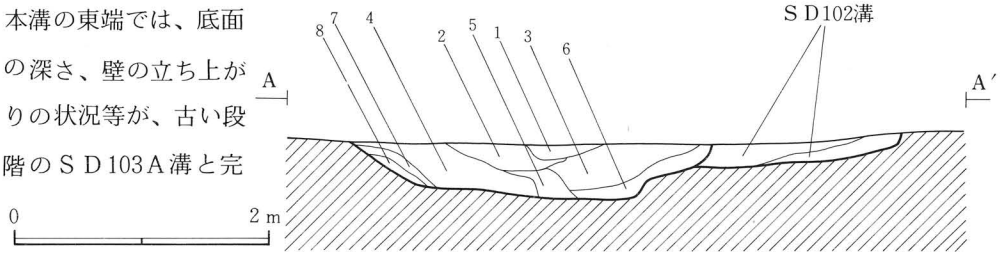
第37図　ＳＤ104溝



No.	種別	器種	出土遺構	層No.	法量 器高	法量 口径	法量 底径	外面 口縁部	外面 体部	外面 底部	内面 口縁部	内面 体部	内面 底部	登録No.
1	須恵器	甕	ＳＤ104	灰下白	3.8	15.0		ロクロナデ	ロクロナデ 回転ヘラケズリ		ロクロナデ	ロクロナデ		E－118
2	須恵器	高台付坏	ＳＤ104	灰下白			8.4		ロクロナデ	回転ヘラ切り ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ	E－119
3	砥石		ＳＤ104	灰下白					擦痕			擦痕		K－1

第38図　ＳＤ104溝出土遺物

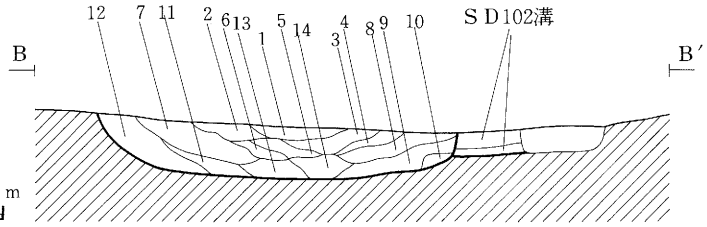
ＳＤ103溝と接属する本溝の東端では、底面の深さ、壁の立ち上がりの状況等が、古い段階のＳＤ103Ａ溝と完



層位	層No.	土色	土質	備考	
1	1	黒色(10YR2/1)	シルト	やわらかく、しまりがない。	
2	2	灰白色(10YR8/1)	火山灰	灰白色火山灰層。	
3	3	黒褐色(10YR3/1)	シルト		
	4	黒褐色(10YR3/1)	シルト	層No.3より、色調がやや明るい。	
4	5	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト		
	6	暗褐色(10YR3/3)	シルト		
	7	黒褐色(10YR3/2)	シルト		北側流入土の色調は、南側より明るい。
	8	暗褐色(10YR3/3)	シルト		
	9	暗褐色(10YR3/3)	シルト		
	10	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト		
	11	黒褐色(10YR3/2)	シルト		
	12	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト		
	13	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト		

第39図　ＳＤ104溝（１）

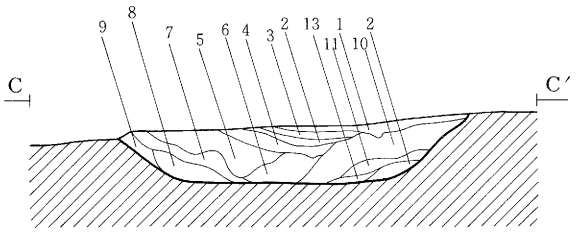
全に一致している。また、両溝の全体をみても、底面と壁の状況には、大きな違いは認められず、ほぼ同じ様相を示している。



層位	層No.	土色	土質	備考	
1	1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	上面に薄く灰白色火山灰が認められる。	
	2	黒褐色(10YR3/2)	シルト		
	3	黒褐色(10YR3/2)	シルト		
	4	黒褐色(10YR3/2)	シルト		
	5	暗褐色(10YR3/3)	シルト		
	6	黒褐色(10YR3/2)	シルト		
	7	褐色(10YR4/3)	シルト		北側流入土の色調は、南側より明るい。
	8	暗褐色(10YR3/3)	シルト		
	9	黒褐色(10YR3/1)	シルト		
	10	褐色(10YR4/6)	シルト	汚れている。	
	11	褐灰色(10YR4/2)	シルト		
	12	暗褐色(10YR3/4)	シルト		
	13	黒褐色(10YR3/2)	シルト		
	14	黒褐色(10YR3/2)	シルト		

第40図　ＳＤ104溝（２）

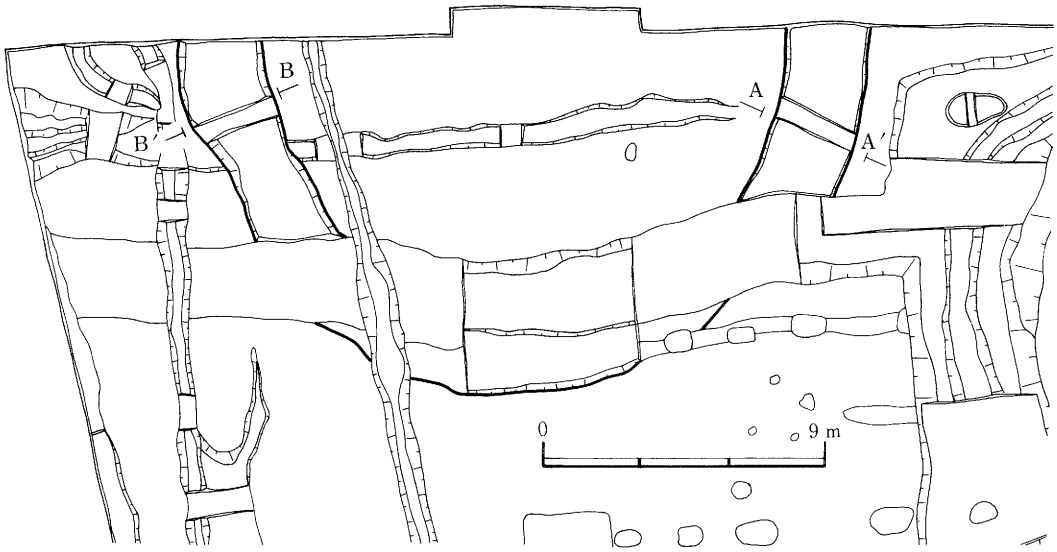
〔出土遺物〕　灰白色火山灰層の下層から、須恵器高台付坏・蓋、砥石が出土した。



層位	層No.	土色	土質	備考	
1	1	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト	上面に薄く灰白色火山灰が認められる。	
2	2	暗褐色(10YR3/3)	シルト		
	3	黒褐色(10YR3/2)	シルト		
	4	暗褐色(10YR3/3)	シルト		
	5	暗褐色(10YR3/3)	シルト		流入土の色調は、南側が明るい。
	6	黒褐色(10YR3/2)	シルト		
	7	暗褐色(10YR3/3)	シルト		
	8	暗褐色(10YR3/2)	シルト		

第41図　ＳＤ104溝（３）

ＳＤ 102 溝

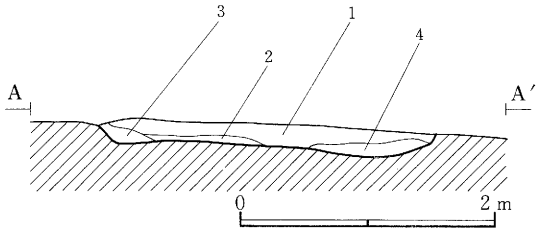


第42図　ＳＤ102溝（１）

〔確認面〕　地山面で確認した。

〔重複〕　ＳＤ104溝と重複しており、これより古い。

〔位置・規模〕　調査区の北側で、南半分が検出された。本遺溝は円形周溝になると



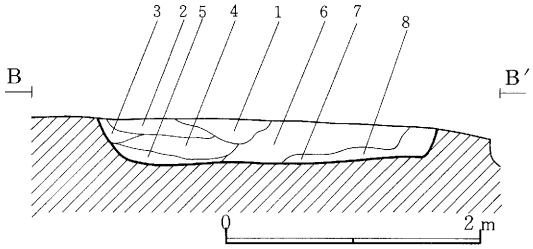
層位	層No.	土色	土質	備考
1	1	黒褐色（10YR3/1）	シルト	炭化物を若干混じえる。しまりがない。
2	2	黄褐色（10YR5/6）	シルト	
	3	褐色（10YR4/4）	シルト	汚れている。
	4	黄褐色（10YR5/6）	シルト	汚れた地山粒を多量に混じえる。

第43図　ＳＤ102溝（２）

思われ、径は、溝の外側でとれば22.5ｍになる。溝の幅は、2.8ｍ～3.2ｍ。

〔堆積土〕　自然堆積によって埋まっている。

〔底面・壁〕　底面は比較的平坦であるが、



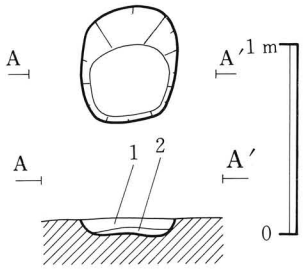
層位	層No.	土色	土質	備考
1	1	暗褐色(10YR2/3)	シルト	やわらかく、しまりがない。
	2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	
	3	褐色(10YR4/4)	シルト	
	4	褐色(10YR4/4)	シルト	
	5	黄褐色(10YR5/6)	シルト	汚れている。
2	6	黒褐色(10YR3/1)	シルト	炭化物を多量に混じえる。しまりがない。
3	7	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山細粒を多量に混じえる。

第44図　ＳＤ102溝（３）

若干の凹凸がある。壁は、最も保存の良いところで40cm残っている。

〔出土遺物〕　無し。

ＳＫ92土壙



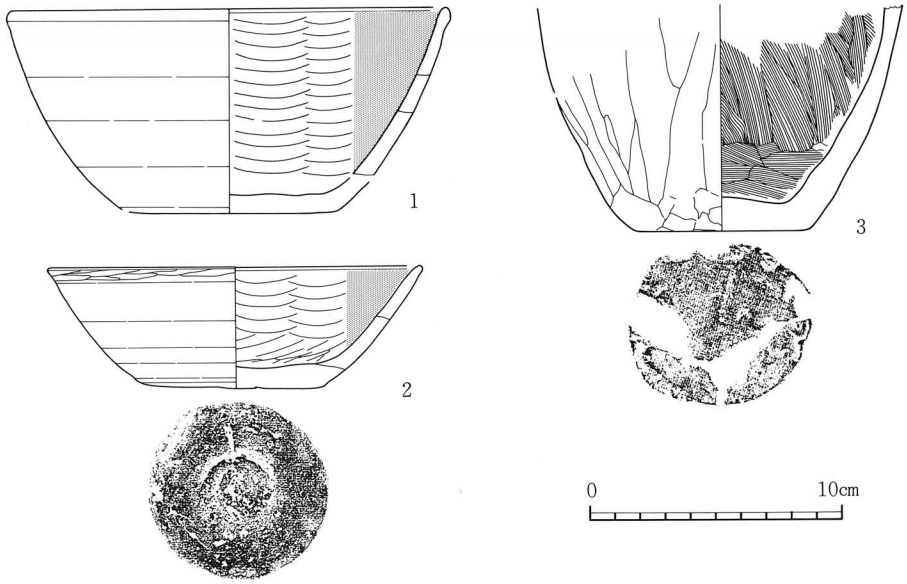
〔確認面〕　地山面で確認した。

〔平面形・規模〕　東西にわずかに長い隋円形を呈する。長軸60cm、短軸50cm。

〔堆積土〕　堆積土は、２層認められた。第１層は、黒褐色のシルトである。第２層は、にぶい赤褐色のシルトで、焼土が充満している。

層位	層No.	土色	土質	備考
1	1	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト	
2	2	にぶい赤褐色(2.5YR5/4)	シルト	焼土粒を多量に含んでいる。

第45図　ＳＫ92土壙



No.	種別	器種	出土遺構	層No.	法量 器高	法量 口径	法量 底径	外面 口縁部	外面 体部	外面 底部	内面 口縁部	内面 体部	内面 底部	登録No.
1	土師器	坏	ＳＫ92	2	(8.2)	17.5	(8.5)	ロクロナデ	ロクロナデ		ミガキ黒色	ミガキ黒色		D－19
2	土師器	坏	ＳＫ92	2	4.9	14.9	7.1	ミガキ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	ミガキ黒色	ミガキ黒色	ミガキ黒色	D－20
3	土師器	甕	ＳＫ92	2			7.0		弱いケズリ	ナデ		ナデ	ナデ	C－55

第46図　ＳＫ92土壙出土遺物

〔壁〕　丸味を帯びてゆるやかに立ち上がっている。残存壁高は、10cm。

〔底面〕　周縁がやや凹んでいる。

〔出土遺物〕　第２層から、ロクロ使用の土師器坏２点（うち１点は底部を欠く）、ロクロ不使用の土師器甕１点（上半部を欠く）が出土した（第46図）。

第46図２の土師器坏の体部下端には、弱い砂粒の動きが観察されるが、これが手持ちヘラケズ

リによるものかどうかは、判然としない。

ＳＫ95土壙

調査区南西隅で検出した。大半は調査区外にあり、規模・平面形は不明である。堆積土の状況から、この土壙は人為的に埋めもどされたと考えられる。縄文土器と土師器の小片が出土した。

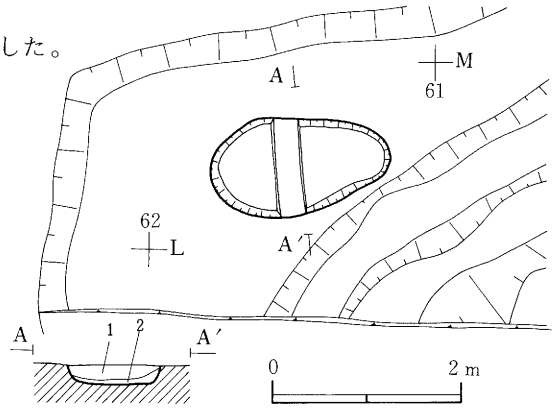
第10表　ＳＫ95土壙出土遺物破片集計表

種別	器種	部位	器面調整 外面－内面	計
土師器	甕	体部	不明－不明	1
合計				1
須恵器	坏	口縁部	ロクロナデ－ロクロナデ	1
合計				1
縄文土器	不明	体部	縄文－不明	1
合計				1
総計				3

ＳＫ109土壙

〔確認面〕　ＳＤ103溝北西隅の底面で確認した。ＳＤ103溝の底面からは、本土壙と後述する３基の土壙（ＳＫ106～108）が検出されている。このうち全体の規模が明らかとなったのは、本土壙のみであり、その他の３基の土壙は断面で確認している。

〔平面形・規模〕　東西に長い隋円形を呈する。規模は、長軸1.9ｍ、短軸1.0ｍ。



層位	層No.	土色	土質	備考
1	1	にぶい黄褐色(10YR 5/3)	シルト	人為堆積土。地山ブロックを多量に混じえる。
2	2	暗褐色(10YR 3/3)	シルト	人為堆積土。地山ブロックを多量・炭化物を少量混じえる。

第47図　ＳＫ109土壙

〔堆積土〕　２層認められた。いずれも人為堆積土と考えられる。第１層は、地山ブロックを多量に混じえるにぶい黄褐色のシルトである。第２層は、暗褐色のシルトで、地山ブロックを中量混じえている。長さ20cmほどの炭化材が出土した。

〔壁〕　ゆるやかに立ち上がっており、壁高は20cmある。

〔底面〕　比較的平坦であるが、中央がやや凹んでいる。

〔出土遺物〕　無し。

ＳＫ106～108土壙

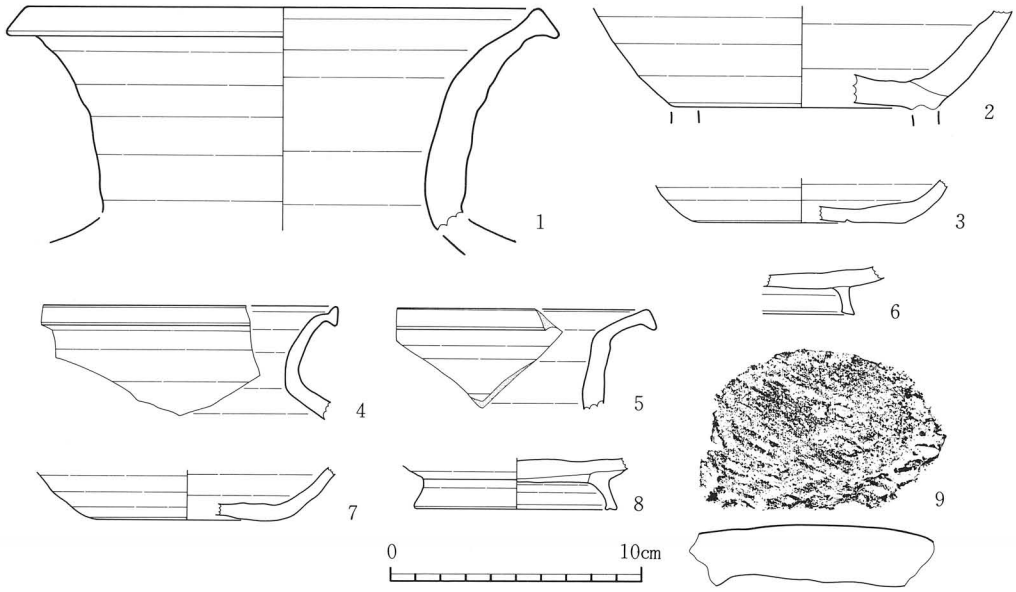
いずれもＳＤ103溝の底面で検出した（第23・27・29図）。これらの土壙は、すべて断面で確認したものであるため、平面形・規模については不明である。堆積土は、前述したＳＫ109土壙の特徴に近似しており、人為堆積土と考えられる。

ＳＫ110土壙

ＳＩ96住居跡を破壊している土壙である。北辺は、ＳＩ96住居跡の北辺とほぼ一致している。平面形は方形かと思われるが、調査区外にひろがっているため、判然としない。

遺構外の出土遺物

表土剝離の際に須恵器を主体として若干の遺物が出土した（第48図）。



No.	種別	器種	出土遺構	層No.	法量 器高	法量 口径	法量 底径	外面 口縁部	外面 体部	外面 底部	内面 口縁部	内面 体部	内面 底部	登録No.
1	須恵器	甕	遺構外			24.0		ロクロナデ			ロクロナデ			E－120
2	須恵器	壺	遺構外				(10.0)		ロクロナデ	切り離し不明 ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ	E－121
3	須恵器	坏	遺構外				(8.2)		ロクロナデ	回転ヘラ切り 軽いナデ		ロクロナデ	ロクロナデ	E－122
4	須恵器	甕	遺構外					ロクロナデ			ロクロナデ			E－123
5	須恵器	甕	遺構外					ロクロナデ			ロクロナデ			E－124
6	須恵器	高台付椀	遺構外						ロクロナデ	回転ヘラ切り？ ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ	E－125
7	須恵器	坏	遺構外				(7.2)		ロクロナデ	回転ヘラ切り		ロクロナデ	ロクロナデ	E－126
8	須恵器	高台付椀	遺構外				8.0		ロクロナデ	回転ヘラ切り		ロクロナデ	ロクロナデ	E－127
9	瓦	軒丸瓦？	遺構外						平行叩キメ					F－2

第48図　第７次調査遺構外出土遺物

第８次調査

所在地　城生野大堀

期　間　昭和63年11月４日～11月24日

面　積　142㎡

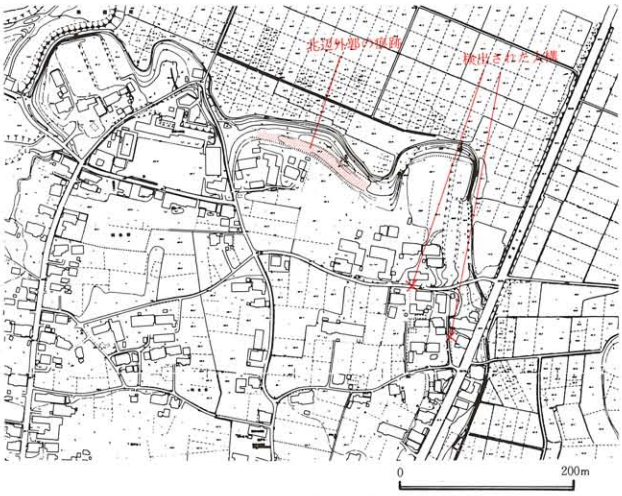
本調査は、城生野地区内の水道管埋設工事に伴う立合調査である。調査の対象となったのは、台地北東部を東西に走る農道大堀線、ならびにこの大堀線と第５次調査を実施した農道儀平線とを結ぶ道路である。

この調査の結果、水道管埋設溝断面から、竪穴住居跡３棟、多数のピット・溝等が検出された。このうち、調査区の東側２ケ所で検出された大溝は、土層の堆積状況が一致しており、同一遺構と考えられた（第49図）が、この遺構の堆積土中には、10世紀前半に降下したとみられる灰白色火

山灰層（庄子・山田：1978.3）が厚く堆積していることから、古代のものであることは確実である。

ところで、本遺跡では、現在でも富野小学校の東側にまだ完全に埋まりきっていない大溝と、これに接して走る土塁の痕跡を観察することができる。これらは既に、発掘調査によって伊治城の北辺外郭施設であることが判明してる（宮城県多賀城跡調査研究所：1978.3）が、今回検出された大溝は、このあたり一帯の地形からみると、これに連続する東辺外郭線である可能性がきわめて高い。

なお、この大堀線は、平成2年度に農道整備事業に伴って全面を発掘調査する予定となっているので、詳細な検討は、この調査時に加えることにしたい。



第49図　第8次調査区位置図

第 9 次 調 査

所在地　城生野要害

期　間　平成元年2月6日～2月12日

面　積　504㎡

本調査は、遺跡北西部を走る農道別当線の整備事業に伴う立合調査である。このあたりの地形は、台地西端にある段丘崖へむかってゆるやかに傾斜しているが、東側は比較的平担な地形となっており、大きな削平も受けていない。このことから、この農道の東半部には、竪穴住居跡をはじめとする多数の遺構の存在が予想された。そこで、農地整備課との協議において、工事にあたっては土盛りをし、遺構には影響を与えないようにすることをとり決めた。

第50図　第9次調査区位置図

その結果、調査の方法は立ち合いとし、平成元年2月6日から1週間にわたって実施した。発見遺構はない。

Ⅵ 考　　察

第 5 次 調 査

本調査は、農道儀平線の整備事業にもとづいて実施したものである。その結果、竪穴住居跡７棟、土壙２基、多数の溝・ピット等が検出された。ここでは、このうち精査を実施したＳＩ54住居跡、ＳＫ89・90土壙について検討を行う。

ＳＩ 54住居跡

本住居跡では床面から６点の図示可能な土器が出土した（第８図）。

土師器甕は、いずれもロクロ不使用である。全体の器形のわかるものは無いが、口縁部下端には軽い段があり、底部には木葉痕が残る。このような特徴をもつ土師器甕は、国分寺下層式（氏家：1957.3）に一般的にみられる。

須恵器坏は、低平な器形でヘラ切り底である。類例としては、色麻町上新田遺跡第１号住居跡にみられ、表杉ノ入式初期の段階の土師器と共伴している。

また、須恵器高台付坏は、安定感のある比較的大形の深い坏部のものである。これと器形・法量の酷似したものは、本遺跡のＳＩ04住居跡から出土している（宮城県多賀城跡調査研究所：1978.3）。この住居跡は、火災によって焼失しているため、使用段階での土器の組成をそのままの状態で留めているが、共伴する土師器の組成をみると、ロクロ使用・不使用の坏・甕が混在しており、国分寺下層式終末から表杉ノ入初期にかけての様相を示している。

以上の点からみて、本住居跡出土の土器は、国分寺下層式から表杉ノ入式初期の幅のなかでとらえられる。したがって、住居跡の年代としては、８世紀末～９世紀初頭と理解される。

ＳＫ89・90土壙

この２基の土壙は、整った長方形を呈しており、規模の点でも比較的近似している。

このうちのＳＫ90土壙では、第１層から炭や焼土に混じって細片となった骨片が出土したことから、土壙墓の可能性が考えられた。しかし、壁・底面に焼面が認められないこと、骨片の分布は第１層でも上部に限られていたことから、断面することはできなかった。

なお、ＳＫ90土壙の第２層からは、国分寺下層式の特徴を示す土師器甕の破片が３点出土したが（第13図）、これらが遺構に直接伴うものであるかどうかは不明である。

第 7 次 調 査

本調査は国庫補助事業計画にもとづいて実施したもので、唐崎100、100－２、100－５を調査の対象とした。その結果、竪穴住居跡２棟、溝２条、土壙７基等が検出された。ここでは、ＳＤ103・ＳＤ104溝を中心に考察を加えたい。

ＳＩ71住居跡

本住居跡の年代決定資料には、支脚ならびに床面上から出土した土器がある。このうち図示できたものは、土師器椀・甕、須恵器坏・蓋・甕の12点である（第19図）。

まず、土師器椀（第19図４）についてみてみたい。これは、特異な器形ではあるが、外面の口縁部下端に軽い段があり、内・外面の器面調整がミガキである。したがって、氏家和典氏が設定した国分寺下層式（氏家：1957.3）のなかでとらえられる。

土師器甕のうち、図示できたものは、いずれもロクロ不使用のものである（第19図１～３•5）。しかし、支脚のオサエとして使用され、小破片のため図示できなかったもののなかには、ロクロ使用で、平行叩き目の残るものが２点認められる（第７表）。こういった特徴を示す土師器甕の類例は、色麻町上新田遺跡から豊富に出土しており、表杉ノ入式初期の段階に位置づけられている（小井川：1981.3）

須恵器坏（第19図８・９・10）は、いずれもヘラ切り底のものである。このうち全体の器形のわかる第19図10は、器高がやや高く口縁・体部が直線的に立ち上がるもので、類例としては、志波姫町糠塚遺跡第15号住居跡、色麻町上新田遺跡第１号住居跡、宮崎町早風遺跡第９・12号住居跡にみとめられる。これらは、糠塚遺跡で国分寺下層式の土師器、上新田・早風遺跡で表杉ノ入式初期の土師器とそれぞれ共伴している。

また、須恵器蓋（第19図６）は、前述した糠塚遺跡第15号住居跡から類例が出土している。

以上の点からみて、これらの土器は大まかに国分寺下層式～表杉ノ入式初期の幅のなかで把えることが可能である。したがって、住居跡の年代については、８世紀後半～９世紀初頭のなかで考えておきたい。

ＳＩ96住居跡

本住居跡からは出土遺物がまったく無く、また、その他の遺構との重複関係によってある程度の年代幅をおさえることもできない。したがって、年代は不明である。

ＳＫ92土壙

本土壙からは、焼土が充満し、底面を直接覆っている第２層から、土師器坏２点、甕１点が出

土した（第46図）。

焼土が、この土壙内で形成されたものか、あるいは他所から運び込まれたものかについては明らかでないが、ここでは、これらの土器を基本的に土壙に伴う遺物と考える。

土師器坏は、いずれもロクロ使用のものである。したがって、東北地方南部の土師器編年（氏家：1957.3）にあてはめると表杉ノ入式に該当し、まず大まかに平安時代という年代が与えられる。

表杉ノ入式の細かな変遷については、法量の変化、底部切り離し技法、再調整の種類と有無、共伴する須恵器・赤焼土器等の検討から、幾つかの試論が発表されているが、丹羽茂は、宮城県内のロクロ導入期の土師器坏の変遷を亘理町宮前遺跡第20号住居跡（８世紀末～９世紀初頭）→白石市青木遺跡第21号住居跡→蔵王町東山遺跡土器溜（９世紀中葉付近）と整理した（丹羽：1983.3）。

本土壙出土の土師器坏のうち全体の器形のわかる第46図２は、ヘラ切り底で、内面のミガキは井桁状である。ロクロ目はあまり明瞭ではなく、口径と底径の比は、１：0.48。全体に厚手のつくりであるが、とくに底部は分厚い。

そこでこれらの特徴を上記の土器群と比較してみると、口径と底径の比では、１：0.46前後に集中する東山遺跡土器溜に最も近い。しかし、ここでは、回転糸切り底でミガキが方射状のものが主体を占めており、この点では、本土壙のものと異なっている。

一方、口径と底径の比という点では異なるが、宮前遺跡第20号住居跡の土器群とは、ヘラ切り底で内面のミガキが井桁状であるということ、さらにはロクロ目が明瞭でなく、底部が分厚いという点で一致している。

このように、本土壙出土の土師器坏は、これら３つの土器群の諸特徴をかねそなえているといえる。したがって、本土壙の年代については、これらの年代幅である８世紀初頭～９世紀中葉のなかでとらえておきたい。

ＳＫ 106 ～ＳＫ 109 土壙

これらの土壙は、いずれも前述したＳＤ103溝の底面で検出された。したがって、この溝より古いかあるいはこの溝に伴う土壙であると考えられる。そのいずれかについては、具体的な決め手に欠けているが、ここでは後者の可能性を指摘しておきたい。

ＳＤ 103 溝

本遺構は、堆積土中に10世紀前半に降下したとみられる灰白色火山灰（庄子・山田：1980.3）の厚い自然堆積層が認められることから、古代のものであることは確実である。

そこで、本溝から出土した遺物をこれまでの調査で発見された多数の竪穴住居跡出土の遺物と比較し、相互の関係を検討したい。比較にあたっては、改修後のＳＤ103Ｂ溝で、灰白色火山灰

層の下層から数量的にまとまって出土した須恵器坏（第32～33図、第８表）と竪穴住居跡出土の須恵器坏を対象とする。

ただし、溝から出土した遺物の場合、住居跡から出土した遺物のように、その場所で使用・廃棄されたものではなく、本来の使用の場から離れ、２次的に堆積したものである。しかも、そのなかには、溝の機能中に堆積したものだけではなく、溝の廃絶後に堆積したものも含まれていることが予想される。その意味では、これらは厳密な意味での遺構の年代を直接示すものとはいえない。比較をするにあたって、まずこのことを確認しておく。

なお、住居跡出土の資料は、床面・細部から出土したものを基本とし、参考として堆積土中から出土したものを加えた。

以上の点を踏まえ、①底部切り離し技法および再調整　②口径と器高の比　③口径と底径の比について検討し（第51～53図）、さらに個別的にも相互の比較を行った。その結果を要約すると、下記のようになる。

① ＳＤ103Ｂ溝では、ヘラ切り・静止糸切り・回転糸切りの３種類の底部切り離し技法が混在する。このうち、ヘラ切り・静止糸切り底のものには、再調整として手持ちヘラケズりの加わるものがある。このなかで最も多いのは、ヘラ切り・無調整のもので、全体の70％を占める。

一方、住居跡床面・細部出土の須恵器坏は、すべてがヘラ切り底である。これらは、無調整のものと手持ちヘラケズリの加わるものとにわかれるが、主体を占めるのは、ＳＤ103Ｂ溝と同じ無調整のもので全体の86％を占める。

② 口径と器高の比は、ＳＤ103溝では28％～35％、住居跡床面・細部では25％～34％の範囲内でほぼおさまっており、両者とも30％前後に集中する。この傾向は、住居跡の堆積土中から出土したものも同様である。

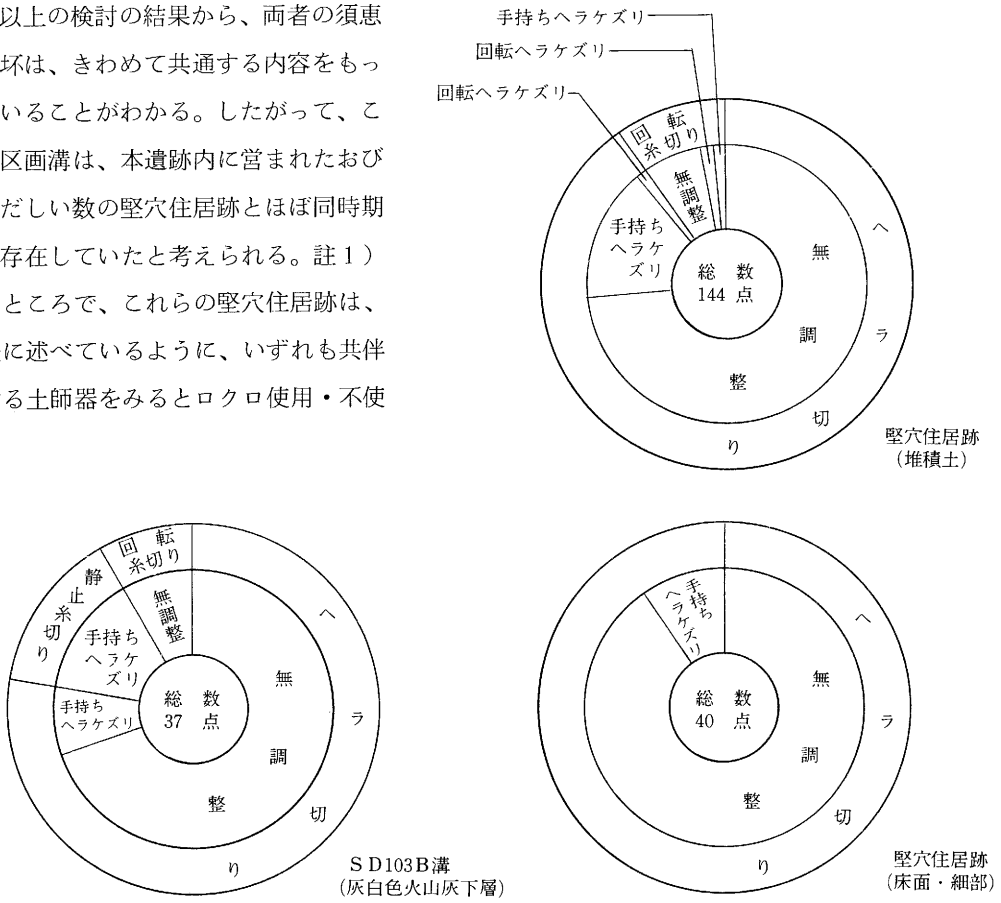
③ 口径と底径の比は、ＳＤ103Ｂ溝では、51％～61％の範囲内におさまっており、55％前後に最も集中する。一方、住居跡床面・細部出土のものは、ややばらつきがあるが、大きくみれば、ＳＤ103溝とほぼ同じ、50％～61％の範囲内におさまっている。

④ ＳＤ103Ｂ溝と住居跡床面・細部から出土したものを、個別に比較してみた結果、以下のものが類似していた。

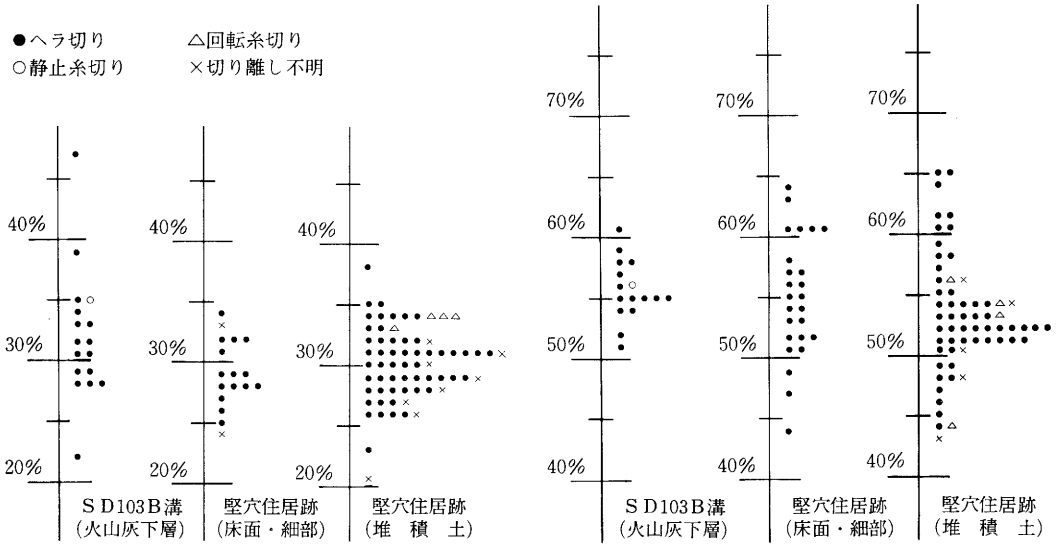
ＳＤ103Ｂ溝　（本書第31図５）	ＳＩ31Ｂ住居跡据え穴粘土帯 （宮城県多賀城跡調査研究所：1980.3 第11図５）
ＳＤ103Ｂ溝　（本書第31図10）	ＳＩ13住居跡カマド （宮城県多賀城跡調査研究所：1979.3 第11図５）
ＳＤ103Ｂ溝　（本書第32図１）	ＳＩ13住居跡床面 （宮城県多賀城跡調査研究所：1979.3 第12図１）
ＳＤ103Ｂ溝　（本書第32図６）	ＳＩ13住居跡床面 （宮城県多賀城跡調査研究所：1979.3 第12図２）
	ＳＩ25住居跡床面 （宮城県多賀城跡調査研究所：1979.3 第17図２）

以上の検討の結果から、両者の須恵器坏は、きわめて共通する内容をもっていることがわかる。したがって、この区画溝は、本遺跡内に営まれたおびただしい数の竪穴住居跡とほぼ同時期に存在していたと考えられる。註１）

ところで、これらの竪穴住居跡は、既に述べているように、いずれも共伴する土師器をみるとロクロ使用・不使



第51図　須恵器坏底部の状況



第52図　須恵器坏口径と器高の比〈口径：100〉　第53図　須恵器坏口径と底径の比〈口径：100〉

用の坏・甕が混在するのを基本としており、その年代は、国分寺下層式後半～表杉ノ入式初期の比較的短かい期間に集中している。この年代幅は、いうまでもなく、文献上に伊治城が記録されている期間（767～796）とほぼ一致しており、本遺跡が伊治城跡であるとする考えの有力な根拠となっている（ただし、文献上では伊治城が796年以降にたどった消長について、何も記されてはいない）。

このようなことから、ＳＤ103Ｂ溝の性格は、伊治城の内部を区画するためのものであったと結論づけることができよう。

また、改修される以前のＳＤ103Ａ溝の段階も、本遺跡の遺構・遺物のあり方からみれば、やはり同様の性格と考えるのが妥当であろう。

ＳＤ 104 溝

本溝は、ＳＤ103溝と同様に厚い灰白色火山灰の自然堆積層が認められ、しかも同溝と東端で接属していることから、伊治城内部の区画施設とみて間違いない。

ところで、本溝には掘り直しの痕跡がなく、１時期で廃絶したことが知られるが、２時期の変遷のあるＳＤ103溝との対応関係をみると、同溝の古い段階と底面・壁の状況が一致している。したがって、この溝は、ＳＤ103Ａ溝と同時に掘られた区画溝であるとみなされる。

ところが、ここで問題となることは、本溝の堆積土の状況は、新しい段階のＳＤ103Ｂ溝と一連のものであり、対応するはずのＳＤ103Ａ溝と共通する堆積土がまったく認められない。このことについては、改修されたＳＤ103Ｂ溝へ本溝の堆積土が流出してしまったため、その後は、ほぼ同じ状況下のもとで両溝の自然堆積が進行したためと推定される。

この遺構が、どの段階まで区画溝としての機能を果たしていたのかは明かでないが、改修・維持されたＳＤ103溝に較べれば、その役割は短かいものであったと考えられる。

ＳＤ 102 溝

本溝は、伊治城内部の区画施設であるＳＤ104溝に切られていることから、これより古いことは、この重複関係によって明らかである。

この溝と同じ形態をとる円形の周溝は、本遺跡の南東1.5㎞にある志波姫町鶴ノ丸遺跡で発見されている。この遺跡では、塩釜式土器第ⅡＢ段階（丹羽：1985.3）の竪穴住居跡５棟・方形周溝墓３基と共に、円形周溝５基が確認された。報告では、その性格を方形周溝墓と同じく同時期の集落に伴う「周溝墓」と推定している（手塚：1981.9）。

本遺跡では、故松森明心氏が収集した遺物のなかに、塩釜式の焼成前底部穿孔壷があることから、「周溝墓もしくは小規模古墳の存在の可能性」が既に指摘されていた（丹羽：1985.3）。本溝は出土遺物が無く、性格をこの周溝墓と断定することはできないが、このような状況から、当

該遺構である可能性は高い。

なお、周溝墓は群集する傾向が強いので、今後の調査においても当該遺構の検出には、強い注意を払っておきたい。

註１)：本溝にみられる静止糸切り底で再調整の加わる須恵器坏(第32図９、第33図６・７・８・10)は、従来、多賀城創建期の瓦を焼成した色麻町日の出山窯跡群Ａ地点の年代観から、８世紀前半のものとされてきた。しかしながら、最近、松山町次橋窯跡（東北学院大学考古学研究部：1984.3）や利府町硯沢窯跡（宮城県教育委員会：1985.3）で、回転糸切り底ともものと併焼される例が確認され、この種の須恵器坏が、８世紀半ばまでは確実に存在することが明らかとなっている。一方、本遺跡では、これよりさらに年代の下降する８世紀末～９世紀初頭に位置づけられるＳＩ04住居跡（宮城県多賀城跡調査研究所：1978.3）とＳＩ91住居跡（本書）で、カマド内堆積土から静止糸切り底の高台付坏が出土している。これらは、床面からの出土ではないが、住居跡の年代からは大きくかけ離れたものではないと思われる。

さて、問題となる５点の坏のうち、全体の器形のわかる第32図９は、器形的には上記の３窯跡のものとは大きく異なっており、むしろ、本遺跡に一般的にみられるヘラ切り底の坏に近い。

したがって、これらの静止糸切り底の須恵器坏は、伊治城にともなうものと考えておきたい。

Ⅶ　ま　と　め

本書に収録した各調査の成果を要約すると、下記のようになる。

① 第５次調査は、遺跡中央から東へのびる農道儀平線を対象として実施した。その結果、竪穴住居跡７棟が発見され、この一帯にも竪穴住居跡の分布がひろがることが明らかとなった。

② 第７次調査は、遺跡中央からやや南寄りの位置に調査区を設定した。その結果、城柵内部の区画施設と考えられる溝２条が発見された。この２条の溝は、今後、伊治城の構造を知る上での具体的な手がかりになると思われる。

③ 第８次調査は、遺跡北寄りを東西に走る農道大堀線を対象として実施した。水道管埋設工事に伴う立合調査という限られたものではあったが、道路東端付近で、東辺外郭線を構成する大溝とみられる遺構が検出された。

④ 第９次調査は、遺跡西部を東西に走る農道別当線の整備事業に伴う立合調査である。発見遺構はない。

参　考・引　用　文　献

加藤・伊藤（1955.3）　「宮城県登米郡新田村字対島堅穴住居址群」『登米郡新田村史』

氏家　和典（1957.3）　「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会

氏家　和典（1961.3）　「土器」『陸奥国分寺跡発掘調査報告書』宮城県教育委員会

小井川・高橋（1977.12）　「宮城県対島遺跡出土の土器」『宮城史学』第５号

宮城県多賀城跡調査研究所（1978.3）　『伊治城跡Ⅰ』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第３冊　宮城県多賀城跡調査研究所

小井川・手塚（1978.3）　「糠塚遺跡」『宮城県文化財発掘調査略報』宮城県文化財報告書第53集　宮城県教育委員会

宮城県多賀城跡調査研究所（1979.3）　『伊治城跡Ⅱ』多賀城関連遺跡発掘調査報告書４冊　宮城県多賀城跡調査研究所

小川　淳一（1980.3）　「青木遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財報告書第71集　宮城県教育委員会

山田・庄子（1980.3）　「宮城県に分布する灰白色火山灰について」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1979－昭和54年度発掘調査概報－』宮城県多賀城跡調査司究所

宮城県多賀城跡調査研究所（1980.3）　『伊治城跡Ⅲ』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第５冊　宮城県多賀城跡調査研究所

小井川和夫（1981.3）　「上新田遺跡」『長者原貝塚塚・上新田遺跡』宮城県文化財調査報告書第78集　宮城県教育委員会

手塚　　均（1981.3）　「鶴ノ丸遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ』宮城県文化財調査報告書第81集　宮城県教育委員会

丹羽・阿部・小野寺（1981.3）　「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ』宮城県文化財調査報告書第77集　宮城県教育委員会

森　　貢喜（1980.3）　『早風遺跡発掘調査報告書」宮城県宮崎町文化財調査報告書第３集　宮崎町教育委員会

森　　貢喜（1981.3）　『水入遺跡発掘調査報告書』宮城県文化財調査報告書第84集　宮城県教育委員会

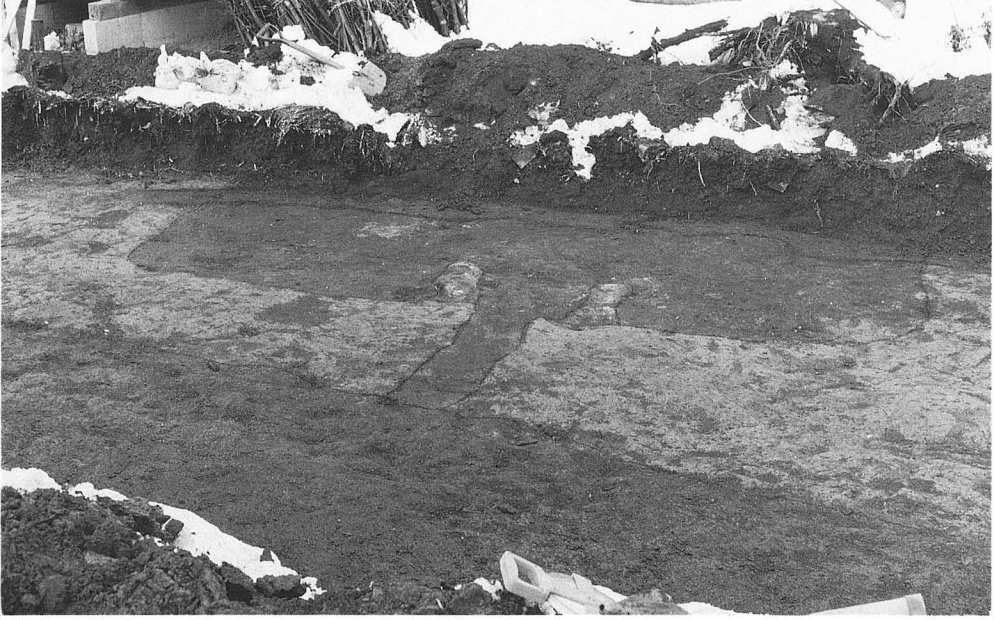
丹羽　　茂（1983.3）　「宮前遺跡」『朽木橋横穴古墳群・宮前遺跡』宮城県文化財調査報告書第96集　宮城県教育委員会

丹羽　　茂（1985.3）　「今熊野遺跡」『今熊野遺跡・一本杉遺跡・馬越石塚』宮城県文化財調査報告書第104集　宮城県教育委員会

高橋　守克（1987.3）　『須恵糠塚遺跡』河南町文化財調査報告書第１集　河南町教育委員会

写　真　図　版

図　版　1



ＳＩ58住居跡
（南から）

ＳＫ89土壙
（南から）

ＳＫ90土壙
（南から）

図版２　調査区東半遠景（南西から）

図版３　上：ＳＤ104溝（西から）　下：ＳＤ103・104溝（南東から）

図　版　4

上：ＳＤ103Ｂ溝
（南から）

下：ＳＤ103・104溝
（南東から）

図　版　5

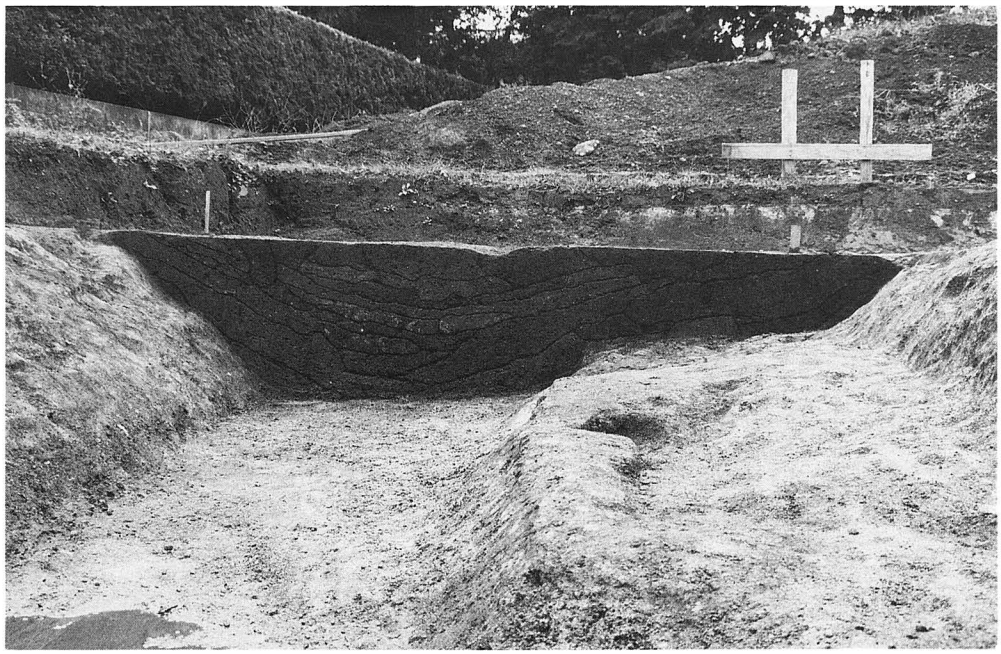
ＳＤ103溝断面
（西から）

ＳＤ103溝断面
（北東から）

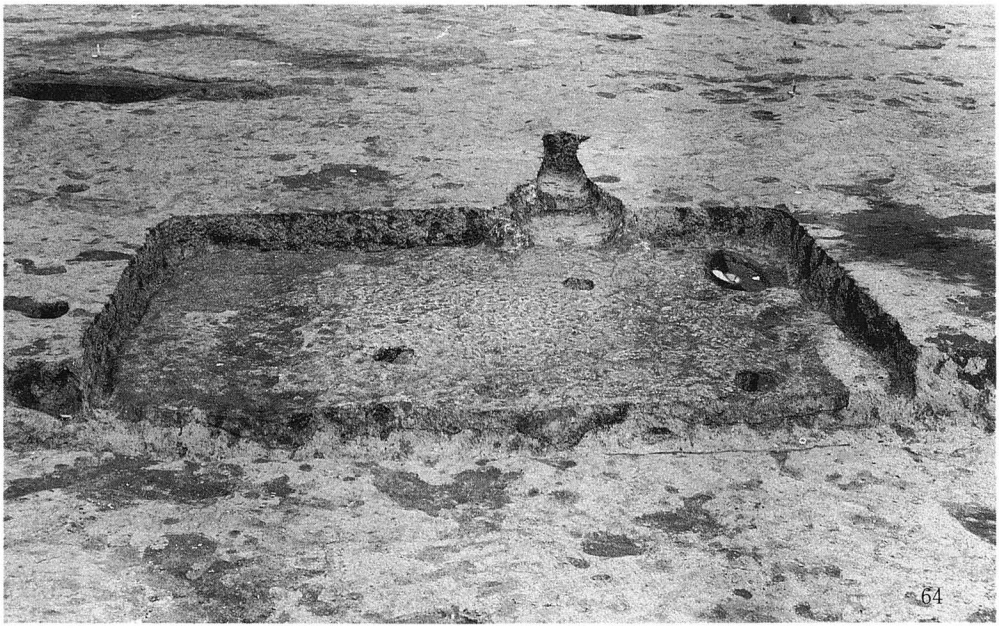
ＳＤ103溝断面
（南から）

図　版　6

ＳＤ103溝断面
（南から）



ＳＤ103溝断面
（北から）



ＳＩ91住居跡
（西から）

付　　編

―鹿島堰改修以前の伊治城跡西辺外郭の状況―

本遺跡の北辺の一部では、現在でも外郭線の痕跡としてまだ完全に埋まりきっていない大溝とこれに接して走る土塁を観察することができる。しかし他辺では、外郭施設の痕跡はまったく認められず、どの位置をどのような構造で走っていたのか知ることができない。その原因としては、様々なものが考えられるが、西辺に関しては、昭和38年の鹿島堰の改修工事による破壊が大きく影響しているようである。

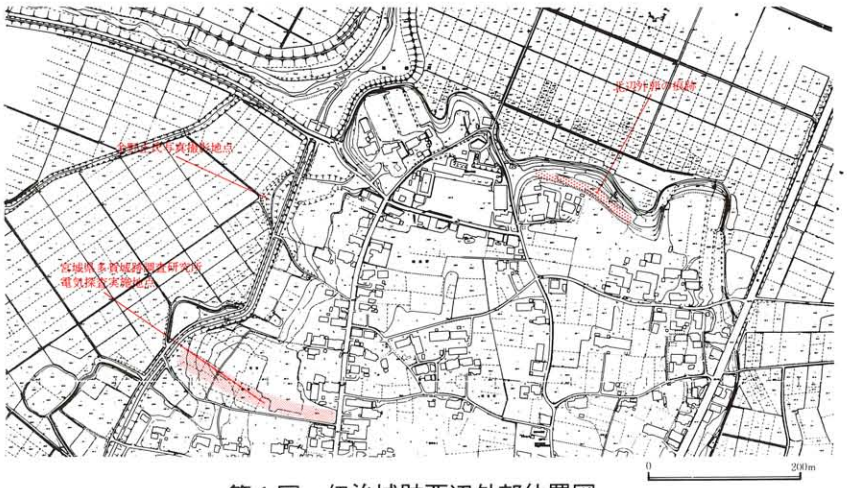
さて、ここに紹介する４枚の写真は、金野正氏（宮城県文化財保護地区指導員）が、昭和37年４月22日に、本遺跡の要害地区で撮影したものである。

この写真によれば、明らかに台地縁辺に沿って走る大溝と土塁が観察され、当時、この場所に北辺外郭と同じような状況で、西辺外郭の痕跡が残存していたことを知ることができる。金野氏の記憶によれば、「これらの写真を撮影した時は、鹿島堰の改修前で、周囲の林は切り払われ、大溝と土塁の痕跡がはっきりとわかった。また、「土塁と大溝の痕跡は、図版１上の写真を撮影した地点からはじまっており、南へむかってやや蛇行しながら、100ｍ以上は続いていた。」という。

以上の事実から、本遺跡の西辺外郭線は、要害地区でみる限り、北辺と同じように土塁と大溝で構成されていたとみなされる。

なお、鹿島堰改修後の昭和53年に宮城県多賀城跡調査研究所は、奈良国立文化財研究所の協力を得て、本遺跡の同じ要害地区（第１図）で、西辺外郭の電気探査を実施した。この場所は、金野氏が先の図版１上の写真を撮影した地点から、南へ約200ｍの位置にある。しかし、その結果については、「丘陵末端部から約30ｍの地点で溝状の落ち込みが検出された。」ものの、「この溝は、南北方向の延びが不明確で、外郭線大溝とは断定しかねた。」と、報告されている（宮城県多賀城跡調査研究所：1979.3）。

なお、末筆ながら、今回の写真の公表にあたり、特段の御配慮をいただいた金野正氏に厚く御礼申し上げます。



第１図　伊治城跡西辺外郭位置図

図版１　上・下　伊治城跡西辺外郭線の痕跡（要害地区）

図版２　上・下　伊治城跡西辺外郭線の痕跡（要害地区）

築館町文化財調査報告書　第２集

伊　治　城　跡

―昭和63年度発掘調査概報―

印　刷　平成元年３月20日
発　行　平成元年３月31日

発　行　築　館　町　教　育　委　員　会
宮城県栗原郡築館町薬師三丁目6―1
印　刷　小　野　寺　印　刷　所